

天武天皇三年三月庚戌朔丙辰。對馬國司守忍海造大國言。銀始出于當國。即貢上。由是大國授小錦下位。凡銀有倭國。初出于此時。故悉奉諸神祇。亦同賜小錦以上大夫等。丙辰三月七日是此邦銀貨の始發して。天皇より第四十代一千三百三十四年後なり。唐高宗上元元年二月。當る。其掘出せし山。三代實錄。貞觀七年八月十五日癸亥。太宰府言。對馬島銀穴。在下縣郡。自高山底穿鑿。掘入四十許丈。白晝執炬而得。入止あり。其銀を貢上せし文。朝野群載。對馬貢銀記あり。其山は社を建つる。神名式。對馬島下縣郡銀山上神社是なり。此貢銀。白石の五事略。天武白鳳三年三月對馬より銀を貢。是延喜式。太宰府より毎年銀八百九十兩づゝ貢せし見えし。對馬より出だせる所なり。此後皇鳥羽。堀川の頃。對馬より銀出でて見えたりといへり。夫々。同八年十月戊申朔甲子。新羅遣河食金項那沙食薩生朝貢也。調物金。銀。鐵。鼎。錦。布。馬。狗。騾。駱駝之類。十餘種亦列獻物。天皇皇后太子貢金。銀。刀。旗之類。各有數。是時。金銀二重。一獻りし事。後十年十月と云ふ。同十年四月己亥朔辛丑。立禁式九十二條。因以詔之曰。親王以下至于庶民。諸所服用。金銀

珠玉。紫錦繡綾及纏袴冠帶并種々雜色之類。服用各有差。是の金銀富有して。庶民よいたるまで服用する故。其禁式を立てたまふなり。同十月丙寅朔乙酉。新羅遣沙喙十吉。金忠平。木奈。末金。壹世。貢調。金銀。銅鐵。錦繡。鹿皮。細布之類。各有數。別獻天皇皇后太子金銀。鹿皮之類。各有數。是前八年十月。一獻る。同十二年四月戊午朔壬申。詔曰。自今以後。必用銅錢。其用銀錢。乙亥。詔曰。用銀莫止。是の和銀の出でし十年後の事なり。以前顯宗の朝より引さ續きて鑄たり。銀錢を考へ。詳ならせり。四月十五日。銀錢を禁じ。其四百後十八日。通用すべき詔あり。ある事と見ゆ。此年銅錢とある。外國貢上の銅を用ひたり。勿論なれど。何れの年一は鑄たりしや詳ならむ。和銅の出づる是より廿六年後。鑄錢司を置。朱鳥元年夏四月庚午朔戊子。新羅遣朝從。饒實。止細馬。一疋。騾一頭。犬二狗。鍍金器。及金銀。霞錦。綾羅。虎豹皮。及雜物之類。并百餘種。亦智祥。健勲等。別獻物。金銀。錦霞。綾羅。金器。屏風。鞍皮。絹布。雜物之類。各六十餘種。別獻皇后皇太子及諸親王等之物。各有數。是前八年十月又十年十月。一獻る。例はな



持統天皇二年二月庚寅朔辛卯。太宰獻新羅調賦金銀絹布皮銅鐵之類十餘物。并別所獻佛像。種々彩絹。鳥馬之類。十餘種。及霜林所獻。金銀彩色種々珍異之物。并八十餘物。  
是ハ天武の朝獻物ト。品種少々異ナリ

同五年秋七月庚午朔壬申。伊豫國司田中朝臣法麻呂等。獻宇和郡御馬山白銀三斤八兩銚一籠

是ハ據レバ。當時伊豫ヨリも銀を出ダセリ。銀一斤兩をいふハ。是を始トス。同ハハ。斤兩の名。漢書律曆志云。二十四銖爲兩。十六兩爲斤といふヨリ。今の清朝ト至るまで。彼土の銖兩ハ。大抵知れたレド。此邦幾兩幾分幾銖ト。延喜式ト載せたるハ。先輩同十の說多きも。各一理有りて。一決しがたし

又此歳より人ト銀を賜ふが例トナリて。九月己巳朔壬申。賜音博士大唐續守言。陸弘恪書博士百濟末士善信。銀人二十兩。同十二月戊戌朔己亥。賜醫博士務大參德自珍呪禁博士木素丁武沙宅万首。銀人二十兩。同六年二月丁酉朔丁未。陰陽博士沙門法藏道基。銀人二十兩とあり

同八年三月甲申朔乙酉。以直廣肆大宅朝臣麻呂。勳大貳壹忌寸八島。黃書連本實等。并鑄錢

同

是此邦鑄錢司を置ける始ナリ。和語連珠集云。持統天皇八年。鑄錢司の事始めて見ゆ。然れども。此時本邦ハ銅無シ。異邦より米たる所の銅トて。鑄たるなるべし

續日本紀云。文武天皇二年三月乙丑。因幡國獻銅鏡。同九月壬午。周芳國獻銅鏡。同十二月辛卯。令對馬島治金鏡

是ハ銅金とも掘り出でしまふナリ。鏡といふハ。生銅。生金の一名トて。鏡銀ハ本草崇全ト見ゆ。石州方言ト銀のとちといふ。金銀銅とも掘り出しのまハ。銅銀の如く東にたる形ナリ。石雜りたるといふハ。非ナリ。又銅の夏。金の夏といふも非ナリ。金銀の夏。金天工開物是を治て。竿金。板金となしおき。金貨。銀貨の類を造ると見えたり。今の銅ハ竿

と板とあるも。其遺形ならむ。されども。當時の金貨。銀貨のいかなる形なるや詳ならむ

同三年十二月庚子。始置鑄錢司。以直大肆中臣朝臣意美麻呂爲長官

是ハ文武の朝ト。銅鏡。金鏡もひく出づるより。鑄錢司を置さて鑄させ給ふナリ。大寶元年三月戊子。遣大肆凡海宿禰鹿于陸奥。治金。是ハ陸奥ト金出づることを聞か給ひて。其金を治しむると見ゆ。されども。何れの所ト



出づるの詳ならず。陸奥の所より多し金を出た事。後あるを見つべし。同三月甲午。對馬島貢金。建元為大寶元年。始依新令。改制官名位號。甲午の二十一日あり是此邦金貨の始發して。人皇より第四十二代一千三百六十一年後なり。唐中宗嗣聖十八年。當は皇后新羅の役より。此朝和金出づるまで。五百十三年の間。國家用ふる所の金貨。悉皆外國貢上の物なり。然るに。對馬島より此和金を貢するに因りて。文武帝五年三月廿一日。大寶と紀元あり。如是隋年代記云。大寶元三月廿一日。改三元號。始於此。是より以來。是此對馬島貢金。由是三月廿一日甲午改元大寶。歷代の年號連綿し。數千載に相續するに。全く是日本金貨の盛徳長久の兆とあるべし。此貢金の四年前十二月辛卯は治むる金鑄なり。故に是歲八月丁未。先是遣大倭國忍海郡人三田首五瀬於對馬島。治成黃金。至是とあり。又對馬島及郡司王典已上。進位二階。其出金郡司者二階。獲金人家部官道授正八位上。并純綿布銀段其戸終身百姓三年。又贈若大臣大伴宿禰御行首遣五瀬治金。因賜大臣子封百戸田四十町あり。當時金貨を貴重し給ふ事知るべし。金限圖録に。對馬國高木渥小判金。重四匁。津守高木二字號。載せたり。此貢金を砂金國史本文前段を考へざるあり。同三年五月己亥。紀伊國阿提。飯高。半滿三郡獻銀也。

是に據れば。當時紀伊國よりも銀を出だせり

元明天皇和銅元年正月乙未朔乙巳。武藏國秩父郡獻和銅詔曰云々。上改慶雲五年。而和銅元年為。而御世年號止定期の詔あり。是此邦銅貨の始發して。人皇より第四十三代一千三百六十八年後なり。唐中宗景龍二年。當は皇后新羅の役より。此朝和銅出づるまで。五百二十年の間。國家用ふる所の銅貨。悉皆外國貢上の物なり。先是文武の朝に。因幡。周防二國より銅鑛を獻りし事あれど。熟銅をらむ。此朝熟銅を獻るに因りて。慶雲五年正月十七日。和銅と改元あり。如是隋年正月十一日改元和銅。自武藏秩父郡二貢和銅。故同二月甲戌。始置催鑄錢司。是此邦和銅を以て錢を鑄る始して。文を和同開珎といふ。其後。歷代の鑄錢無し。最初和同開珎一錢を鑄るに。定例といふ。此錢泉貨に出づ。和銅を和同と作るに。當時者字の法なり。同五月壬寅。始行銀錢。秋七月丙辰。令近江國鑄銅錢。八月己巳。始行銅錢。是に催鑄錢司を置かれ。新に鑄たる銀錢。銅錢を行はる。故に始めて行ふといふ。同二年正月壬午。詔向者領銀錢。以代前錢。又銅錢並行。比奸盜遂利。私作濫鑄。紛亂公錢。自



今以後。私鑄銀錢者。其身沒官。行濫逐利者。加杖二百。加役常徒。知情不告者。各與同罪。是の新鑄の銀錢を。以前の銀錢に代へて。又新鑄の銅錢を並び行ふ。私鑄の者あり。故に此詔あるなり。

同二年三月甲申制。凡交關雜物。其物價銀錢四文以上。即用銀錢。其價三文以下。皆用銅錢。是の銀錢少きは因りて。先其價を貴くし。後是を廢して。專に銅錢を行はむが爲なり。同三年九月乙丑。禁天下銀錢。

是前年銀錢の價を貴くし。後又是を廢し。今年に至りて禁せむが爲なり。同四年冬十月甲子。私鑄の者を嚴重に制勅あり。同六年三月壬午。賣買田以錢爲價の詔あり。同七年九月甲辰の制。不得擇錢の勅あるも。銀錢を重し。銅錢を行ひ。濫錢を破らむが爲なり。元正天皇養老五年正月丙子。令天下百姓以銀錢。當銅錢二十五以銀一兩。當二百錢。行用之。

是の銀銅鐵の三品。其充用の制を定め給ふ。銀錢一文を以て。銅錢。鐵錢の廿五文に當りて。又銀一兩を以て。鐵錢百文に當りて。行ひ用ふ事を示し給ふ。鐵錢の此制を始とす。當時の銀一兩。鐵錢百文に當りて。行ひ用ふ事を示し給ふ。

同六年二月戊戌詔市頭交易元米定價。中更量用錢之便宜。欲得百姓之潤利。其用二百錢。當一兩銀。仍買物。貴賤價錢多少隨時平章。永以爲恒式。

是の前年銀一兩を一百錢に當て用ふべき制あれども。錢の價は高下あり。多少に因りてなれり。市頭にて交易する時。一兩を二百錢に當て。通用せよとなり。是歲九月庚寅。令伊賀。伊勢。尾張。近江。越前。丹波。播磨。紀伊等。始輸錢調とある。錢の多寡を知らむ爲と見ゆ。

聖武天皇天平二年三月丁酉。周防國能野郡牛島西汀。吉敷郡達理山所出銅。試加冶煉。並堪爲用。

是の文武の朝。周芳國獻銅錢とある種類ならむ。

同七年閏十一月庚子。更置鑄錢司。是の諸國より三貨おひし。出づるより。持統。文武。元明三帝の例に倣ひ。更置鑄錢司を置き給ふなり。

同二十一年二月丁巳。陸奥國始貢黃金。於是奉幣以告畿内七道諸社。是御世に所謂興州の貢金をなり。其堀り出だし。山の嶺徳帝紀に。陸奥國馳驛貢小田郡。



所出黄金九百兩。我國黄金從此始出焉といふ。小田郡の金華山なり。其山に社を建て  
 る。神名式曰。小田郡黄金山神社是なり。今この仙臺も此金を出だしたる金華山より起  
 れる名にて。陳子昂が春日登金華觀詩曰。白玉仙臺古といふよれり。金華山一曰。黄  
 金と水精とあるは因りてなり。仙臺城下。儒士の著る。與羽觀跡聞老志曰。陸奥の砂金も。もと小田郡陸奥山に  
 出づ。山に式は載する所の黄金山神社なり。後世其地を牡鹿郡に併せ。其山を金華山と  
 改む。古を失ふといふべしとあり

此貢金の。延喜式交易雜物曰。陸奥國砂金五十兩といひ。小右記曰。長元二年九月。前陸  
 奥孝義志砂金十兩といひ。東鑑曰。文治二年十月。陸奥國今年貢金四百五十兩といふ物  
 にて。五津略曰。其後。後白河の頃まで。參らせしなりとあり。後世に傳ふる陸奥國永字小  
 判金一名秀即此なりと。其始は對馬の貢銀と。大抵同じ。貢賦なりし。此金の以諸書は  
 多く載せて。辨價せし高く。人のいひつたへて異朝までも聞さしむ。東西洋考形勝考東  
 奥州産黄金處といひ。備引備齊然曰。東奥州産黄金。西別島出白銀。以爲貢賦といふ  
日本傳其詳あり。是より七年前。聖武帝天平十五年冬十月辛巳。詔曰。傳以天平十五年

歲次癸未十月十五日。發菩薩大願。奉造盧舍那佛金銅像一軀。盡國銅而鑄象。削大山以構  
 堂。及法界爲朕知識。遂使同蒙利益共致菩提。と云々。同月乙酉。皇帝近江の紫香樂宮に  
 御む。右大佛の像を造り奉らむため。始めて寺地を開きたまふ。此時。行基法師弟子を  
 率ゐて。多くの衆生を勧誘せり。同十六年十一月壬申。近江の甲賀寺に。右大佛の像を  
 だて。骨柱出米たると。皇帝みづからその繩を引きたまふ。同十七年八月。其大佛を  
 南都東大寺に移さる。此佛像を鑄る。數萬の金銅を用ひたり  
 朝野群載。東大寺大佛を鑄る時。熟銅七十三萬九千五百六十斤。白錫二萬二千六百  
 三十八斤。練金一萬四百三十六兩。銅五萬八千六百二十兩。炭一萬六千三百五十六石  
 といふ。乃其像を裝飾せむと給へども。國家の金銅を多く用ひ盡されれば。其料金無く。是  
 非異朝へ乞ひ求めむと給ふとき。陸奥國守百濟王敬福より黄金を貢む。于時天平二  
 十一年二月丁巳。二十日なり。天皇限りなく感悅し給ひ。同年夏四月甲午朔。幸東大寺。御盧  
 舍那佛前殿。北面對像。勅。上陸奥國守從五位上百濟王敬福。伊部内小田郡に黄金在。奉  
 獻此。造開食。爲快。備貴。惟念。久。盧舍那佛。乃慈賜。比。福。賜物。有止。此日。授



百濟王敬福從三位。元亨傳言に。陸奥國守敬福を銀青光祿大夫に任せらる。といふ。是なり。其翌二日乙未。天皇又大佛の前殿に御

じ。大臣以下多くの百官士庶を行列し。是日改天平二十一年。為天平感寶元年。如是院年代記云。四月二日

改萬葉集第十天平感寶元年五月十二日。於越中國守館。大伴宿禰家持作之

須賣呂伎能御代佐可延半等阿頭麻奈流美知能久夜麻爾金花佐久夫木集に。既宮門院大輔一咲

の光をひらく。此年號天平感寶の。年中改元とて。年代曆に不載と。清輔が與儀抄に見えたり。

り。又同年五月庚寅。陸奥國免三年調庸。小田郡永免。同閏五月甲辰。授獲金上總國人大

部大藤呂從五位下。授治金人左京人戸淨山大初位上。出金山神主小田郡日下部深淵外

少初位下。同秋七月甲午。是日改感寶元年。為勝寶元年。其後廢帝天平寶字二年八月戊申

の勅。信終出勝寶之金。我國家於是初有奇珍。開闢已未未聞若斯盛德者也といひ。高

野天皇天平神護二年六月壬子。我國家黃金從此始出焉といひ。此貢金大佛の用と

なりて。其大佛の名。殊に高く。光仁帝寶龜五年十月己巳の條。文德實錄齊衡二年九月甲

戌の條。同三年五月丙寅の條。三代實錄貞觀三年正月廿一日丙申。同三月十二日丙戌の

條にも載せて。兼價代々世に高く。人のいひ傳へて異朝までも聞く事となりぬ。先是文

武の朝。大寶元年三月甲午。對馬島貢金こそ。實に此邦金貨の始發ならぬ。聖武帝大佛の

前にて。勅し給ふ。此大倭國者。天地開闢以來。黃金の人の國より獻る事なあれど

も。斯地よりのなま物と思へると宣ふ。甚しく佛に泥みて媚び請ひ給ふなり。此帝の其

地光明皇后。皇女孝謙帝二代とも。深く佛を信じて出家し給ふより。二代とも御謚を

奉らむ

續日本紀聖武天皇注云。證業勝寶七歲勅。曰。太上天皇出家歸佛。更不奉謚。至寶字年。

勅進上此號謚。孝謙帝注云。出家歸佛。更不奉謚。因取寶字二年百官所上尊號。稱之

此邦國家第一の寶貨を。大半佛氏の用となし。後世に流傳し給ふ。推古。聖武二帝の御

代より始まる。其原は百濟王より始めて備を作れり。而蕃外國の徒。吾皇國に害ある事。

識者考ふべし

天平感寶元年四月乙卯。陸奥守從三位百濟王敬福。貢黃金九百兩

是の二月丁巳二十に始めて貢せし物との異なり。四月二日感寶と改元ありし同月乙卯

なれば。四月二十二日なり。然るに稱徳紀に治鑄云。鑄金不足。而陸奥國馳驛。貢小田

郡所出黃金九百兩といへば。二月丁巳二十の貢金も。九百兩なり。此歳二度の貢金合せ

て。千八百兩としるべし



孝謙天皇天平勝寶二年三月戊戌。駿河國守從五位下橘原造東人等。於部內廬原郡多胡濱。獲黃金沙金一分於是。東人等賜勳臣姓。同年十二月癸酉。授駿河國守從五位下勳臣東人。從五位上。獲金人元位三使連淨足從六位下。賜絕一十疋。綿四十屯。正稅二十束。出金郡免今年田租。

是ハ文德實錄仁壽二年二月乙巳。滋野貞主卒條。曾祖父橘原東人天平勝寶元年爲駿河守。干時土出黃金。東人採獻之。帝美其功。曰。勳哉臣也。遂取勳臣之義。賜姓伊藤志臣。といふ。是より。此款金の。風土記。爲河國爲河郡鞠込貢黄金といひ。宣秀卿記。享祿四年駿河金といふ物にて。後世傳ふる駿河今川永四貫小判金即此なりと。此金三品あり。圖録沙金一分といふ。分兩の分るや。

同四年二月丙寅。陸奥國調庸者。參賀以北諸郡。令輸黃金。其法正丁四人一兩。以南諸郡。依舊輸布。

是ハ奥州の地。おひく。金貨を出だすより。調布の代。黄金を納めしむるなり。調布の代をれば。金貨分量の制も立つと見えたり。其量未詳ならん。源平盛衰記。小松内府重盛公。奥州知行の時。氣仙郡より金千三百兩を參らせたりといふも。是等の調金をる。

也。後世傳ふる奥州上字小判金。分銅金種々あれども。必當をへき徴なし。

廣帝天平寶字四年三月丁丑勅。云々。上頃者。私鑄稍多。偽濫既半。頓將禁斷。恐有騷擾。宜造新樣。與舊並行。庶無損於民。有益於國。其新錢文曰萬年通寶。以一當舊錢之十。銀錢文曰太平元寶。以一當新錢之十。金錢文曰開基勝寶。以一當銀錢之十。

是ハ金銀銅の三貨を鑄させたまふ。是れまで銀銅鐵三錢のあれども。金錢は見えず。金錢ハ此朝始まる。萬年通寶ハ銅錢なり。按むる。錢文ハ通寶と名付くる。萬年通寶始まる。漢上ハ金銀ハ一當十といふ。漢土の制法もあり。後漢西域傳。大秦國以金銀爲錢。銀錢十當

金錢之一とあり。萬年通寶泉彙ハ出づ。神功開寶。與前新錢並行於世。是ハ銅錢なり。故ハ前の新錢と並び行ふ。拾芥抄。神功開寶。神德御宇錢之とあり。王屋錢。同三年十二月。是歲民私鑄錢者。先後相尋。配錢司駁役とあり。是より私鑄の者ハ。皆鑄錢司ハ屬

託也。此錢三品泉彙ハ出づ。光仁天皇寶龜三年八月庚申。太政官奏。去天平寶字四年三月十六日。始造新錢。與舊並行。以新錢之一。當舊錢之十。但以年序稍積新錢已賤。限以格時。良未安穩。加以百姓一人間積



宿債者。以賤日新錢一貫。當貴時舊錢十貫。依法律相當計。價有懸隔。因致物情擾亂。多致訟  
斷。請新舊兩錢同價施行。奏可。

是の寶龜三年より。十二三年前より鑄たる新錢。段々價賤しくなりたるを。一錢十錢  
と引き替への制をいひ立て、下りたる新錢一貫を以て。高き時の古錢十貫を引きな  
らし。差引くる故。毎々詔辨新古。及ぶ。新錢古錢おなじ價とし通用させむと事を奏  
するなり。聞き届けあり。

同八年五月癸酉。賜渤海王書。曰云々。又緣都蒙請。加附黃金小一百兩水銀大一百兩

是の渤海國の使者都蒙が歸る時。天皇より彼土へ贈り給ふ黃金を。小一百兩とあれ  
ば。此時黃金の大小の分あり。

同十年八月壬子。勅。去寶龜三年八月十二日。太政官奏。永止舊錢。全用新錢。今聞。百姓徒蓄  
古錢。還憂無施。宜聽新舊同價並行。

是即三年八月庚申の奏を勅し給ふなり。其年永止舊錢。全用新錢とい。奏せざれと。新古  
一貫十貫の高下あり。その時より百姓等。古錢を蓄へ持たたる。格別の損あり。施すべ  
きべからざる故。新古おなじ價と通用せよとなり。

桓武天皇延暦九年冬十月甲午。復置鑄錢司。

是の先例におなじ

日本紀略云。桓武天皇延暦十五年六月壬戌。木工允上道廣成授外從五位下。獲採備前國銀  
之功也。

是に據れば。當時備前の國よりも銀を出だせり

日本後紀云。桓武天皇延暦十五年十一月乙未。詔曰。云々。是以更鑄新錢。仍增其直。文曰  
隆平永寶。宜以新錢一。當舊錢十。新舊兩色兼使行用。但舊錢者。始自永歲。限以四年。然後停  
廢。辛丑始用新錢。

是平安城遷都以後に鑄させ給ふなり。此時古錢は四年を限り。通用停止せり。此錢大  
小中數品あり。三品泉葉は出づ。往年大坂堀江川にて。此錢數枚を掘り得  
たり。其所の橋を隆平橋と名づくといふ。

同十六年二月甲申。勅。云々。上今聞。京職多有收錢。事須賤本貴末。一絶收錢。但恐民有貧害。  
不必蓄積。宜聽貧乏之徒進錢。通計不得過四分之一。

是の京職の者。多く錢を収めて其價を高くし。貧乏のもの不便なる故。其制を立てた  
まふなり。



類聚三代格<sup>第十</sup> 延曆十七年九月乙丑。是日太政官符。禁斷貯錢事。被右大臣宣傳。奉勅用錢之道。取於輕便。有無均利。彼此得宜者也。如聞外國史民多有貯蓄。京畿士庶還乏費用。既平均利之義。亦失得宜之方。宜下嚴制。不得更然。  
是の畿内より。外の國より多く。錢を買ひ貯へて。京畿の錢乏く。利用は不便なる故。昔錢を禁じたまふなり。

日本後紀云。平城天皇大同三年五月己丑勅。百姓之間。新錢未多。宜新舊列用。濟民之。是の以前よりの古錢多く。隆平永寶の新錢多からむ。其中より。收錢の者もあり。之民は行を渡らざる故。新古共し列ね用ひ。融通せよとの事なり。  
弘仁元年十二月廿日丙戌。銅錢司用兼銅鑄進新錢一千四十貫。因茲賜祿有差。  
是の銅錢司より。銅の有餘を計りて。隆平永寶を鑄て進獻す。大同三年。新錢未多とある。  
是の鑄進する故。賞美して祿をたまふなり。  
按ずる。類聚國史卷百七。開官部。十二。鑄司條。載せしむ。文長一故。略也。  
類聚國史<sup>卷百七</sup> 弘仁七年秋七月戊寅。廢鑄錢司。  
是の鑄錢司を廢せらる。其詳あり。同月癸巳詔。日本紀略を考ふべし。  
日本紀略云。弘仁九年十一月辛巳朔。詔曰云々。<sup>上</sup>改錢文曰富壽神寶。

是の隆平永寶の錢文を改むるなり。延喜通寶を乾元大寶と改むるとおもむ。此錢四品泉彙に出づ。

承和符云。<sup>八年閏九月</sup>弘仁十二年七月壬戌符。得鑄錢解備。依去弘仁九年六月十一日申官支度帳。件錢每年鑄作可進。而始自九年。至于今年。掘採之銅。之少作物之類有欠。望請五千六百七十貫之内。減定三十貫文。每年作貢。但豐銅之年。隨即陪作。不必限以此數。  
是の官に申し上ぐる支度帳の事を陳ぶるなり。去る弘仁九年六月十一日。鑄錢司より申し上ぐる。毎年五千六百七十貫の。調進可致の所。其年より今十二年七月まで。四年の間。掘り出ださ銅之しく少なくして。錢より外の銅器を造るよたらむ。定數の内三十貫を減じて。毎年調進可致。銅豊し出づる年。三十貫に限らむ。其倍も鑄作らむとの事なり。  
承和符云。<sup>八年閏九月</sup>弘仁十二年七月壬戌符。下民部省符備。相轉舊錢鑄造新錢之間。宜停鑄錢料銅。進年料熟銅千斤。  
是の此朝。舊錢を相轉じて。新錢を鑄作らむとの事。新錢出来るまでの間。鑄錢司に賜ふる料銅の停止せられ。諸國より貢進する熟銅の。毎年千斤づつ。は定めらるるなり。



同八年三月癸卯。鑄錢司秩期。一准諸國と。類聚國史○六史の中。日本及紀の欠本にて。全録を以て。故に日本見たり。記略。類聚國史。類聚三代和承和年符を以て年序とす。及承和二年三月十五日符も

續日本後紀云。仁明天皇承和二年正月廿二日戊辰。令鑄新錢。下詔曰云々。上是以今制新錢。以叶適變。文曰承和昌寶。以新錢之一。當舊錢之十。新之與舊宜令並用。

是歲新錢を鑄さしめ。年號を以て錢文とせり。和同開珍の銅出づるに因りて。是と異なり。年號錢文の承和通寶に始まる。此錢二品泉彙に出づ。漢土にて。年號錢文の。南宋の孝文帝孝建四銖錢に始まる。

同二月廿三日戊戌。下野國武茂神奉授從五位下。此神坐採沙金之山。

是に延喜式に。下野國より毎年砂金百五十兩。練金八十兩づゝ貢すといふものならん。圖録に。上野國吉豆小判金。一名足利小判銀とあり。

同三年正月廿五日乙丑。詔。奉充陸奥國白河郡從五位下勳十等八講黃金神封戸二烟。以應國司之禱。令採得砂金其數倍常。能助遣唐之資也。

是に與州白河郡より。砂金を採り得て。遣唐使の入用を助けたる故に。其實に封戸を充てたまふなり。

喜祥元年九月十九日乙亥。令鑄新錢。下詔曰云々。上宜改舊寶於是鑄。唐新彩於金刀。文曰

長年大寶。一以當舊之十。新之與舊並用雜行。將令用不悖既害之而救之。

是に年號改元に因りて。新錢を鑄たまふ。この錢二品泉彙に出づ。

三代實錄清和天皇貞觀元年四月廿八日癸丑。詔曰云々。上宜改舊弊更制新錢。勅此變通救彼流弊。文曰鏡蓋神寶。一以當舊之十。即舊之與新並令雜用。同年十月廿八日庚戌。是日鑄錢司進鑄錢。

是も年號改元に因りて。新錢を鑄させ給ふなり。是歲二月廿五日。長門國海部男種麻呂といふ人を採銅使とし。三箇年の内。年々銅鉛三千斤づゝ進むべき事を載せたれば。新錢の用となしたまふ事しるべし。

同七年六月十日己未。禁京畿及近江國賣買之輩擇棄惡錢。

是に去る弘仁十一年六月九日。大藏省に下知ありて。鑄錢司より進獻せる所の新錢の文字少々不明。又少の疵有るとも通用に妨なく。請取渡可致處に。是に文字不全。是に輪郭有缺などいひ立て。十一二三の癖ふ故に。比度嚴重に禁制せられて。通用せよとの事なり。

同九月廿六日甲辰。勅木工寮。採銅於山城國相樂郡岡田鄉。舊鑄錢司止。



是、岡田縣採銅の事にて。同九年六月九日丙子の勅。同十一年七月十日丙寅の採銅使。元慶五年六月丁丑朔採銅使停止。同八月廿日丙申採銅使返進の。皆是なり。

同十二年正月廿五日戊寅。詔曰云々。上錢文曰貞觀永寶。一以當舊之十。母子相隨。並共通用。同八月五日乙酉。鑄錢司進新鑄貞觀錢一千一百十貫文。

是歲又鑄錢あり。此錢泉貨に出づ。母子といふは。母子相隨の意なり。

陽成天皇元慶三年十月十三日己巳。勅令太宰府庫物之代砂金六百三十三兩。水銀百七十斤。注附官帳。先是府司申請。每唐人來。募貨物。直借庫物。交開畢後以砂金給官給綿。總計返納。其砂金一兩充綿十六屯。絹一疋充十四屯。府司不能勘。行米尚矣。

是、當時砂金を綿絹に充て、交易せられた。其一兩といふ程といふ事をしるせり。金銀圖品、砂金の圖あり。

以上國の六史。日本紀。續日本紀。日本後紀。續日本後紀。文德實錄。三代實錄に載せたる金銀銅鐵の四貨。及代々鑄錢の沿革。勅命制令の文。すべて皆かくのごとし。是を見て。正史に載せたる。寶貨の大率知りぬべし。按ずる。外國貢上の金銀。皇后の御代に始まり。和銀の出づる。天武帝三年に始り。

り。獻銅鑲と。冶金鑲といふ。文武帝二年に始まり。貢冶金。大寶元年に始まり。獻和銅。元明帝和銅元年に始まり。陸奥貢金。聖武帝天平二十一年に始まる。其中に練金。砂

金。黄金。大小あり。銀。白銀。及銚あり。いかなる形なる。詳ならむ。又金。二分あり。銀。一兩あり。其量目も亦詳ならむ。

練金。後世にいふ竹流金にて。竿金といふ説もあり。砂金。金銀圖品。その形を載せられた。國史に見えたる砂金なる。砂金。砂と。沙と。二品あり。砂金。碎石。又

の金礦中より出づ。強流水の底にあり。佐渡。松前より出だきを瓜實といふ。伊豫より出だきを茄子實といふ。沙金。水沙中にあり。佐渡。西三河。伊豫。三角寺奥の院。及吉

野川の底にあり。人民建ても抄取る。大に人力を費して利あらむ。今、此事を止むといふ。砂金を治へば。熟金となる。生金はなり。沙金を鹽上に置き。炭にて焼けば。金

沙集まりて玉となる。俗金丸といふ。和漢三才圖會に見えたり。宋の朱輔が溪蠻叢笑

に。二種共載せて。名録金といへり。天工開物にも二種を載す。國史に見えたる砂金

の。何れなるや。詳ならむ。黄金も小一百兩とあれば。大小ありと見ゆ。其形。量目詳



大抵六史に載せたる頃の。國家通用の。錢貨のみ多く用ひて。金銀二貨。今のごとく用ひざると見ゆ。勅命。制令二貨の事をきよてしるべし。

宇多天皇寛平二年。鑄寛平大寶

是錢泉彙に出づ二品あり

醍醐天皇延喜七年。鑄延喜通寶

是錢泉彙に出づこの錢。天明二年壬寅三月下旬。攝津國川邊郡東長洲村にて。數枚掘り出たせり。銅錢多くして。銅錢少くなし。

村上天皇御宇。鑄乾元大寶見拾芥抄

是の延喜通寶の錢文を改め鑄るなり

日本紀略云。天德二年三月廿五日。改錢貨文。延喜通寶爲乾元大寶。三月八日。右大臣於

仗座仰外記。令因幡公廣兼圖書允阿保懷之。令書新錢文。但被用懷之之字樣。

和同開珍より乾元大寶まで天平と開基と二品同く本朝十二錢といふ。冷泉帝より。天皇の號止みて

皆院號となり。鎌倉時代まで。三貨及鑄錢の沙汰なし。日本紀略。後一條院寛仁元

年。盗人前攝政家の倉町に入りて。砂金千三百餘兩を盗み取りし事見えたり。小右記。

長元二年九月。前陸奥孝義志砂金十兩。金粒太不似例金。又此砂金異例金。不可被充用

雜事といへば。當時の砂金を専ら通用せしむ。例金といふ。別は通用の金貨ありし

一也。一説。大寶元年。對馬島の貢金當時長元の貢銀と同じく。世に行はると。其金の

金銀圖録に載せたる。對馬高木握小判金。形。菜刀の如く。津の字高木の二字とを刻する

物是なり。是のみ例金とも見えがたし。其後高倉院安元元年六月。小松重盛黄金三千兩

を。宋の育王山へ贈られし事。平家物語に見えたり。其金貨いかなる形なるか。治承二年

十一月十二日。安德帝御誕生の時。金錢九十九文を皇子の御枕に置かせらる事。平家

物語に見え。證上泰山府君都狀。銀錢二百四十貫文と。朝野群載に見えられたれば。其頃金

銀二錢も専ら通用せしむ。源平盛衰記。治承二年砂金千兩。南鑛百とあり。平家物語

一。南鑛を煖速に作り。東鑛。南廷に作り。砂石集。較捷に作るも皆同じ。其形の。金銀

圖録に多く載せられたれど。何れを當時通用せしか詳ならず。又壽永小判金といふ。壽永

中造る所といふ。其形。今の判金と同じく。壽永二字と。花押とを刻せり。重五奴或云。此條奉時造ると

當時此等の寶貨通用すと見えたり。又其頃。異朝の錢も。采船すと見えて。法曾至要抄

一。建久四年宣旨停止宋朝錢貨とあり

今も世に多くある。嘉祐通寶。治平。熙寧。元豐。政和の類。是なり。善隣國寶記。元史を



引きて。後宇多院建治三年。是異朝渡錢之始也といふ誤れり。されども其頃の。戰國大亂の世なりし故に。金銀も不自由の事有りしよ。治承四年。南都東大寺重衡の兵火に罹りて。再建の沙汰あり。建久の初。白河法皇より右大將頼朝と。俊乗坊重源師と。其命ありし。頼朝より朝金五十兩寄附せむと申されし。其年早懸して。都合調ひざる事。東鑑に見えたり。其のち此條時代の。寶貨の沙汰を見えむ。銅錢を用ふる事。東鑑脱漏。嘉祿二年。先是以準布為幣。至此又用銅錢とあり。東鑑建長四年記。砂金百兩。南延十兩とあれり。引き續きて。此等の寶貨を通用せしと見ゆ。南北朝時代も。寶貨の沙汰を見えむ。金銀圖録。大塔宮小判。重四匁六分。太平小判。金。重三匁六分。新田判官仁木頼明の造る所。赤松小判。金。重四匁四分。尊氏小判。銀。重四匁三分。各其圖を載せたり。されども。當時此等の寶貨を通用せし事。その證を見當たらむ。室町殿時代も。寶貨の沙汰を見えむ。中原康富記。應永八年五月十三日。日本准三后道義書。上大明皇帝陛下云々。砂金千兩馬千足此千兩の砂金も亦其餘なり。同書。天安六年四月宣下。砂金二十兩二匁といひ。親長記。文明五年十二月元服。砂金十兩。但代二千匹といひ。長興記。文明七年四月宣下。砂金一匁代二千足といへば。専ら砂金を用ひし

と見ゆ。鹿苑院義滿公。大に奢侈を好まれ。國家の金貨を磨削し。應永四年。金閣寺を建てられ。同八年五月十三日。大明の皇帝へ金千兩。馬。鎧。劔刀種々の品を贈らる。此皆皇國第一の寶貨を磨減し。神明守護の御徳をへりむと。其弊政いふばかりなし。其後太宗の壽壽を受けられし故に。彼土より永樂通寶の錢を多く頒ち贈れり。天野氏傳云。應永十年八月二日。と記此錢文の。相國寺の僧中正藏主一名仲芳の筆なるよし。本朝通鑑。異稱日本傳。五岳傳。連珠集等に見ゆ。義滿奢侈の風。その子孫に流傳し。慈照院義政の世にいたり。殊更甚しく天下の寶貨を融通する事能はむ。應仁文明の大亂も。其まゝ。よて東山に銀閣寺を建てられ。文明十二年。世務を譲りて。是に閑居を。金閣は準じ。銀閣といへば。其弊政亦いふばかりなし。故に皇國神明の冥加なく。寛正五年。文明七年。同十五年以上三度まで。大明の天子に錢貨を賜はるべきを乞ひ求めらる。中にも文明十五年。錢十萬貫を賜はりなむ。我國の財用足り申さむと敷かれし事あり。我朝未曾有の大亂世とい申しながら。左程まで困乏せしも。寶貨の徳を輕んむる冥罰よやあらむ。先是普光院義教の時代。反吹銀といふ物通用せしよ。永享二年八月記。鈴鹿某云。反吹銀五十目。錢壹貫文價也とあり。金銀錢譜。えされ銀の反吹して。耳薄く。中厚く。細長く。えされの



魚に似たる故といふと。其形いかなる物か。金銀圖録。石州御藏灰吹銀。其種二三品を載せられた。是れ其時代より後世の物なり。隆涼軒日録。永享十二年十月。金三十三兩二分といひ。親元日記。文明十一年時岡民部丞預置金四十兩。料足十貫といふも。幾満大明へ贈られし千兩も同じ金貨なるべし。

按むる。砂金一分とある。孝謙紀に見えたるのみにて。其餘砂金一分二分とある。未見あたらむ。室町時代。三十三兩二分といふ。砂金なるべし。覺束なし。其後。天文永録の頃大内義興。毛利元就石州を領せし時。銀貨を造られし事。石州銀山舊記に見えたるよし。圖録に載せられた。是れ其私領のみ通用にて。甲州金壹百三十六品。越後小判諸國の金貨多く載せたるごとく。天下一統公用の寶貨よりあらざるなり。其後。元龜天正の頃。金銀に幾枚といふ名目あり。圖録に引用せる所。多く見ゆ。多門日記略。元龜三年十二月。信長衆凌の時。銀子百枚。又云。天正二年十二月。銀一枚代三石八斗に買之。同八年十二月金子一枚持上代。同九年八月。金子一枚代持分半。其後引き續きて二貨幾枚と唱へ。大關記。金賦之事。天正十三年初秋の頃。金子五千枚。銀子三萬枚。諸侯大夫等一施したまへりと云々。右元龜三年より。天正年中まで。金銀に幾枚といふ。其實

貨の何れの世。何人の造りて。いかなる形。其目方何程といふ事詳ならむ。青木教書の説。又の圖録。彼此と考證あれど。皆後世よりの臆斷にて。確説といひがたし。武徳編年大判條。是れ室町家の流例なりといへば。信長以前室町の時代より。金幾枚と唱へ来りしと見ゆ。黄金を音に呼ぶの今の大判の事なり。是れ信長の時より始まれり。

正親町院天正年中。始鑄黄金大判金。一名板金

是れ織田信長公造らせらる。其形。圖録に載せて。拾兩二字并に後藤花押を刻せり。

圖録。右天正大判金重四拾四匁。大判の信長公の時より始まる。神書。後藤云。大判拾兩と書く事。小判拾兩にてなく。黄金拾兩なり。黄金拾兩といふ。昔の銀壹枚を黄金壹條とし。銀拾枚を黄金拾兩といふ。大判壹枚を銀四百二十匁に通用せり。又云。

大判の信長公の時。後藤の先祖極む者なりと。板金といふ。同書に進退記を引きて。板金の事。是も殿中にて披露なし。又進上もなし。私さまよての事なり。五枚。十枚。百枚とも候へば。折又の唐の盆など居ゑ披露候。只一枚二枚も同前候。御前にて色を明け候事などなく候と見えたり。是則大判の權輿なるべしといふ。按むる。板金の起り。周禮職金の金版。爾雅の銜金。漢書武帝太始二年更黄金師古註。



吉字金挺之類。小判の夢溪筆談の小金餅など。東涯の名物六帖に載せたるより。後人多く引書を出だし。種々の説あれども。盡く漢土の法に倣ひしとも見えぬ。甲州金をとり。數十品あるもの。多くの圓形なり。

同天正年中。鑄長大判金

是も重四拾四匁拾兩及後藤藤乘の花押あり。圖録に出づ

同十五年。鑄天正通寶

是錢二品あり。一品泉彙に出づ

同十六年。鑄大佛大判金

是は金銀錢譜に。天正十六年造といふ。重四拾三匁。其面は建目なく。文字花押もなし。

圖録に出づ。神書に。大佛供養の時。造られしとあり。外は同名あり

又鑄藤乘大判金。又鑄小佛判

是は二品共に諸書鑄たる年を記さぬ。金銀圖品に。藤乘金大判或は大佛判といふ。其形

は。圖録に出づ。金銀吹替録に。小佛判是を二條判といふ。慶長以前より通用をといふ

後陽成院天正十九年。鑄判金大小

是は武徳編年。天正十九年。此年關八州へ通用せらるべき爲に。後藤藤乘并門人庄三郎光次に命じ。黄金を以て。大小の形を定めて鑄させらる。但大判は金目四拾八文目を以て一枚とす。是は室町將軍家の流例なり。往古より今もいたり。小判といふ事は無く。灰吹の砂金を權衡に掛けて。通用をいへども。急務をなさんと。今度光次に命じ。昔年よりありし金錢。四増倍の積り四文目八分を以て小判とし。是を鑄て。通用其便を得るに。金錢も一せし行はると云々。圖録にも天正十九年とあり。五事略にも。天正十六年。造黄金大判小判とあり。されども。圖録にも天正十九年とあり。

天正。文祿之間。大閤鑄大判金及圓歩判金

是は圖録に。重三拾八匁二分。天正。文祿の間造る所なり。大閤小判といふ。又靜庵隨筆を引きて。大判は橋本といふ極印ありあり。大閤の時銀座なり。又大閤圓歩判金の圖を出だして。重壹匁二分と記せり

此外に。大閤但馬小判。軍用金銀二貨。重六分及花降金銀二貨等。圖録に載せられたるも。國家常用の物とも見えざるなり



文祿元年。鑄文祿通寶

是錢泉彙に出づ

同四年。鑄駿河小判金及武藏小判金

是の五事略。駿河判江戸判など。皆々造られし所を以て稱すといふ物にて。辨書。後

藤云。文祿四年。江戸。駿河兩所にて小判を定めらる。駿河小判重四匁五分。武藏小判重四匁八分。並に圖録に出づ。

慶長年中鑄金壹分判

是の諸説ありて。一決せむ。五事略。慶長四年。始造壹分判といひ。辨書。後藤の説を引きて。慶長五年。造るといひ。武徳編年。慶長十年。後藤庄三郎光次。命。金壹分判を始めて造らせらる。其重目壹錢目二分なりといへり。常山紀載。後藤庄三郎黄金を四つ一切りて通用せむと望みけり。今の一分金といふ。夫より始まれり。但甲州。信玄碁石金といふあり。一分金の碁石金。倣ふやあるべしと。云々。是等の諸説孰か是なるや。其黄金を四つ一切るといふ。靜庵隨筆。花小判といひて。金子壹兩を四つ一して。小判のやうしたる物なり。壹分の大なりと。重壹匁二分。其形。圖録基。巨金。甲。陽。軍。艦。に。出。で。る。圖。録。に。重。金。を。出。だ。し。此。類。有。る。か。し。と。い。へ。り。四。形。有。り。

同六年。鑄判金大小。銀豆板等。而定法制

是の五事略。いへり。慶長六年五月。始めて通用金銀の法を立てたまひ。判金大小。丁銀豆板等の制定まる。

圖録。慶長大判金。重四拾貳匁二分。拾兩二字。後藤榮榮花押を刺す。同。莖大判金。目方。同じ。但榮榮の花押變態なり。江戸座小判金。重四匁八分。壹兩二字。光次花押を刺す。京座。駿河座。二品文字。目方皆同じ。が兩頭小判。光次花押上下。一刺と。壹分判。重壹匁二分。是。一。片。本。字。兩。本。字。あり。目。方。皆。同。じ。

此時始めて銀座を置きたまひ。其座より菊一文字。夷一文字。大黒極印等を刺して調進せし。大黒極印。定められ。其銀貨を俗。大黒遣ひといふ。常是。乃其名なり。慶長丁銀。大抵目方四拾三匁の内外なり。大黒丁銀。大黒の形。十二程刺せり。豆板。其面。一。寶。字。を。刺。し。裏。一。大。黒。を。刺。す。

按。る。一。丁。銀。の。起。り。漢。土。の。銀。錠。又。一。錠。銀。倣。ひ。て。造。り。し。と。い。ふ。説。あり。金。銀。を。錠。と。い。ふ。通。雅。一。見。え。金。銀。銅。を。錠。と。い。ふ。後。魏。崔。浩。好。觀。星。變。置。金。銀。銅。錠。於。酢。器。と。史。一。見。え。銀。八。千。錠。五。代。史。買。緯。が。傳。一。見。え。銀。錠。の。品。字。箋。一。見。え。錠。



銀の通鑑釋文辨疑に見ゆ

豆板の俗に小五漢土の碎銀。又ハ散碎銀こまがねと。東涯の六帖一載せたるより。後人  
 多く引書を出だし。種々の説あれども。是等も皆漢土の法一倣ひしとも見えぬ。是より  
 以前。天文。永録の比。石州銀山にて。始め銀貨を鑄たる公用丁銀公用永録二其後。文祿二年  
 一鑄たる丁銀。重四拾三匁石州銀文祿二同年。筑前博多丁銀博多御公用文祿二中山共一慶長丁銀  
四十三匁の内其形宛然として相同じ。されば最初丁銀を鑄たる時より。今の形を造りし  
幣是を刻する物なり。又碎銀も切り使ひなど諸説あれは。彼土にも豆板一似たる物あり。群談採録。景  
 泰上願事。屏色著修。嘗以銀豆金銀物撒地。令官人及宦侍。爭拾爲閑笑といひ。較耕録。白  
 金白星許といふも。豆板の事ならむ。  
 一説一。豆板のちやば銀一倣ひしともいふ。是ハ重二匁五分許。圓形にて面一菱錐の  
 形を鑄付けたり。京都室町養林庵。昔ハ數百粒を藏せり。此寺加藤清正の菩提所一  
 にて。菱錐銀ハ朝鮮銀なりと  
 同八年五月。鑄慶長大判。重六匁五分。其形ハ六匁五分。其形ハ六匁五分。其形ハ六匁五分。  
 同是ハ金銀圖録一載也。此の内一。五曜星の紋と。慶長ハ五月極六字を分書し。壹兩用分花

押とを刻す

同十一年。鑄慶長通寶。是ハ銅錢なり。武徳編年一。是歲。永樂通寶を止め。薄錢を用ひらる。五事略一。慶長十三  
 年十一月。止永樂錢。用京錢と。二説同じからむ

後小松帝應永十年八月三日。永樂錢を積みたる狀。鎌倉一米著也。領主滿無より。京都  
 將軍義滿一言上す。義滿下知して。其錢を滿無一賜ふ。其後。北條氏康關東を領せし  
 力。永樂錢のみ通用。下知を施し。他錢を鑄と名付け。永樂錢一文一。他錢四五文宛行  
 ける。故一他錢多く京地一集り。京錢と稱せり。一説一應永十八年八月。相州三崎一。  
 永樂錢積みたる狀。米著也。將軍義持の時なりともいふ。一説一。當時永樂錢を重じ。黃  
 金と米價と。皆永樂錢にて定む。黃金一匁といふ。七兩二分をり。物の代付一十貫と  
 十いふ。金五十枚なり。二百貫ハ五枚なり。七兩二分ハ。代銀四百五十日なり。千石十貫  
 といふ。みな永樂錢なり。千足萬足といふ。一分を百足の積なり。當時永樂と。鑑  
 本の擇み強く。人々永樂を好みて。京錢を惡み。毎々爭論一及ぶ。故一制札一。要脚精  
 撰と書くも。錢の擇みなく通せよとの事なりと。此説一據れば。金幾枚といふ。室町



時代より稱する事いよく證とまべし

永樂と鑄との争ひ。天文十九年より慶長十一年まで。五十七年といふ。慶長通寶を鑄たる年より。永樂錢停止せられ。永樂常錢の差別なく。同じ一文の通用に定まりぬ。同十四年。鑄大佛大判金

是の武徳編年。慶長十四年。秀頼洛東大佛再興あり。秀吉聚斂の黄金千枚分銅を潰し。大佛資用の爲。大判とせらるといふ

後水尾帝元和元年。鑄元和通寶

是錢四五品。泉彙に出づ

明正院寛永十三年。鑄寛永通寶

是歲五月。錢座免許。此錢背文一より十六といたる。悉皆泉彙に出づ

靈元院寛文八年。鑄寛永通寶。至天和三年

是錢。京都大佛の像を毀ちて鑄たり。寛文より天和といたるまで。十六年の間。東府龜井

戸村（和名）にて鑄る。泉彙に出づ。文録是

貞享元年。鑄貞享通寶

是の銀錢なり。泉彙に出づ

東山院元禄八年。改鑄判金大小。拵銀豆板等

是の元禄八年九月十日。二貨を改め鑄らる。世は是を元字金銀といひ。又元禄新金と

いふ。判金大小共。背に元字を刻む。江戸座。京座小判及壹分判。重皆慶長の制と同じ

此改鑄金大判。享保十年十二月朔日停止。小判分判。享保三年通用停止。其形は海防圖録に出づ

同十年。鑄二朱判金

是の元禄十年六月晦日。新金を以て二朱判を鑄る。重六分。圖録に出づ。此金。寶永七年

四月停止

同十六年正月。鑄銀代通寶

是の伊勢屋道喜といふ者の願書納まり。一錢壹分五厘の通用。大九分五厘。重壹分六分。

鑄高百廿五貫文。未。命令なきに試し鑄る。泉彙に出づ

寶永三年。新鑄銀貨

是の寶永三年六月六日。新銀を以て拵銀豆板等を鑄らる。寶字極印二つを刻し。常是極

印なし。世は是を二つ寶銀といひ。又寶永新銀といふ。圖録に出づ。此銀享保七年通用



停止

同四年五月。始鑄當十大錢寬永通寶

是ハ一文十文ノ當ル。通用京七條ノ鑄。此制ハ漢土ノもあり。文獻通考ノ宋崇寧二年令陝西鑄折十大錢。又崇寧監鑄御書當十錢。每錢重三錢ノあり。此錢同六年正月通用停止外ニ寶永大錢時代ノ一字亦永字錢通寶を鑄ル。但ニ泉彙ニ載セたり

同七年三月。改鑄三寶銀貨。同四月二日。改鑄乾字金貨

是ハ寶永七年三月六日。二寶銀を改め鑄らる。兩頭ノ寶字ノ極印。中ノ永字ノ添極印を刻ス。世ノ是を永字銀といヒ。又中銀といフ。挺銀。豆板共ニ此銀專保七年通用停止。又

同年四月二日。三寶を改め鑄らる寶字極印。三を刻ス。世ノ三つ寶銀といフ。此銀も專保七年通用停止。又同月十五日。元字金を改め鑄らる。小判壹分判とも。小形となる。乾字を刻ス。世ノ是を乾字金といヒ。又乾金といフ。小判重二匁五分。壹分判重六分二厘五毛。圖録ノ出ツ。此金專保五年停止

中御門院正徳元年。改鑄四寶銀貨

是ハ正徳元年二月二日。三寶銀を改め鑄らる。寶字極印四を刻ス。是を世ノ四寶銀とい

ふ。同年九月鑄所を廢シ。挺銀。豆板とも。此銀專保七年通用停止。圖録ノ出ツ。同四年五月。改鑄二貨稱復古

是ハ正徳四年五月十五日。金銀二貨慶長ノ法制。古ノ復古ニハとの事。慶長金ノ目方一改め。小判ハ重四匁八分。分判ハ重壹匁二分。添極印等なし。是を世ノ正徳新金といフ。佐渡ノ鑄。佐字小判佐字壹分金あり。裏ノ佐字を刻ス。挺銀。豆板も慶長ノか

又足歲奉命。鑄寬永通寶佐字錢。至同六年十一月

是ハ正徳甲午ノ命せられ。同乙未十一月まで。佐渡國相川ノ鑄。寬永通寶佐字錢を鑄る。

此錢二品泉彙ノ出ツ

專保元年。鑄專保通寶

是錢背ノ永字を刻ス。泉彙ノ出ツ

同三年十一月朔。二貨有轉換通用之命

是ハ金銀引替ノ命あり。乾字金百兩ノ上金五拾兩。元字も同前なり。寅年まで五年を限とも。新銀拾貫目ノ元字銀十貳貫五百目を以て替ふ。寶永銀ハ十六貫目。中銀ハ廿貫目。



三寶の廿五貫目。四寶銀の四十貫目を以て替ふ。右の割合を以て。来る寅年まで五年を限り。引替ふとなり

同十年十二月朔。鑄新金大判

是の元録大判を止めて。慶長大判の法制に改め鑄らる。重四拾四匁。花押の壽乘の判を列せ。是を世に新金大判といふ。壹枚金七兩貳分の積り。同十一年にも亦鑄る。今用ふる物是なり。圖録に出づ

同十三年。鑄寛永通寶仙字錢。至同十七年。同十三年。是歲鑄大錢

是の専保戊申より同壬子まで五年の間。奥州仙臺石巻にて。仙字錢を鑄る。又是歲。攝州難波にて大形の寛永通寶を鑄る。此錢金鉛銅の三品あり。俱に泉彙に出づ

櫻町院元文元年。改鑄文字二貨。且有轉換通用之命

是の元文元年五月十二日。金銀を改め鑄らる。小判重三匁五分。壹分判重八分七厘五毛。文字の添極印を列せ。是を世に文字金銀といひ。又文金銀といふ。同年六月十五日より。刻に替へ始まる。其命の慶長金百兩代百兩。乾字金二百兩代百兩。慶長新銀拾貫目代同。文金改鑄の分の。分判古金百兩代。文金百六拾五兩賜はる。古銀拾貫目代。文銀拾五貫

賜はるとなり

同年。鑄寛永通寶十字及小字錢

是の元文丙辰年命ありて。東府二ヶ所にて鑄る。五月より深川十萬坪にて。十字錢を鑄る。十月より同所小梅村にて小字錢を鑄る。小字錢の銅二品あり此錢泉彙に出づ

同二年。鑄寛永通寶仙字及川字錢。佐字錢異品亦出乎其間

是の奥州仙臺石巻にて。仙字新錢を鑄る。専保中より鑄る錢といふ異あり又東府小名木川今うがき川にて。川字錢を鑄る。又佐字錢異品も。是年前後より鑄る。正徳中より鑄る錢といふ異あり二品泉彙に出づ

同五年。有鑄錢之命。寛保二年鑄寛永通寶元字錢。又是歲鑄足字錢

是の元文五年に命ありて。寛保二年より元字錢を鑄る。此時大坂高津新地徳倉長右衛門。別段の用座命あり。又是歲下野國築田郡足尾村にて。足字錢を鑄る。泉彙に出づ

後櫻町院明和二年。鑄五錢歩銀。同三年。歩銀通用有命

是の明和二年九月四日。新に五匁銀貨を鑄らる。形南條の如く。表に銀五匁。裏に常是二字を列せ。此銀重五匁三厘。金壹分。銀三枚。金壹兩。銀拾貳枚の積なり。同三年三月。此銀通用を命ぜらる。圖録に出づ



同五年。鑄寬永通寶鎮鑰當四錢。又是歲。鑄長字錢及久字錢。

是の明和五年三ヶ所にて鑄錢あり。鎮鑰の四文錢なり。東府龜井戸村にて鑄る。是年五月晦日。始めて行はる。

錢背に波少き。同六年秋以來に鑄る物なり。長字錢の。肥前長崎にて鑄る。久字錢の常州三戸にて鑄る。此錢二品泉

票よ出づ。漢土にて鎮鑰錢の。明孝宗帝弘治十六年。弘治通寶を鑄る。

同九年。鑄南鑲銀貳朱判。

是の明和九年九月七日上銀南鑲を以て。貳朱判を鑄らる。重二匁七分五厘。長九分半。

横五分半。厚八厘。表以南鑲八斤換小判一兩の十字。裏に銀座常是の四字を識カキマケ。金銀

錢譜に載する南鑲異品二種あり

一種は今の南鑲。裏紋分銅を菊の紋にしたるあり。一種は表以南鑲十六換小判一

兩といふ十字。裏に銀座二字ありて。常是の二字なし

圖録に載する加賀南鑲。但馬南鑲。菊桐南鑲の類數品。是と異なり。按ざる。南鑲の上

にもいひしごとく。源平治承の頃よりありて。圖録に載せたる南鑲大判表に南鑲二枚

と銘して。重四拾三匁。尊氏小判銀表に壹兩と銘して。重四匁三分。此等銀貨の起り

て。後世の丁銀壹枚四拾三匁。豆板壹丁四匁三分に定めたる。此南鑲銀の遺意ならむ

か。鑲の爾雅に。白金謂之銀。其美者謂之鑲とあり。南の海篇朝宗夷語音釋珍寶。銀南者と

あり。南の離として明なり。詩小雅。以雅以南。南夏文明の方。銀の明白にて貴き物な

り。故に事物異名に。銀の一名白貴といひ。白物といふ。鏡の裏に南天燭を鑄付くるも。

離乾二卦に象り。明白にして貴からむ爲なり。南方を火とし。朱とするの明なり。故に銀

の一名を朱提ともいふ。行厨集に見えたり。南鑲の明白にして貴き銀といふ事なり

太上天皇天明四年。興州鑄仙臺通寶

是の鑲イビの鐵錢にて。仙臺の地のみ通用する爲に鑄たる。諸國に分散せしが。今の通用

せむ。西國にては長崎のみ通用せり。此錢泉票よ出づ

同八年四月。南鑲銀有永代通用之命

是銀貨通用の便利。最上といふべし

以上我國の寶貨。世に通用せる物。皇后新羅の役より。一千五六百年の間。其大略如此諸國

の寶山も進々よひらけ。其始末詳ならざるも多し

大和國より金銀を出だま。金峯山の金の峯として。黄金出づる事。宇治拾遺に見えたり。銀の

嵩の吉野山あり。將軍義興の反せし所なり



攝津國より金銀を出だす。元祿以前まで出てたりといふ。攝州金津山の。打出村の北にあり。阿保親王此山に金の瓦壹萬黃金一千枚を埋みたりといひ傳ふ。俗傳は歌あり「朝日さきいり日かじやく此下は金千枚瓦千枚」圖録に、攝津國多田銀を載せたり

甲斐國より黄金を出だす。其金坑は山梨郡黒川にあり。神名式に、甲斐國山梨郡金櫻神社。在金峯山といふ是なり。其金座は志村野中。山下。松木四家あり。其古金は。碓氷金。板金。大鼓判。細字金。延金。繩目金等あり。其新金の甲安金。中金。甲重金。甲定金等あり。今通用するは壹分判。貳朱判。壹朱判。朱中の四品なり。往古よりの舊制は因りて。天正中改鑄後より。今に至りて。一國通用を許さる。圖録に壹百三十六品を載せたり

近江國より黄金を出だす。石部驛より東に入る。金山村是古の坑山。其蹟猶存を。今の通路は。古の通路にあらざるなりと。一説は銅坑圖録に。近江國戸笠小判金江津川桐小判金を載せたり

出羽國より金銀を出だす。此國は元明帝和銅五年九月に。陸奥國を割きて始めて置かれ。同年冬十月。陸奥國最上置賜二郡を割きて。出羽國に隸けられし事をなれば。其昔は國史に載せたる大寶年中より。金を出だしと見ゆ。出羽國村上郡寒川江圖録に。出羽國月山及赤西小

判金。秋田小判金。龜田。窪田。横手。角館等の切銀。或は佐竹花降銀等數品載せたり。加賀國より金銀を出だす。金坑は澤村山にあり。圖録。圖品等に。加賀小判金。梅鉢小判銀。花降銀。七八種竿銀。挺銀。切銀。南條等數十品を載せたり

越後國より金銀を出だす。是は謙信佐渡を領せしとき。其金山より採りし物ならむ。圖録に。越後國高田小判金。圖小判金。一名謙信村上郡寒川江越後小判金。一名謙信村上郡寒川江長岡寛字切銀。村上永字銀及新潟榮守寶字しかみ切銀數千品載せたり

佐渡國より金銀を出だす。其黄金出づる事は。宇治大納言物語卷四に載せたり。此國は聖武帝天平十五年二月に。佐渡を以て越後と并せ。孝謙帝天平勝寶四年十一月。又置きて國とせらるる事。拾芥抄に見えられたれば。越後の屬國なり。上杉謙信佐渡を攻め取りしより。其金を採りて年々國用を催せり。大関秀吉公無ねて此事を聞き傳へ。謙信義子中納言景勝を欺きて奥州に移し。其國を私領して。金を採らせらる。然るに金出でずして。程なく盡せられし。其後年々多くの砂金を出だせり

武徳編年。慶長九年八月十日。大久保石見守長安伏見に至りて。其司る所の佐渡國の山兵砂銀を出だす事影しるを言上す。五年以前庚子まで。上杉景勝佐州を領せし時



僅に砂銀出でけるが。辛丑公領となり。石見守按捺して。壬寅一ヶ年に出づる所。萬貫目なりといへり

圖録に。佐渡上銀。一分上銀。元印銀。新印銀等載せたり

但馬國より金銀を出だも。延喜式に對馬島の銀をいふ。但馬の國司に。此例に非ざといへば。其比より銀を出だせり。圖録に。但馬國小判金。小判銀。南條小判。但馬南條。小玉銀等數品載せたり

石見國より金銀を出だも。金種類石川方言あり。金藏原をツヨシ伴金石をテイといふ銀多く出づる故に。銀山の名となれり

武徳編年。慶長九年八月十日。且石州銀山も庚子まで。毛利輝元領分の時。銀僅に出でけるが。辛丑公領となり。長安掄斷して。壬寅の年中。砂銀出づる事。四千貫目及べりといへり

圖録に。石見國栴銀。公用切銀。灰吹銀等數品載せたり

美作國より銀を出だも。作州真島郡神代。古の坑山其蹟猶存也。圖録に美作國二筋小判銀壹分銀載せたり

此外に。伊豆國より金銀を出だも事。陸奥南部より黄金を出だも事。五事略に載せ。圖録

に。各國の金銀數十品載せられたれども。其坑處及正據なきに記さむ。今の佐渡の金銀。陸奥。石見の銀のみ。多く出だも。又圖品。圖録等に玩賞の金銀。凡七十品載せられたれども。國家通用の寶貨にあらざれば記さむ。和銅の國史に見えしより以來。諸國に出づる珠。多く攝州多田。奥州南部。同仙臺。越前。紀伊。伊豫。日向。備中。美濃等より出だも。其中越前を上品とす。是も鑄錢國家通用の外。弄錢。繪錢數百品あり。孔方圖鑑。珍貨百錢圖及錢範泉彙等も多く載せられたれども。通用の寶貨にあらざれば記さむ

我國人皇の御代となりて。一千五六百年の間。異朝より来りし寶貨と。國土に掘出せし寶貨と。其數廣大無量にて。測算の及ぶ所にあらむ。然るに金銀銅の三貨。今日國家に充満をもとも見えざるに。七寶最上の物。不消不滅の徳をかへり見む。耗散磨滅をる事多き故なり。耗散磨滅に。大率。三の不利あり。第一に。欽明帝の御代より。佛氏舶来し。代々の帝王佛氏を尊信し。推古。聖武二帝大佛を造り給ひし如く。佛道次第を行はれ。天下の寶貨。佛氏の用となる事十一七八。是一不利なり。第二に。貴賤上下。皇統神明の大御國に生れ。古帝明王の世。無爲無欲。各長壽の風俗を去らむ。奇珍異物を賞美し。外國他域の品を導び。海舶互市に交易し。天下の寶貨奇貨の用となる事十一二三。是二の不利なり。



第三。貴賤一統。美麗華色を本とし。服佩器物玩弄の品まで。鏤刻泥薄し磨削し。天下の寶貨。裝飾の用となる事十一。二。是三不利なり。識者出で給ひ。此三不利を考制あるとき。我東方の四大洲は長むる寶貨富有第一の國たるべし。昔の寶貨を磨滅せる事制禁あり。續日本後紀。承和元年二月癸巳。勅曰。金銀薄泥用之公私。有費無益。宜禁斷之といへり。漢土にも耗散磨滅の事をいひし人。數多あり。其一二をいふ。

宋方勺泊宅編云。東坡常怪。今之黃金。不若昔之多。糜之者衆也。宜其小價貴也。

草木子卷四雜前古黃金如王莽末年。省中尚有六十餘萬斤。後世黃金絕少。由其所耗之途廣也。

金一爲箔。無復再還元矣。

謝肇淛文海披沙卷黃金一種。古多而今少。漢高帝賜陳平黃金。至四萬斤。梁孝王沒庫中黃金尚四十萬斤。韓嫣以金爲彈。董卓積金成塢。而漢制天子每聘后。輒用黃金二萬斤。今之大內豈易辨此。所以然者。世間糜費漸滅。唯金最多。而四夷之外。去不返者不與焉。衣服之銷金。鑲金。器玩之鍍金。鍍金。鈎金。鈎金。篋扇之泥金。灑金。貼金。神佛之鋪金。經典之乳金。軸文之貼金。天下廣。一日殆以萬計。皆磨滅至盡。間有銷鎔所得者。一萬中之一二耳。生之有限。安能副無窮之用哉。考宋太宗時禁自中宮以下服玩皆不得用金。一切銷金貼金。鑲金。間金。戴金。圍金。解

裁。金別金。熬金。陷金。明金。泥金。影金。榜金。闌金。盤金。織金。金線皆不許造。安今日而一申明此禁也。

謝肇淛がいふ所を。今此地にて金貨を磨滅する所と。一々引き合せ見るべし。外國は持ち歸りて返らざるの外。無益の事は七寶最上の物を磨滅するに勿體なき事はあらむや。又彼がいふ如く。天下の廣。一日よりも磨滅する事。廣大なれば。終りに寶貨も盡くすに至ると宜ならむや。金貨は地中に在りて。數千載を経る程。生長する物なり。天明四年。筑前國那珂郡にて。後漢光武帝金印を掘り出だす。是即倭奴國王の印。其方七分八厘。後漢の尺七寸八分を以て度る。其長伸びたるよし。度量衡再編に載せたり。

本より我東方の四大洲は長むる寶貨第一の國なれば。諸國の寶山を一々封禪し。彼の金山。此は銀山。銅山と尊崇し。掘開する事を禁じ。永く地中に安置して。不消不滅。幾億萬歳を経といへども日月と同じく仰ぎたきものなり。彼肥後國阿蘇山を。明朝より壽安鎮國山と稱美することくは致しなば。人々自ら寶貨を尊き事をかへりみ。聊も耗散磨滅の氣は起らむ。大切に取扱ふべし。國家入用の節は。何時よりも掘開して。其用を



催すよいたらむ。其内一。國家の三不利を考制し。無益の用を省きなば。國家所有の寶貨。一。天下を往來せるとも。聊も耗散磨滅のなき理なり。先三不利を制するは。金銀泥薄より始まる時なり。人々磨滅を志する所なり。

此邦の金箔三寸四分四方。百枚重三分四厘許。世一四寸箔といふ。佛師箔は箔の上品なり。また大中小三種あり。大は曲尺方四寸。中は三寸五分。小は三寸。大は百枚重四分六厘。中は三分九厘。小は二分七厘。箔は製する金は。上澄といひ。此紙ともいふ。銀箔は百枚重七分許。

其二貨を磨滅する。天下の廣き推知をべし。海舶互市の費は。五事略及折燒柴記一。正保戊子より寶永戊子まで。六十一年の大數を載せたり。其外太宰の經濟録も。寶貨の事論あれども。何れも耗散磨滅の不利を説かぬ。また永く地中一安置し。我國四大洲一長むる不消不滅の寶貨とせる事を説かぬ。故一隨筆しおくのみ。

茅窓漫錄終



催すよいたらむ。其内は。國家の三不利を考制し。無益の用を省きなば。國家所有の寶貨。一天下を往來せるとも。聊も耗散磨滅のなき理なり。先三不利を制するは。金銀泥薄より始まる時。人々磨滅を志する所なり。

此邦の金箔三寸四分四方。百枚重三分四厘許。世は四寸箔といふ。佛師箔は箔の上品なり。また大中小三種あり。大は曲尺方四寸。中は三寸五分。小は三寸。大は百枚重四分六厘。中は三分九厘。小は二分七厘。箔は製する金は。上澄といひ。出紙ともいふ。銀箔は百枚重七分許。

其二貨を磨滅する。天下の廣き推知をべし。海舶互市の費は。五事略及折燒柴記に。正保戊子より寶永戊子まで。六十一年の大數を載せたり。其外太宰の經濟録にも。寶貨の事論あれども。何れも耗散磨滅の不利を説かず。また永く地中には安置し。我國四大洲は長むる不消不滅の寶貨とせる事を説かず。故は隨筆しおくのみ。

茅窓漫錄終

春波樓筆記



司馬江漢小傳

○司馬江漢小傳

司馬江漢は有名の洋畫家なり延享四年に生れたり名の峻字は君岡春波樓と號せり幼くして學を好み頗英才の聞ありき初戀川春町につきて學ぶ事數年二世春信と稱して名を成さんとしたりき已にして谷文晁の門に入りぬ文晁は一世の畫家にして當時大い人の賞讃を得たるものなり江漢こゝに更に其の妙技を得即人物を描けば活氣満ち花木を寫せば天真を欺き山水の幽邃なる所風雨の猛烈なる狀自在に筆を用ふるよいたれり一日人あり西洋畫を示しぬ江漢取りてこれを見るに二種あり一の筆跡緻密にして毫末の微も眞に近からん事を欲するが如く一の筆跡粗略にして物の大概を畫くに似たり其の緻密なるは手を取りて見るによろしく粗略なるは距れて眺むるに適し何れも一種特得の妙ありて軒輊をべからざるが如し奮ひていそぐこれ正に學ぶべき業なりと然れども當時外人のことが國に留まるものなくまた萬里の波濤を超えて彼の地にゆかん事難しいかと思ふとせんと思ひ煩ふうち偶蘭人の長崎にて外科の醫法を傳ふと聞きいそぎゆきて彼の國の語學を修めやうやく師を得てこれを學ぶ事を得たり後刻苦精勵幾程もなくして略其の技に通じ天體全圖地球全圖及京都の八景等を畫きて頗る譽を博したりといふ今



日洋畫の盛なるは時勢の然らしむる所なりといへども江漢の力また多き居るといふべし江漢性沈着にして剛毅心中而も涵々落落たる所あり初漢學を修め後蘭學をもてこれを助けられたれば其の見識意外に出で到底通常の畫家の及むざる所あり文政元年十月癸未年七十二

日洋畫の盛なるは時勢の然らしむる所なりといへども江漢の力また多き居るといふべし江漢性沈着にして剛毅心中而も涵々落落たる所あり初漢學を修め後蘭學をもてこれを助けられたれば其の見識意外に出で到底通常の畫家の及むざる所あり文政元年十月癸未年七十二

春波樓筆記

司馬江漢著

○治久しく續きぬれば美を好み奢り長をる者なり。奢といつ奢るともなく。目よも見えど、年よる如く。いつ老ゆるとも知らず。いつ奢るとも知らざる者なり。

○畫の書と同物と云ふ。古の風俗を。今日前よ見るの畫なり頃日寛永年中の畫を見し。女の帯の。縮巾を半巾にして。結びめなし。振袖の二尺よ足らず。頭よ飾竿かうかいなし。油も水油のみよして。今の迦羅の油と云ふなし。此一事を以て知るよあり。吾國物産限り有り。故に祿限りあり。天下一體上貴人より下の賤しきよ至るまで。懦弱となり。遊樂美觀を好み。是れ内より亂れ散るゝ基なり。今既よ如斯。爰よ於て。下をまひたげ。民これが爲よ困窮す。竟よの動亂起れば。必。外國其虚を窺ひ来らん。速き慮りなき時よ必近き愁あらん。

○米穀價安くして。諸家困窮する事なり。甚しき間違なり。五穀成就するを豊年と云ふなり。豊年を以て困窮する事。表裏のさたなり。爰を以て奢りたるを知れり。小子幼時。米穀



價六十目一石五六斗餘なりき。今の漸く一石なり。定相場といふべし。今年も天氣順道にして。又々豐作疑ひなし。先年凶年打ち續きて。俄にもみ倉建つ。芝守田川町加藤庄次郎とて。甚世事才ある者にて。算筆の云ふに及ばず。諸藝に達したる者なり。商賈もあらむ。千金の地面を持ち居て。是にて暮し居けるが。もみ倉の役人となりぬ。甚調法と思われ。倉ふしんまで彼がかゝりとなり。或と予に對して云ふ。俵敷の事など咄しける。彼に云ひて曰。咽元過くれ。煖すれると云ふが如し。家盗賊入る時。俄に用心して。後より用心をとする者なり。初倉の建つ。必豐年の續く基なりと。總じて今年迄の米穀やすし。昔有徳院殿大君の御代。予壮年の時なりし。米安く。其時も武家勝手あしく。上にもおせとありけり。其頃錢甚不足して。六十目一四貫餘なりき。今の六貫四五百文なり。是は武家よりよけれど。又商人よりあしく。兩全なる事なしと知るべし。豊後の國岡の城。誠堅城といひ。此事にて。若くあらむ。石は非ず。ぬめり岩にして疊み揚げ。七曲りの坂を登り。城門に至る。太閤秀吉此城を見て。かゝる堅城もある者かと感心したりとぞ。今大平の世となりて。出入あしく。老人など別けて難澁する事にて。是又兩全なる事なきなり。是よりして年々順道にして豐作し。其中より若い

る者の死し。若き者となり。飢饉と云ふ事。夢も不知者の世の中となりて。國米の倉の鼠の穴となり。言譯の爲に戸前の口は俵を積み。後の空虚にして。何がなして凶年を願ふ様にて。食は飽き満つるに至りて。天不順となり。夏月冬の如し。萬物不實。爰おいて一年の凶年にて。人多く餓死するに至る。天地の機はこうした者なり

○世の中。狐狸の輪奈かけて。智慧の餌にて人を釣るなり。狐狸が云ふ。我等の人と違ひ色々化する事を知りて。人かつて是をしらむ。然れども。彼鼠の油揚のかほりが鼻に入る。と。あれを喰へば。輪奈にかゝると。命を失ふ事を知れてあれど。命を捨て、も喰ひたいと云ふ。畜生のあさましきなり。爰を以て考ふる。人間も輪奈にかゝりてふな者じやと思ひ。人の好む物を以て餌として置けば。人悉く輪奈にかゝる。餌は盃。小判。玉章。扱て酒さかさを餌とすれば。是を好む者多し。喰ひたふれ。酔ひたふれ。後には狂人の如く。首を斬られても知らぬ様なるなり。又小判を餌とすれば。急ぎ金がほしくなりて。地道にしての埒があかむ。夫故に山事にかゝり。大損をして。後には盗となるなり。又玉章の則ち女なり。是を餌とすれば。貴賤上下老若をえらまむ。輪奈にて首を瀝る事なり。然れば貌の人間にて。心の獸ならむや。稻荷の狐なりと心得。獸の手を合せて拜



むも尤ぞかし

○賈ト先生糖俵と云ふ心學の書。兎角は慾を止めるな。貧はなるぞ無慾にしてよき。已に備はりたる業を業とし。正直にして。望を少くし。只足る事を知る時。大福長者なり。人の元裸で出で。裸で歸る事。此世に居る。すこしの齡を。永く覚えて。僅活きて居るうちを。慾の爲に地獄のあり様。未生以前に立ち歸り。何もかも皆無と云ふ事を。知れば。安樂世界なりと教へける。一人出で。其の隣は天摩屋善兵衛として。悟りきつたる男あり。其人となり。寐たい時寐。起きたい時起き。喰ひたい時喰ひ。呑みたい時呑み。福をも悦ばず。禍をも憂とせず。生をたのしまず。死をも惡まず。得失存亡を釣瓶に譬へ。苦樂盛衰を碇なりと。貧富貴賤を一目に見て。諸もなく。禮もなく。人譽むとも榮とせず。人毀れども耻とせず。此人寵愛の一子あり。男子なりしが。十歳の春急病にて相果てぬ。日頃の悟りきつたりとも。なにか力の落さざらんと思の外。憂ふる色なく。我等問ひて曰。寵愛の一子を離し。憂ふる色の見えざるのいかん。實は慾ふる心なきか。天摩屋笑ひて云。吾十年已前子なし。只十年已前の如し。なよの憂ふる事のあらんやと。きつたりとしたる顔色。是等の彼の輪奈を抜けたる人か。未生以前の人か。生きて居るか。

死して居るか。形の人にして情なし。人として人の情なき。何を以て人と云はん。昔子を先だてし人の歌として。有るものなきことを本のすがたなれ。とい思へどもぬる。袖かな

○予考ふる。何事も耽けるよりして。躬を損ふに至る。度量過さず。中庸が宜し。片々よつてのあしく。世の中の人を善事と導き教へても。善人となる人の生れながら善心なり。惡人のどう教へても惡人なり。惡人がある故に善人も知らるゝなり。皆世上の人が善人むかりよて。未生以前の心よて。争ふ事なし。人此世界へ産れ出でしより。長となりて。世の中の事皆珍らしく。是迷ふ様よしと者なり。中年から其迷ひがだん／＼と覺ゆ。老年になりて。きつたり覺ゆ。爰はかいて未生以前の人よかへり。塵無自然たる事を悟り。安樂にして死すこと。本道の人といひぬ。若き時から悟りて。前よ云ふ天摩屋の如し。ならぬ事ならぬと知れ。金も儲けられるならぬ。儲ける。名もあがるならあける。只己の量を知りて。出采ぬ事をするな。何事も身のをさまる様よ工夫して。過度するな。是は能きあんむいじやと云ひて。やり過すな。中位の所が大事じや。聖人の危きを嫌ふとして。爰を踏んだら。あすこが上ろう。あぶないと云ふて。何よも出采を。馬よ



も舟にも乗る事ならむ。兎角己を知るゝあり

一休むなし

○一休の事。京洛中にて。不思議の名僧にて。凡僧と違ひ。魚をムシヤ〜と喰われたる。其喰ひたる魚を吐き出だし給へば。忽小魚と化して。水中に遊ぎあそぶ。奇妙なる事なりと。評むんするを。一休聞き付け。さらば衆人の目を驚さんとして。米る何日下松のほとり。紫野においで。魚を喰ひて。其まゝ元の魚に吐き出だし。水中にてをとらしむる事なり。おのぞみの方。見物に参るべく。大夫天下老和尚一休禪師と自書して。町の門々へ張る。自筆の張札を各〜見て。其日よ京中の者。群集して。一休の門に至りければ。庭の真中。大鹽の水をタフ〜と盛り。其傍に色々の魚を皿に盛りける。見物の者。今か〜と待ち居る處へ。一休興より出でて。皿よりもりたる魚を残りを喰ひつくし。夫よりして彼鹽に向ひ。吐き出ださんとせられけれ共。一向に出でせ。一休の曰。腹中一萬と納まりたれば。嘗て出でせ。糞になりともいだすべし。各々もおかへりあれと云われけりと

○或人ふぐといふ魚を喰ひて死す。一休は引導を頼みければ。我行くま及ばせ。書付し

て違ひすべしとして。海中有毒魚名云河豚魚。面腹白背斑人不食。此魚嗚呼痛哉。亦治郎食之忽死。彼歳五十四。又彼歳五十四矣。合せて數珠の一連百八煩惱のきつなをふつ〜と截りて行たい方へとゆけ

○一休高野山に登りて山形の詩

- 七山 秋葉落
- 五山 春開花發空
- 三山 迎連峯報佛心亦
- 一山 高近都卒内院土進空
- 二山 闍表華藏世界地醒寂
- 四山 平幽源化佛惱亦
- 六山 夏涼風頰寂
- 八山 冬素雪

右と同じ



七山—里—放—光  
 五山—瀧—吟—落—碧—三  
 三山—海—浪—高—船—片—雲—社  
 一山—廟—等—一—扶—桑—神—片—漲—景  
 二山—客—成—群—數—萬—人—輪—塵—春  
 四山—樓—鏡—動—月—輪—燭—宮  
 六山—谷—洗—流—煩—本  
 八山—花—猶—腹

人間の機を考へて云ふ

活者イキモノの水で包んで火で動く薪を喰ふて腹ウツの電イッる

文化八年未三月廿八日

不言道人

景法師

元来有物不離身。揚手同揚神足伸。全體分明無面目。起居動靜似侮人。

梅法師

往昔江南没落時。起青道心成法師。致問橫斜疎影古。伊勢壺底暗皺眉

虱

獨卧寒衾患幾千。余身貧極有誰憐。夜深依被半風食。天到曉鐘未作眠

男根

一生忍衆動焦身。八寸推根尚勝人。入道修行若時事。須臾老去革頭巾

女淫

元来有口更無言。百億毛頭擁丸痕。一切衆生迷途所。十方諸佛出身門

熊谷教盛

生年十六美男兒。身命碎珠回馬時。熊谷道心從此發。法照庵室念阿彌

宇治川

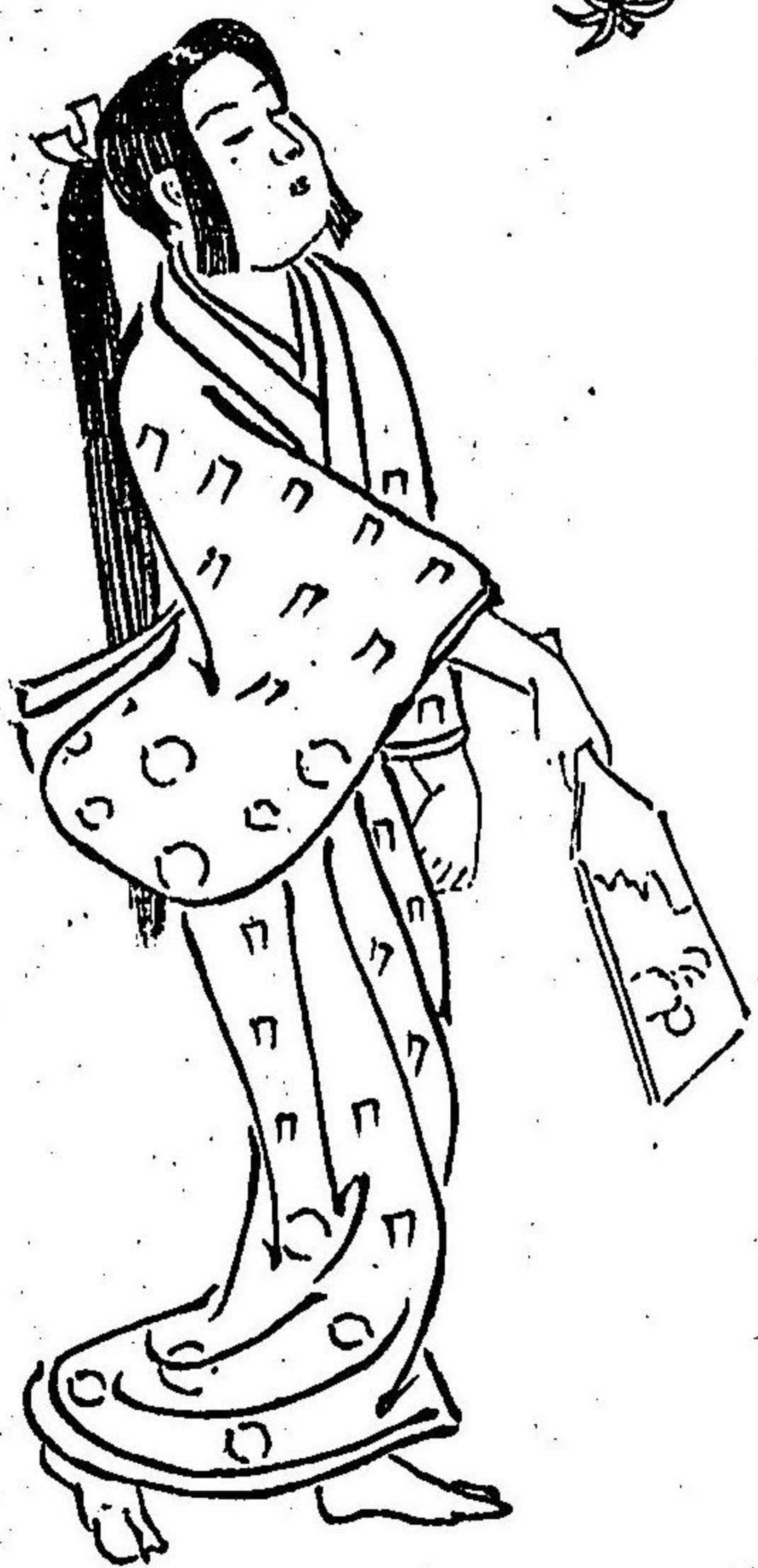
萬騎如雲守水邊。東關諸將各爭先。功名誰出四郎上。一馬化龍何着鞭

右の一体の在詩

○一体の文明十三年に寂す。文化八年未の年まで三百三十年に在る。此一体はなすと云ふ書。百八十年以前。寛永年中に出来たる本なり。畫の古風なる事。今の風俗に比せば。



寛永年中  
の画



男女共帯結目なり

十

甚しき違なり

貧福の論

○貧を貧として、富を知らず。福を福として、禍を知らざれば、貧福一物なり。然れども福を福とせざる者より、貧を貧と思ざる者、世に聞えよ。顔回の如き臂を曲げて枕とし、樂しみ此中よりありと雖も、我等が量りけんよて、不自由なんぎなる事なり。福を福とせむ。金銀貨財一時に滅亡すといへど、少しも之を憂へむ。自若たる者の、福を福とせざる者なり。是も亦難き所なれど、貧を貧とせざる者より、行ひ安かる可し。

○近江國水口より三里入りて、日野と云ふ所。岡本町と云ふ所。中井源左衛門と云ふ者商家にてありけるが、日野の一向往來のあらざれば、人の通行なし。故に高ひの手立なし。總じて近江の國の人物は、心肝大きく思慮あり。日野のみせを聞き、商人の體見えど、然るに富商多し。又此近き八幡と云ふも富家あり。其地貧にして渡世なりがたき邊土に、必、富める者あり。吾近郷に産する物を買ひ取り、他國へ行き、之を賣り。又其國の物を求め、他所へ行き、是をひきき。吾國に歸るに及んで、吾國になき物を求め、米を交易と云ふ。見世を聞き、商をするを、買人と云ふなり。往來の路傍に一膳飯を鬻く者



の。生れし其處を離れをして渡世のなる故。生涯一勝めしを以て終る。牧源左衛門と云ふ人の。僅の元金を持ち。奥州仙臺へ行き。此地に綿を生ぜざる事を考へ。大坂より綿木綿古着の類を買ひ取り。仙臺へ舂まらしめて。賣りける。初の少々宛の商ひして。後年を追ひて大商となり。今に至りて。人五十人を遣ふ程の見世を張り。中井新三郎と家名して。今三代目なり。其外下總の相馬太田原邊へも見世を出だし。今もわいて三十萬金の富商といなりぬ。予二十五年以前長崎へ行くとき。此日野より。老人も達ひし。俵六十位は見えしが。賣り七十餘れる老人なりき。この三年以前。九十餘りて病死しぬ。二代目の酒などを好みて。五十餘りして病死しぬ。今の孫の代なり。珍らしき商人なり。文化八年未年しるす

○大名などの心がけ大切なり。猛殺なる時。人恐れて従わぬ。懦弱なれば。内より亂れ敵る

○志の同じ様なる人の。今始めて見ても。昔より知る人の如し

○白頭如新傾蓋如古何則知與不知おのが身は化さるゝをば知らずして。狐たぬきををそれぬるか

○悟りても身より心をしぼり繩。とけざるうち。凡夫なりけり

○無と云ふもあたらし言葉の障か。むとも思はぬ時ぞ。むとなる

○妙法阿字真言佛阿彌陀。四十九年一字不脱。莊子曰。不言教

○つれ／＼草。何がしとかやいひし。世すて人の。此世のほたしもたぬ身。たゞそらのをごりのみぞをしきといひしこと。誠さも覺えぬべけれ

○人死して財の残るゝあしく。又よからぬ物たぐひへ置きたるもつたなし。後よの誰と心ざす物あらば。生けらんうちよどゆづるべき。朝夕なくてかなはざらん物の外。何も持たてあらまほし

○あらえびすの云。君の子を持ちたるやと云ふ。子なしと答へければ。さていきて物の哀しりたまはぬ。親妻子の爲。世は諂ひ。耻をもあすれ。盗もする心。なるなり。其ぬす人を罪せんより。上たる者着をやめ。費をたふきて。民を撫で慰をすめ。下は利あらん事うたがひなし。衣食住は足りたる人。ひが事すること盗人と云ふべけれ

○西大寺靜然上人。腰屈み眉白くして。大裏へ參られ。西園寺内大臣の云ふ。あなたふとや



と申されければ。資朝卿の曰。是の年のよりたると申されける

○蟻の如く集り。東西よいそぎ。南北よ奔り。貴あり。賤あり。老いたるあり。若きあり。行くところあり。歸る家あり。夕よ寝て朝よ起き。いとなむ所何事ぞや。生をむさばり。利を求め。已む時なし。身を養ひて。何事を待つ。期する所只老と死とよ有り。其来る事速なり。念々の間よ留まらむ。是を待つ間何の楽しみかあらん。惑へる者の。是を恐れむ。名利よおぼれ先途の近き事をかへり見む。愚なる人の。又是をかなしむ。常住ならん事を思ひて。變化の理を知らざればなり  
友とするよ惡き者七つあり

○一よ高くやん事なき人。二よ若き人。三よ病なく身つよき人。四よ酒好む人。五よたけくいさめる人。六よそら言する人。七よ欲深き人

○能友三つ。一よ物くる友。二よくすし。三よ智慧ある友。物くれる人の。必。金持よ非ず。大敵なる人を云ふ。又醫者の。世に多き者なり。多くの所醫のみなり。又智ある者。醫も智多し。

○高倉院の法華堂の三昧僧某の律師とかや云ふ者。或時鏡を取りて顔をつくく〜と見てて。吾貌の見惡き心ちしければ。其後の長く鏡を忘れて手よ取らむ。更よ人よも交る事

なし。御堂のつとめのみして籠り居たりと。良人才子も。他人の事のみ謀りて。己をば知らむ。我を知らむして。外を知ると云ふ事あるべからむ。己の貌の見惡くけれども知らむ。心の愚なるをも知らむ。藝のつたなきをも知らむ。身の數ならぬをも知らむ。年の老いぬるをも知らむ。病の身を侵すをも知らむ。死の近き事をも知らむ。行ふ道の至らざるをも知らむ。無好もかく云われけり

○いかなる愚人よても。己の智者なりとして。且愚と云ふ事を知らむ。己の度量を知る事至りてかたじ。年老いて漸く知る者ありと雖も。多くの知りがたし。他を謀る時の。至りて明なり。己をとかる時の暗し。他の非を見て。己よ教ふるよの志かじ。譬へば往來よて。奴僕とはなしまながら。又いかり腹立などしたる見よくし。獨して笑ひながら行く者あり。女をふりかへり〜見て行くあり。鼻の穴へ指さしいれ〜して行くあり。見惡し

○長田春臺と云ふ森侯の醫のこなしけるよ。某と云ふ儒者。病をうけて死よたるよ。腰よ金を結ひ付けてありけるを見て。皆々興さぬ

○人の兎角己が好める事のみほむる者なり。祖徠が己が國を夷狄と書きたる如し



○文化八年四月十四日。武州大相模の不動大聖寺に居たる禪僧壽山和尚参りて。蕎麥を出だしければ。初のほどに。汁かけて喰ひけるが。後の汁かけを喰ひける。汁のさらひかと問へば。イヤ好きなりと云ひつゝ。汁のかけざりき。歸りて後思ふ。汁の中魚味あるかと疑ひしなり。出家のさも有りなん

○ある時。阿部侯へ参りたる時。次の間近臣の居けるが。予根付時計持ち行きける。天府のせいのまなく。カチ／＼と廻りければ。是の命の縮む様なる物と云ふ。即縮むなり。日々死に近よると云ふ事を知らせしむる

○此國の風として。無類の物を寶として。萬金を以て換ふるの愚なる事なり。たぐひ二つあれば。其價をひくうす。唐畫など一向すけ破れ。不明をも名の聞えたる筆跡をばとりとみ求む。假令真物もせよ。何の益あらん

○往古。佛道の此國へ渡りしも。如此佛像を尊拜すれば。何の爲すかと云ふ事わきまへむ。上天子も是を信仰して。寺院佛閣を建て並べ。今の世となりても。寺領をそくむく付けられ。無用の僧高官に居れり。天皇よて天下を治むる爲に設けたるなり。上たる者の信仰する者よあらむ。下の愚民に布き。忽ち善心とする謀事也。故に地獄極樂を以てす

○阿部侯初めて入府の時。江戸發駕の日の。天氣もよく。品川までの皆々出入の者送りけれど。夫より先予一人なり。又川崎本陣田中兵庫方よて出會して。箱根まで可參旨申上ぐ。予の歩行故に。漸く加奈川に。跡より参りし。此所の先刻御出立と申す。日も晚景なれば。此所に止宿して。明朝早天に立出して。小田原に泊り故に。夜に入りても能きと考へ。其積に決し。翌朝起き見れば。大雨なり。夫故にとも小田原まで行く事かなむ。然れども何分箱根へ行き。湯治場を見物して。歸り大山へ登るべしとて。加奈川を發して。戸塚邊にて家臣の者に逢ひたり。予がト云ひ残したる事あり。幸に大井河の渡を預す。飛便ありと云ふより。一封を頼み遣す。其事に領分順見の小百姓を按撫するの謀事なり。老いたる者をば駕の傍へよび。自扇様なる物か。菓子様物の物をつかひされたりと云ふ事なり。百姓と云ふ者の。誠は愚直なる者よて。其國の領主をば。人間に非む。神なりと思ひ居る事よて。一度拜すれば。一生涯あんかんよして。さざひをなし。故にや老婆老夫皆出て。珠數を以て拜む事なり。閻君の死なざるを佛とするとして。蠟燭もあり。是の大なる量見違ひなり。上として下の百姓をば隣むし。くいなし。民の父母なりと云ふ事を知りて隣むべし。吾教の如く極老の者よ。駕の前へよび。手自扇



様の物を下され。中老の菓子など下されければ。誠難有かる事涙を流しければ。予も共は落涙せしと。吾方への文通あり。今の諸侯の珍らしき御方なり

○文化辛未六月五日。熊谷邊の百姓として。六十は近き者采りぬ。其者の曰。先生の所。星の圃あるよし。吉田氏の親類より承る。其星の圃を以て。毎朝水を捧げ齋れば。家繁昌して災難を免るよし。此守を頂戴仕度と云ふ。予一笑して云。星の圃あり與ふべし。拜する共不拜とも。勝手次第なり。夫吉凶。星のあづかる所はあらむ。然れども火星を蘭語にて。マルスと云ふ。摩利支天の事か。真言にて。皆星などを以て神としたる者也。禱りても祟をしと云ひ聞かせければ。是は鹿忍なる事を申しけりとかへりける

○岩國に至り。彌山が嶽に登らんとて。其路犬戻しとして。岩石をあらこし。飛泉流れ。誠岩國とい。爰を言ふか。農夫樵夫の路にして。漸く過ぎて。一村に入る。五六歳の童女。三歳位の兒を背におふて行くあり。此者両親離れ。外よるべき者なし。一村中の食の餘りを請ひて助かりぬ。家のあると見えたり。鰥寡孤獨の者の。領主より助けすくふべき。此國の大夫舎と云ふ人の。賢人にて。學問したる人と云ふ事を。其頃聞けり。行き渡らざる事と見えたり。世の唐めきたる事を好み。風流なる人を誤りて。學者と云ふ者多し

○ある者子を法師とせんとして。學問させければ。佛經かもしろからむとて。文學を好みて。古人のふるまひをしたひて。色々心移りて。佛の道の更知らざりき

○大福長者の曰。まつしくて生きたるかひなし。富めるのみを人とす。然るも。大福とならんと欲するよし。無常を少しも観る事をかれ。常に心を強く忍んで。萬事世願を叶ふ可らむ。所願は無量なり。欲は隨ひて志をとげんと思ふ。百萬の金も忽ち失はん。所願心は芽す時の。我を亡すと心得。少しの事でもなすべからむ。金銀をば君の如く。神の如く恐れたふとみて。従へ用ゆる事をかれ。恥望んでも恥とせむ。衣食住のつゝゑををぶき。己の業をおこたらざれば。大福人となる事忍なり。然れども金を積みて用ふる事をさし。貧乏と同じ事を。大欲は無欲に似たり

○淨瑠璃と云ふ。永祿年中織田信長の侍女。小野の小通とてありけるが。信長生害の後。大閻秀吉の簾中と稱せらる。徒然は。源氏物語ならひて。昔相馬頭義朝の末子牛若丸。金賣橋次と共に。鞍馬山を出て。奥州伊達秀衡方へおもむく折から。三河の國矢矧の長者の娘。淨瑠璃御前と忍び逢ひたる古事を。小通草紙物語につくりしとぞ。



御前と稱する。幼若なる男女の事なり。六代御前とい。小松の内大臣重盛の息男の事なり。女と心得たる者多し。又静御前の義經の愛妓なり

○鳥羽の院の御宇。信濃前司行長入道平家物語を作る。生佛と云ふ盲人節を付けて。琵琶合せて語る。生佛は學んで。琵琶法師十二段。一節を付けたり。瀧野檢校。角澤檢校の兩法師。三味線合すと云ふ

○天正年中角澤より傳はりて。薩摩治郎右衛門。攝州西の宮傀儡師の人形は仕立て。十二段をかたる。永祿年中六字南無右衛門女大夫と。京四條川原は芝居す

○薩摩の法體として。淨雲と云ふ。淨瑠璃大夫の根元なり。其弟子四人あり。江戸肥前。同外記同土佐とかや。永開半大夫河樂流説經與八郎歌念佛日暮林清都大夫一中是は本願寺派の出家なりと。寶永正徳のころなりき。都古路國大夫。一中の弟子。初の名は半中。又元祿年中岡本文彌一流をかたる。文彌ぶし是なり。然し是等の皆一段淨瑠璃よて續物よていなし。寛文の頃。大坂は井上市郎兵衛。井上播磨之孫。藤原要榮。門人井上市郎大夫。清水理兵衛。此理兵衛は安居天神の邊の料理茶屋のよし。播磨は貞享二年五月十九日五十四よて病死す。其風をのみこみしよや。清水をい今播磨と云へり。竹本。豊

竹共は此風なり

○攝州東成の郡天王寺村の百姓。井上は従ひ。清水理兵衛は學び。貞享二年乙丑の年。道頓堀は芝居を興行す。是を義太夫と云ふ。淨瑠璃作者近松門左衛門も。其頃の人なり。義太夫は。竹本筑後之孫。藤原の博教と受領せり。正徳四年午の九月十日六十四よて病死す。文化八年辛未まで九十七年よなるなり。是義太夫節の起なり

○蒼田變じて海となる。湖水或は河自然と山嶽の砂石流れ出で。河は湖中に入り。年々よして溢れ。旱よ至る。今淀川稻葉侯の城内へ。水車を以て水車の水を入る仕かけなれど。其水車一向よめくらむ。淀の川瀬の水車として。世よ名高し。故よ取除もせむ。今の淀川淡くなり。城内は低くなり。河水旱よ溢る。故なり。諸國此うれひ多し。關東の河は泥川也。中國西國は流河よして砂石多し

○常人は悟るよ及ばむ。出家は出家たる名の如く。宿なし。されば物々事々よこなれ。是も非もなし。然るよ釋迦須彌山を造りて。八萬法藏を説く。八萬の法藏皆譬諭方便なる事を知らむ。今の僧は其經文よ迷ひ。人を濟度する事にさておき。己一人よ教ふる事能はむ。常人と共は迷ひなり。釋迦が佛よなれと教へたる事を。能く考へ知るべし



○ある日。目黒新寺として律院あり。門に入るあたり塵を掃ひてうるはし。しばし行けば。三界外相の碑あり。僅に登りて山の中腹に出づ。方丈の山下あり。正面に本堂本尊の釋迦佛。黄金泥色其作妙なり。堂中の傍木魚を撃ちて一人の僧あり。我足音を聞きて。後を顧みる。生きたる者氣の動く處なり。然れ共實に精舎にして人跡絶えたり。更に妄念起らむ。只松風の音のみして。何なる凡人も心澄み。塵外に出でたる心ちし。夫より右の方山に登り。深林の中を過ぎて。裏門へ出づ。出家の律僧のみ。定の出家なるべし。朝粥を喰し。四時過るに飯を喫す。其餘食を求めむ。湯茶のみなり。亦戒を保つ事。五戒。十戒。或は四五十戒とす。

○森侯の。播州赤穂なり。大川量平と云ふ醫者ありける。文人才子なり。隱居して常に京に出で、學者と交る。鬚長く白し。顔色唐人の如く。常に唐服を着て。予は生寫しを頼む。畫にして日本人との見えを。然るに只文學の長じたるのみにして。經學。實學。天學甚疎し。先達七十餘にして故人となりぬ。今の醫者皆其弟子なり。其學風にして。文字の事の甚明なり。其中神木主膳。學醫の一人なり。

○貴賤上下共に學ぶべき者の。聖人の道なり。只。論語。大學を幾遍もくりかへし讀むべし。佛の教の學ぶべからむ。異端の教なり。八宗。九宗共に本源の起り。西洋の天主教なり。釋迦爰に基く者なり。天正の頃。信長切支丹を信用して。近江の國に南蠻寺を建て。宗法を弘めし。其教に曰。天地の始まらざる無量劫の時。天帝天地日月を造り。後に衆生を生じ。天帝之を憐み。末の世となりて。人智の私を以て。彼の爲に迷ひ苦しむ。之を「ハラデイス」と云ふ。安極世界に導き給ふ教なり。此世の假の世。此世にて難行苦行して。首切られ。重き罪をうくと雖も。厭ふ可らむ。忽安樂世界へ産れ。天帝の憐を受け。無量劫が間死すると云ふ事なしと教ふるなり。是釋迦の須彌を立て。地獄極樂の方便と同じ。又禪宗の悟と云ふも基く處に同じ事にて。只譬論方便を打ち貫き。天地の虚空より。人間萬造皆現れ。亦本の虚無に歸ると云ふ究理を知り曉す事なり。是に異端の教なれば。常人のかつて學ぶべからむ。若。此悟を學ばんとすれば。六十餘にして學ぶべし。壯年の者學ぶ時。天壤の廢物となるべし。

○火事の事。毎々疎草と云ふ事にて。火を出だしたる者。格別の罪なし。何故と云へば。貴人の家よりも。火を出だす事有りと云ふ事なり。貴人大家の從者多し。下々の輕き者なほ多し。火を疎末にする事。輕き者なり。一年切の奉公人にして。家をければ貨財を



し。寒月の衣服うすければ。火を以て焚き。火を少しも恐れぬ。火事あれば幸なりと思ふ者多し。大工。左官。屋根ふき。其下をこたらく者。火事を待つ事。吉事を禱るが如し。江戸の昔御入國の時分。八百八町ありし。今の千八百八町となる。其電數も及びて。何億萬と云ふ事にして。冬月の火事のある道理なり。年々火事あれば。武家町家共衰微する事なり。ある人の咄しに。鳥見と云ふ役人四五輩。田舎へ行きたる時。村の庄屋の宅にて。晝食するとして。其飯を喰すると。忽死しけり。何なる事と吟味したる。飯の内トカゲと云ふ虫あり。飯をめしつぎようつす時。上より落ちたる者と思はる。其飯を喰く者。十七八の女なり。然るに五人御家人を殺したる故。此女罪なしと雖も殺されたり。予考ふる。毒虫の飯器に入りたるも知らずと云ふ。元疎草といふべからず。迂濶の至りなり。又芝牛町の火事。タバコの火より出で。又谷町の火事。一人者火を焚きかけ隣へ行きたる跡にて。火事となる。大風の時。火を恐れざる。倉卒といふべからず。總て江戸の人の。京の人と違ひ。綿密にあらざり。其上近國近郷の者。奴僕となり。此者共。火を恐れざる黨なり。然れば火を出だす者。一人なり。重き罪科は行ふ時。火事少かるべし。扱冬月火事ありて。夏月なき。夏の天氣地を照す事つよし。故に地氣上

升する事さかんなり。萬物皆濕りて。火移らぬ。冬月の天氣薄く。地氣升らぬ。故に萬物乾きかれ。水氣なし。故に少しの火でも。物も移る事早し。

○間宮林藏と云ふ人。蝦夷の興へ冬月行かん事を好みて。文化午年十一月。此地を發して。早未正月にかへる。六月二日。予が家に来る。冬月の海川皆氷となる故。其上を渡り行く故。行きやすし。唐太の地。トナカヒと云ふ歌あり。大き大八車を引く牛程ありて。頭は大なる角あり。全體鹿の如し。蹄もわかれてあり。如牛如馬畜ひて其用をなすと云ふ。からんだよては「レンシイル」と云ひ。支那よては。順鹿と云ふなり。唐太の領主もなし。都會の地もなし。一向の不毛の地なり。滿州人。蝦夷人と少しの交易をなすのみ。○備前岡山より二里過きて。宮内と云ふ處。茶屋あり。遊女ある處なり。夫より二里右の方へ入る。足守に至る。爰に木下侯の領地なり。留まる事數日。予鹿の生血を殺らん事を云ふ。領主儀は狩に出でられける。漸く鹿一足を獲たり。則生きたる鹿の耳元を小つかを以て衝き破り。血を殺りければ。人々懼れをなしける。予薄弱なれば。鹿の生血に至りて肉を養ふ良藥と聞く。然れども得がたき物なり。又ある時。鹿の肉を喰はんとて。料理人よ云ひ付け。る。煙り具くして。一向は喰ふ事能はぬ。何なる故と問ふ。此所



の吉備津の宮あり。皆其神の氏子なるより。獸類の穢として之を忌み嫌ふ事なり。故に外に竈を造り。鼻の氣の入らぬ様。長さ竿を以て煮たる故。あんないあしと云ひければ。夫故に吾生血を呑みたる事を聞く者。如鬼思ふも尤ぞかし。

○佛國曆象編と云ふ書。今年開板して。全部五冊。一冊五十餘丁あり。京東森隱士。無外子釋の圓通撰する者なり。其書を閲する。須彌山を以て是とし。地圓球なる者。非也。日輪中より日天子あり。其眷屬あり。月中より月天子として。又眷屬あり。月食の地景。あらを羅摩計都食をなす。暗氣と云ふ者なり。須彌山の九山八海として。上を北とし。下を南とし。日月横を旋る。今天下。用ふる處の曆象考正及地球なる説を。悉く非として。梵曆と云ひ。天竺釋迦在世の時の法を以て是としたる書なり。

江漢後悔記

○我今年七十有餘にして。始めて壯年よりの誤を知り。我若き時より志を立てん事を思ひ。何ぞ一藝を以て名をなし。死後に至るまでも。名を貽す事を欲して。初め刀を作らんとせし。刀の武門の第一の器なれば。之を造り。後代に殘し。名を後世に知られんと思ひし。今天下治り。國靜謐なれば。古刀の名高きを以て武門の技とし。新刀を用ひむ

亦人を伐斬る具にして。凶器なり。故に後悔し止みぬ。又目貫縁頭。皆刀脇差のかざりなり。治世の之を翫弄する者多し。則後藤彫として。其家代々を以て名作とす。其頃。宗與宗眠又彫として。高彫を略して。肉あるとして。かきあげの如く。肉高彫りて。人物虫魚に至るまで。妙工をなす。又宗眠といへる。英一蝶の下畫にて。草々としたる威筆をうつし。片切彫として。毛彫として。一流を工夫す。其二代目宗與も。之を次きて。妙手とす。畫は譬へて云へば。後藤の高彫として。金銀其外赤銅火色四分一色々々まじへて形とす。是極彩色の如し。彫として云ふ。肉ある彫として。薄彩色の如し。宗眠。宗與の黒畫の如し。各々一流を工夫して。一家を爲せり。此上の工夫。非をば名を得る事かたし。爰にわいて止めぬ。其頃平賀源内として。讃州の人なり。江戸神田お玉が池と云ふ所に住す。源内の物産家にて。本草者として。仕官を好まむ。浪人者なり。其頃八重霧と云ふ歌舞妓芝居の女形。兩國三つ股にて。蛭を取るとして。水に溺れて死せり。之を源内戯作して。地獄落ち。閻魔王の前にて。狂言をする事を。讀本として。世の人甚珍らしき新作として。おもしろく思ひ。其後神靈矢口の渡しと云ふ。義太夫淨璃理。人形芝居の狂言の作をす。淨璃理の。大坂より初まりて。近松門左衛門の作多し。故に大坂言葉なり。夫を源内の。江戸言葉とし



たる故にや。甚珍しく。爰において世俗源内の名を知る。源内又おらんだの奇物を好みて。其頃の蘭學者も少く。杉田玄伯。中川順庵のみ名あり。源内のヨンストンスと云ふ蘭書の五六十金の物にて。家財夜具までも賣り拂ひ。此書を得たり。此蘭書の。世界中の生類を集めたる本にて。獅子。龍其外日本人見ざる所の物を生寫したる事。かむかきりなし。今此書も所持したる者ありけるが。其頃にかつてなし。其後長崎へ行きけるは。昔し獻上せし。不用として長崎へ持ち歸る。此物通詞の家。數年ありける故。くづれ損じ體なしとなりて有りけるを。源内東都へ持ちかへり。數日工夫をばめぐらし。竟に考へきめたり。是今ある所のエレキテルなり。大名。小名之を見物す。爰において源内を奇人と稱す。然れども。只紙の動き飛ぶと火氣の光り見ゆるのみにして。人の體へ動むる事なし。彼ヒロドロの壺もありけれども。何とする物と云ふ事を知らむ。源内死後。おらんだより渡り来りて。今に至りて見せ物に出だし。世俗の人も見事と云ふりぬ。源内の嘗て金銀銅鐵の山もある。山頂は立と云ふ。如岩如石物現る。之を見るの術あり。我等も是も加りし。甚しき間違ひ見損じある事にて。後悔し止みぬ。

○我が先祖は畫を描きし者ありけるにや。吾伯父は。吾親の兄なり。生ながらして畫を

善くす。其血脉の傳りしにや。予六歳の時。焼物の器は雀の模様ありけるを見て。其雀を紙よりつじ。伯父に見せける。十歳頃に至りては。達摩を描く事を好みて。數々畫きて。伯父に見せけり。後長じて狩野古信に學べり。然るに和畫の俗なりと思ひ。宗紫石に學ぶ。其頃。鈴木春信と云ふ浮世畫師當世の女の風俗を描く事を妙とせり。四十餘にして。俄に病死しぬ。予此にせ物を描きて。板行に彫りけるは。贗物と云ふ者なし。世人我を以て春信なりとす。予春信は非されは。心伏せむ。春重と號して。唐畫の仇英。或は周臣等が彩色の法を以て。吾國の美人を畫く。夏月の圓の薄物の衣の裸體の透き通りたるを。唐畫の法を以て畫く。冬月の圓の。茅屋は篋籠り。庭は石燈籠など。皆雪よりつもれし。淡墨を以て唐畫の雪の如く隈どりして。且其頃より婦人髪は鬢さしと云ふ者始めて出でき。爰において。髪結び風一變して。之を寫真して。世は甚行なれける。吾名此畫の爲に失はん事を懼れて。筆を授けて描かむ。

○唐橋世濟として。下谷竹町と云ふ所は居て。儒者なり。吾近隣に宗元と云ふ醫者あり。世濟爰に來りて書を読み。或は講釋す。故に予も行きて學びぬ。先生題を出だして。詩を作らしむ。予も詩の下に誌す。唐風は非をば風雅はあらむとして。名は峻。性の司馬。字は君



嶽。號ハ江漢とす。峻嶽を以て名字とす。江漢とい。予が先祖ハ紀州の人なり。紀の國ハ日高川。紀の河として大河あり。洋々たる江漢ハ南の紀なりと。故ハ號を江漢とす。其後如米先生ハ逢ひし。江水。漢水として二水の名なり。之を合せて名としたるを笑ひけり。略人ハ知られければ。江漢として置さぬこれも謬とぞ

○畫ハ貴賤共ハ好むものにて。別けて彩色をれば。俗服ハ入りやまし。今唐畫と云ふも。和畫と云ふも。元ハ皆唐畫にて。富士ハ日本の名山なるを寫しても。描きかたハ唐の法にて。吾日本にて。始めて工夫したる事ハ一つもなし。然るハ日本往古ハ家の内皆土間ハ居立したる事にて。今ハ總床となり。土間の遺風のこりて。床の間と云ふ處を傍ハ設く。總て土間の時ハ。主君此床ハ坐し。従ふ者ハ土間ハ坐す。しき物あり。坐しきと云ふ。黄蘗派の禪僧拜の時。下ハ敷物あり。是を坐しきと云ふ。今ハ家の内ハ坐敷の名あり。其後主君ハ替へて掛物とす。故ハ釋迦達摩或ハ維摩の如き唐にて。古ハハ吳道玄皆神像を畫く。多クハ仙佛なり。後代となりて。花鳥山水人物も。ともハ神佛ハ非ざる者を畫かけり。今三幅畫として稱する者。中尊左右を脇畫と云ふ。必。中ハ人物も。世俗釋迦觀音の類ハ佛なりと。人死ぬれば佛なると云ふ。爰ハおいて。中尊壽老人左右鶴龜松竹の

類なり。吾日本にて。妙畫と稱する者探幽なり。成筆の法として。一拂ハして。人物山水花鳥を描く。誠ハ奇絶の技なりとぞ。此風天下ハ流行す。中興唐畫風と稱するハ。宋朝明朝又ハ今の清朝の畫を寫し得て。唐畫家と云ふ。何れハしても國用の物ハあらむ。皆翫弄物として。今ハてハ只床の間の掛物とするのみ。床違ひ。たな書院として。古ハの遺風なり。只名のみとして。其古事を知る者なし。書院ハ必文出し机として。傍ハ一間ほどの處ハ窓あり。其窓ハあかり障子を四枚立つ。えんの方へ差し出したる者なり。今ハおいて由舎ハあるものなり。江戸ハ數々火災にて。諸侯の家ハも書院の名のみとして。文出し机なし。然るハ畫の妙とする處ハ。見ざる物を直ハ見る事にて。畫ハ其物を真ハ寫さざれば。畫の妙用とする處なし。富士山ハ他國ハなき山なり。之を見んとするハ畫ハあらざれば。見る事能ハむ。然リといへども。只筆意筆法のみとして。富士ハ似ざれば。畫の妙とせる處なし。之を寫真するの法ハ。蘭畫なり。蘭畫と云ふハ。吾日本唐畫の如く。筆法。筆意。筆勢と云ふ事なし。只其物を真ハ寫し。山水ハ其地を踏むが如くする法ハして。寫真鏡と云ふ器あり。之を以て萬物をうつす。故ハかつて不見物を描く法なし。唐畫の如く。無名の山水を寫す事なし。又畫を作るハ。五彩の畫の具ハ。皆膠水を用ひむ。蠟



油を以て調和して。之を造る。貴人の席上。酒邊の傍にて畫く事能はむ。文字と同じく戲  
は畫く法は非む。國用の具也。吾國の人の。萬物を窮理する事を好まむ。天文。地理の事  
をも好まむ。淺慮短智なり。予此日本に居て。吾國の人の差あり。甚しき謬なり

○予壯年の時。老母一人あり。親をば十四歳の時失ふ。かつて妻子なし。母の性質剛直し  
て貞實也。孟子の母の如し。故に三十有餘にして。妻を娶らむ。ある時考へ思ふ。生涯  
妻子を求めむして。母没しぬる後に至りて。日本諸國を遊歴して。而後より京攝の間  
に住居して。昔此地に旦丹と云ふ俳諧師歳八十餘まで存在して。妻子なし。十一二三歳  
なる童女を多くかたわら置き。左右の物を取らしむ。彼が自筆を得る者鮮し。皆童女  
をして代筆をさしむと。予此タンタンが人となりを志たひし。母七十三にして老老  
して没しぬ。さらば家を捨て。獨歩して。諸國名山を遊覧せんと決しける。親族の者  
頻に留め。聖人の教を以て示し。人道に妻子を以て子孫とし。之に差ふ時。人道にあ  
らむ。爰に於いて竟に留まる。是も量見違なり

○さて亦子なき者の物のあつれを知らむ。我子を愛するのあまり其愛他の子に及べり。  
此情の書も文も述ぶる事能はむ。然るに段々と生長して後。各々己の志しをあ  
らひし。必。親の志と差ひ。己の身體。親の躬より出でたりと云ふ事を辨むる者鮮し。且  
又孝をつとむる者多からむ。親を親とせざる者多し。親の子を子とし。子を思ふの情深  
し。是己の體より出でたる故なり。今に至りて考ふる。子の無きよ志かじ

○今西洋の天學。萬造の窮理を以て考ふる。天地の中。一つとして靜まる者更になし。日  
輪。五星。地球。月皆動き旋り。一刻も留まらむ。元より。生類人間走り動き。惑ひ迷ふ事。天  
と一物の機なり。目も物の移り。耳も音のひびき。神經以て之を知り。物欲。色欲。飲食欲。  
貴も賤も此欲の爲に靜まる事能はむ。然るに此三欲に迷ひ惑ふ。活きたる者の性質  
なり。我名利と云ふ大欲に奔走し。名を需め利を求め。此二の者に迷ふ事數十年。今考ふ  
る。名ある者の。躬に少しの謬ある時。其あやまちを世人忽ち知る者多し。名のない  
者誤ると雖も。知る者なし。是名を得たるの後悔今にして初めて知れり。愚なる事  
ありや。夫天地の限りなし。名千歳に殘るといへど。十萬歳に至るべからむ。爰を以て  
考ふる。名の生きて居るうちの名にして。是皆心得違ひなり

江漢後悔記の畢

旦丹の法々  
松本



○夷賢志と云ふ書あり。皆因縁因過の事のみを誌したる書にて。談議僧の取りあつかふ者といへり。其中に崑山の揚老と云ふ人。一日門に坐して居ける。一の婦人前を通る銀の簪を墜せり。徑のかたらの石にあたりてカラリと鳴る音聞こえたれば。此女が行き去るを首鼠<sup>ウツクシ</sup>ひそかに彼石の處へ行き拾ひんとて。往き見れど。簪とていなし。只蛸の石の間にあるのみ。揚老不思議と思ひ。今鳴りたるのこたして此あたりと見し。其間一俄一人の男そこを通り。うつむきて物を拾ふを見しが。彼銀の簪を拾ひ取りたり。揚老是を視て。高聲に呼びて曰。夫は吾墜したる物なり。是へ返せと云ふ。拾ひたる男は。何か偽りを云ふとて。足疾に去る。揚老追ひかけて。其著物を執へて。是非に夫を返せと云ふ。時彼男簪の股より二つとして。一分にて魚を買ひ。一分にて酒一壺を求め。揚老子いざこなたへと家に至り。二人して賞翫し樂しむべしと云ふ。揚老是を同心して。其魚を煮んとて。先釜の上置く。サテ酒を暖めんとする處へ。隣の猫魚をくわへて忍逃げ去れり。ヤレ惡き猫めと云ひ。杖にて逐ひ撲たんとして。誤りて一壺の酒を打ちこぼし。皿に墜ちて微塵となる。

○文字も皆唐の字なり。聖賢も皆唐の人なり。然らば唐の書籍を讀み得ざれば。理非分明ならむ。其意を得んとするうち。文章のなもしろき。心移り。色々と書き貽す事も。皆唐の文章にする者なり。是に心得違ひなり。人によりて書くなど。一向にさらひ。唐の文章を知らざる者。還りて聖賢の志ある者あり。故に和語にして書くべし。兩道に益あり。大槻玄澤と云ふ人の。仙臺侯の外科にて。蘭學に名あり。頃日。タバコ<sup>タバコ</sup>の起原の書を引きて。皆漢文なり。タバコに多くの愚人卑賤の好む者にて。故に此書の世の嘲弄ものとなりぬ。又京東森の隱士無外子圖通と云ふ出家。佛國曆象編と云ふ書を著せり。是に須彌山を是とし。地球を非としたる事にて。萬書を引きて。漢文なりき。文盲なる者ををどす。謝事なり。又文學者も。理に疎き者まあり。

○一夕土佐の人采りて。獨笑妄言の序を見せし。讀む事流水の如し。若輩の人なれども才子なり。然れども。是も文字を知りたりと云ふ事を。他知らせるまでにて。其文章の意味一向に知れぬ。一句ごとく。寫し讀みたまき者なり。

○鍋島侯の藤士利昌山領氏の話。在所佐賀にて。佛事ありて誦經す。一人の僧經をよむ事瀧の如し。一人の僧の曰。汝經文を疾く讀む事をなれ。音韻わからぬ。又汝をやくよむを自慢自負とする。予又是を模寫せん。爰に書いて筆に墨をてんじ。紙に照



をうつ事連綿。汝が疾く讀經する。此點と同じ

○人の必を移りやすき者なり。詩集を讀めば詩を作りたく思ふ。文章を見れば。文を作りたく。旅談を聞けば旅して他國を見まほしく。然れども一向の俗人の書もよまむ。只色欲飲酒よりつるのみ

○和學者として。日本往古の事を知る事なり。其書を見る。萬葉假名として。古事記。舊事記。などの言葉をしてある。今の假名字のなき古のかなを以てす。古雅のあれど。不讀和書者よのよめを解せむ

○朝靄の瑠璃色なる花。前朝咲ける一朝早く起きて。之を見る。常よりも色淺し。茶など呑み。又見るよおよびて。色濃くなる。金山より綠砂紺砂を出だすが如く。誠は青色の。日輪の空氣なる色なるを知る。先達て銅板を押す時。其板を日の照し。上は映じて青色に移るなり

○人國志と云ふ書あり。北條時頼最明寺殿の作と云ひ傳ふ。疑ひ無き事能はむ。然れども。天下海内をして。民情を檢察する。非ざれば。如斯詳し盡し知る事能はむ。今大平にして。風移り化は浴し。古は異なりと雖も。民情古の遺風あり。是皆風氣水土の所以使然

也。今將に此書を開き見る。信濃を以て美國と稱し。隣國の郡村を委しく知る者なり。此書を作る者。信州の人ならんか。日本諸國の人風。美濃を以て譽む。丹後の人の一人として善人なし。古。三生太夫此國の人なり。能く此國の人をかながみる。一向能き人なし。又伯耆因幡を以て惡しき國と云ふ。白井權八。因幡小僧。河合又五郎。此又五郎は又左衛門の子なり。又左衛門は。安藤對馬守の臣なりし。人を殺害して。因州鳥取渡邊數馬が處へ立ちのき。而後又五郎あり。故に又五郎は。因州鳥取の生れなり。予數々彼國の人を考る。各々才あれども愚なり。智あれども取り用ふる處なし

○今より二十七八年も過ぎし事にて。芝愛宕の下。村尾權之助として。小十人組にて。居宅を糺町法眼坂。人の半建てたる家を買ひ取り。又建てたして住みける。小身なる者故に。權之助夫婦と嫡子二十三歳。弟は十三四にて。下女一人仕ひけるが。ある時。五月淋雨。日々降りける時。日暮下女泣きて曰。今引窓を。火の玉飛びけりと云ふ。皆聞きて誠なりとせむ。其翌日も雨降り。三男玄關の後部屋を造り。爰に書を讀み居ける時。日もくれかへりける故。障子を開き見れば。長一丈むかり見えて。白髪を亂し。眼の金の如く。手は火の玉を持ち。腰切の衣を着。だんくと進み来る。彼童子脇差を以て貫き



打ちよしけり。夫なり。氣絶しぬ。其音は皆々かどろきて行き見る。鞆は手は持ち脇差の身に向ふへ投げたり。何故と問ふ。右の如く咄しけり。此庭は法眼坂の下よてがけなり。ふしんの時。狐の穴ありしを埋めし。必古狐のしわざならんと。其翌日吾宅へ父子とも来り。直は化物は出逢し者。聞きし。初めてなり。

○今より四十年前以前の事なり。六郷の川上は練子の渡りあり。則まりこ村なり。爰より二十町餘行きて。郷地と云ふ處の漆物屋の亭主。無ねて予は書を學びて弟子なり。九月の末。我をとまひて。郷地に至る。翌日の雨降りて。四五日も滞留を。其時五六町かたわら。江戸より来り居ける者として。手習の師匠あり。主人と二人連れして。彼師匠の方へ行さける。夜は入りて歸る。其路鹽山洗足寺と云ふ寺あり。是は古へ神祖源君公。此處を御通行の時。老婆の衣類をせんたくしけるを御覽じ。其寺號を御付け成されしとぞ。珍しき名の寺なり。其日の暮方。此寺は葬禮ありと云ふ。其事も知らず。夜半頃漆屋主人と。二人通りかゝりし。其寺の門前とおぼしき處。白き衣服を着たる者の。腰より下の地よりも離れ。あなたをたと動く者あり。世は云ふ所の幽霊なり。我も若年よて。此様なる者今まで見たる事なし。甚かろしく思ひけるが。其近邊。酒屋あり。寝入りたるを戸をたゞき起しければ。酒屋六尺棒を手は持ち。イザござれ世は化物のあらんやと云ひて。先きよ立ちて行く。跡よりツツくして就きて往き見れば。葬禮の時。紙にて造りたる幟の。木の枝は掛りたるなり。葬禮の時。幟の木は引き掛けたるを。其儘よして置さける。晝も此寺の前。樹木茂り。薄闇は所なり。殊更夜分故。甚あやしく見えしものことなりなり。

## 人間感

○予七十有餘よ及びて。始めて人間と云ふ事を知れり。壮年の時。古人の遺書を讀みても。其意味深き處は知りがたし。今將は人間と云ふ事を考ふる。不思議奇妙なる者なり。吾日本の。天照太神入道を聞き給ひけれ共。其古より此國の人ありて。歌と共は食を争ひたるを。大神日向の國。橿原の海濱は都を建て。人間の道を教へたるなり。中臣の族あり。親を犯し。然れば吾先祖も。其子孫よして。天子も我等も同物なり。世界の中は。未開古への日本の如き國。今あり。夫人間の道を教ふる。智の始めよして。漸々と人智盛んよ開け。其中。智ある者長となり。而後上下君臣分れ。爰はにおいて亂世の代となり。是誠禽獸の餌を争ふよことならむ。今方は大平の世よして。古。人間の起を知らず。當は名



利のみを是として。歡樂を極め。食よあき満ち。此欲の爲。大に迷ひ。賢きも智あるも。愚も智なきも。共に相争ひ。身を立て志を得んとて。暑よも寒よも奔走し。貴の駕籠のり。卑の之を昇き。老いて貧賤なるも。食を乞ひて生を保つ。何事ぞや。日々天旋り。四季移る事。幾萬億の後も此の如し。今日過ぐれば。亦明日となり。竟に老いて死に至る事。忍なり。人生白駒の隙を過ぐるが如し。夫天地の水と火なり。水火の中は生じ。天地の人の視る處。不視處を以て。窮理する者多からむ。天の廣大よりして。大地を見れば。一粟の如し。人の其一粟の中は生じて。微塵よりも小なり。汝も我も其みぢんの一毫ならむ。予爰を知ると雖も。之を信せず。小なりと思はざる。小慮を以て。能く人間の道理を考ふる。持つまじき子なり。子の我後身なり。吾體と同じ。子いたれば。我又いたむ。ある人の云。子なきは子孫斷絶と然らむ。吾先祖より余をぢの如く。連綿として。子々孫々何れか傳はりなん。其元を知る時。此の如し。佛道よて。此世を修羅と云ひ。亦地獄と名く。死する時の極樂なり。

寝るに樂起きて地獄の夢を見る。寢續よまる是ぞごくらく

○宿し婢老婆あり。其愚なる事数々ありけり。ある時。まぶなしの櫃を貰ふ。故に煮豆よせんとて。豆も鷹糞として大なるを取りよせ。糞ひける。櫃一つもなし。如何と尋ねければ。櫃の小口より薄く切りて入れけり。夫故に微塵とくだけて無きが如し。豆もついでに小口せよと笑ひける。

○人百歳に至れども。欲念の更ぬけると云ふ事なし。老人の耻ぢて云はむ。情氣の即神經にて魂なり。活きて動くうち。此念あり。老僧の杖をがりても。此念心根あり。鳥の啼つるも啼くも。皆さかる故なり。虫の羽を動し。音を出ださも盛なり。秋の末に至りて。西風吹き掃落せんとする時。草中よ虫の聲かれぐよを。死に至るまで聲を發する。神經にてくる所なり。天地の中の活物の。奇妙なる機よしたる者なり。是皆天火の爲まところ

○古川平兵衛が西遊雜記に云。薩州霧島山。九州第一の深山よて。幽谷險阻かざりなし。人知る者稀よて。山奥に肥後の米良山よ續きて。南に大隅よまたがり。數十里よ連りし山なり。高山と云ふにあらむ。深山なり。躑躅の木あまたよして。花の頃。谷々峯々緋の如し。山一面よ赤く段々と山奥に。夏までも咲く事よて。東霧島村。西霧島村あり。此山の中。險阻の峯。神代よ建てし天の逆鋒とて。數丈の鋒。岩上よ逆さまよ立てり。



石も非也。金もあらず。神代の文字にて。銘を鐫りてありと云ふ事。昔より云ひ傳へ。誰一人見たる者なし。然るに京に住する橋石見助。東遊記西遊記として。板本あり。西遊記の中。薩州に至り。此霧島の逆鉾を寫し見たる様を誌しなり。尤十死一生の思ひをなして。見たるとあるが。此平治兵衛の紀行なり。霧島町に宿して。庄屋の家に行き。鉾の一人を聞きし。昔より鉾ある事を。人々云ひ傳ふ事を。十里も人家なき深山幽谷の道もなき所へ行く事故。誰あつて。其路を知るものなし。身の程を知りたるもの。行くべき所はあらず。此五六里の村にいて。我々行きて彼逆鉾を見たりと云ふ者の聞き傳へむとの事なり。予考ふるに。此鉾何の爲に建て置きしと云ふ理もなく。天より降りしや。國常立の尊の建て給ひしとせよ。何なるかと云ふいこれもなく。埒もなき事なり。全く自然天然と鉾に似たる似象と云ふ者なるべし。吾國神代の事なり。傳記なし。神代以前の。何れの異國の人住居したるや。播州石の寶殿と云ふあり。四間四面に石を剝りて造る者人工なり。又因州に熊權現とてあり。皆柱石を以て疊む。是も人工の者にて。何の爲に造りたりと云ふ事を知らず。民俗の云ひ傳へる。古の神。此海へ橋を掛けたまはんとし給ひしとぞ。又蝦夷地に。タサリチと云ふ處あり。是に六角の柱

石の數かぎりもなく。海岸皆此石なり。是に人工のあらむ。天然の者なり。近藤氏エトロフ島へ。五度行かれし時。庄藏として。南部の者畫をよく描きし。蝦夷地を寫させ。其圖を予又寫せり。世界の中なり。此類いか程もある事にて。蘭書中より。奇妙不思議の山水景色ある事なり。吾日本の人の。僅の天の逆鉾石を見て奇妙なりとをる。世界の事を知らぬ故なり

○吾國にて奇妙なる。富士山なり。此に冷際の中。少しく入りて四時。雪峯に絶えむして。夏の雪頂さよのみ消え残りて。眺め薄し。初冬始めて雪の降りたる景。誠し奇觀とす。富士の駿河の國內より見たるに。あしく。二十里。三十里。隔たりて。遠くより望む時。山を高く見る。低き地より望みて。景色なし。此山のかたち。世界中になし。元市場と云ふ處に。白酒を賣る處なり。爰に富士山の圖を板行し彫りて。埒もなく押ししてあるを。蘭人往來する時。何枚も需むる事なり。さて此山の。神代の以前より焼出し。數千年を経て。四面に砂を吹きふらし。如此かたちとなりぬ。我々年の時までに。頂より煙立ちけるが。今の煙なし。山嶽に皆世界の不開前の物にて。波濤の形あり。此富士のみ。出現の山なり。遠く望むべし。山に登るべからず。天の逆鉾の如き。埒もなき物なり。



り。此富士を稱歎すべし。夫故予も此山を摸寫し。其數多し。蘭法蠟油の具を以て。彩色をる故。騁驛として山の谷々。雪の消え残る處。或は雲を吐き。日輪雪を照し。銀の如く少しく似たり。

○吾國畫家あり。土佐家。狩野家。近來唐畫家あり。此富士を寫し事を去らむ。探幽富士の畫多し。少しも富士に似せ。只筆意筆勢を以てするのみ。又唐畫として。日本の名山勝景を圖する事能はむ。名も無き山を畫きて。山水と稱す。唐の何と云ふ景色。何と云ふ名山と云ふもあらむ。筆はまかせておもしろき様。山と水を描きたる者なり。是は夢を畫きたるも同じ事なり。是は見る人も。描く人も。一向理のよからぬと云ふ者ならむ。

○予壯年の時。専ら唐畫を以て人にも教へ。墨竹など描く法は。筆の个字點分字。節の法は。上乙。下ハ。小枝は雀足として。法則を以て人にも示す。ある時。仙臺侯の大夫後藤孫兵衛として。吾を旅館にまねき。机の板に畫を請ふ。予墨梅を畫く。描きながら畫法筆法を談む。此花を此所へ一りん描くと。則此根がままりて畫法の妙と見る處なりとかたりければ。皆々かんしんき。其後の仙臺侯へのめされ。相手より深川親和父子なり。奥方の公家衆久我家の女なり。簾屏風の内より御覽して。仙臺侯は吾が向はおいしまし。用人役平

賀藏人傍に居て。命に應じて。絹紙を取り次ぎ出だす。予曰。お好みは従ふべし。其紙へ美人を認めよと仰せられける。直に筆を採りて草々と。和美人の立てる姿がたを描く。是と對なる物を認むべしと。又同じく和男子を圖す。侯興に入りて。其畫を自持ちて。簾屏風の内へ御入りある。女中の笑聲交々したり。夫より絹地燈籠は色々の御好みありて。後より其近臣の者も望めとありければ。多くの墨竹墨梅を筆疾に描きけり。畫の八時頃より。夜の八時頃相濟む。親和と共に引き退く。伺公の間。谷田太郎左衛門一人諾め居たり。是は其頃の留守居役にてありける。親和の曰。足下の唐畫描と聞きし。和漢の人物風景山水を畫き。大名の前より。甚能きふるまひなり。今より二十年を経るならむ。天下の名を爲さんと云へり。吾居所の神仙坐なり。甚是より近しと云ひければ。親和の云。我足下をおくらんと戯れければ。小人の宿より茶のなまぬるきが有るのみならんと答へければ。扱々能き挨拶なり。我等が宿の會日。チトお出でてとて別れける。吾が年三十歳の時なりき。

○京師に應舉と云ふ畫人あり。生は丹波の笠山の者なり。京に出で。一風の畫を描出さ。唐畫もあらむ。和風もあらむ。自己の工夫にて。新意を出だしければ。京中之を妙手



として。皆真似をして。甚だ流行せり。今に至りて。夫も見あきてをたりぬ。又江戸の奥州の方へ屬して。氣質も京人のやうになし。唐畫も。和畫も似ぬ風。呑み込まぬ事にて。吾が自身工夫したりと云ひて。夫の法がないと云ひて。請け取らぬ。然れども。畫の其物の形を見て。其形に似るをよしと。法手本とせる處。即其物なりと心得たる者も無きもあらぬ。又奥州の方。今に於て。其かたくななる事かいらぬ。予二十五年以前より。日本の山水富士をこじめ。名山勝景を寫真にして。阿蘭陀の法を以て。蠟畫に畫き。諸國の寺院佛閣の額に掛け。諸侯貴客へも數々認め遣しければ。世よ之を奇歎と。需むる者多し。然るよ之を求むる者。皆上方中國筋の人なり。奥州の人。一向よ是を取らぬ。愚直なる事かくのごとし。

○僧を猥に爲さる事。今の僧。天下の遊民にして。出家の業なし。佛道も國民を治むる一助に備へたる者なれど。今の僧。已一人を修むる事を能はぬ。一體僧の出家として。家になし。愚民をして。譬論方便を以て教導せるを業と。今の門徒家の。甚。其法よかなへり。無智の凡夫を極樂へ往生せる事を。常に説き聞かせ。惡念の起らざるやうに教へ示す事なり。又禪家の。已一人を以て佛の本原を知り得る事にて。釋迦の遺言。八萬法藏

をもいひぬ。教外別傳と云ひて。解よも文よも述べがたき虚無自然たる事。天地の萬造。人間草木。皆水火の二氣より出で。又水火に歸する事を推究し知る。是を草木國土悉皆成佛と云ふ事を能く悟道せるなり。是も天下を治むる事よあづからぬ。古の出家よならんと欲する時。行者として。其頃一國よ一寺國分寺あり。今のなし。其國分寺へ行き。學問せる事なり。學問成就して。佛經の譬論方便の文面を能く解し。信實なる理を曉し知る。地獄極樂の論を以て愚民を善く導く事を得度し。其頃京よ玄菟寮あり。爰よて其學の長たるを吟味し。又戒壇として。諸所よありて。是よて度狀と云ふを請け。是よりして剃髮し。法師となる。是を教導師と云ふ。今の僧。寺を已の住居の家なりとし。我が高位高官なりと驕をきりぬ。民を善道に導く事を知らぬ。實に國用の者よあらぬ。故に今よりして。僧をみたりよ爲まべからぬ。田夫の如きよ至りて。子多くして。末の子を以て菩提のためなりと云ひて。小兒を出家よせる者あり。長りて惡僧となる者多し。中年にして。佛道佛理を好む者をして。出家させる時。名僧智識自ら出衆るなり。古の法の如くして出家せる時。僧も自然と減をべし。今の出家。死人を葬むる事を業とせるのみ。



○奕い下の賤しき愚人。酒食の外樂しみをなし。故に之を好む者多し。十人にして勝者の一人なり。負者九人盜となるより外しかたなし。先達白川侯權を取られし時。博奕の宿の死罪。其一坐の者の遠島と有りければ。其頃の一向博奕なし。

○芝三島町と云ふ處。年久しく人相見あり。石龍子と云ふ。生は攝州池田の産にして。今は寶子なし。孝安として妻の連子なり。五歳の時養子となり。今三十歳位なり。其母の先年病死して。今の母の三人目なり。石龍子の歳七十となりけれども。至りて健にして。又孝安に至りて君子なり。親に至りて愚人なり。然るは。孝安親の命少しも逆ふ事なし。親を尊敬する事聖經に不差。然るは相を見せる者百錢を出だま。其迷ふ者貴賤日々何十人と云ふ事を知らず。春三月比に至りては五六十人。平日は十四五人。或は二十人。又相を學ぶ者あり。是は孝安應對して。神相前編の正儀として。印刻の書を著し。是を講釋する事なり。初弟子入として金五百疋を出だま。又極の秘傳書と云ひて。之を傳ふるは。金七兩貳分。貴人の銀二十枚。或は三十枚なり。石龍子の人となり。文盲にして他人と交る事なし。大船の船頭の如く。人は向ひて禮をなま事を知らず。門人の内一二人と交るのみ。其一人は芝切通種物賣にて。文化辛未二月十一日。市谷より火出でて。芝赤羽橋にて

消ゆ。其時彼種物屋の老夫焼け死したり。焼け死ぬと云ふ事夢にも知らず。又吾相を見て。今より三年と云ふ。今に死なむ。相と云ふ者。面部の内。各々名を付け。或は五嶽とたとへ。兩眼を日月とし。占の卦をたつると同じ事にて。地の下は風あれば。風地の歡なりと云ふが如し。埒もなき八つ當りなり。又弱く見ゆる人を。短命と云ひ。金錢の乏しき人の誰が見ても貧相に見え。武士町人。百姓皆人品に見ゆる者なり。又貴人にも色黒き下相あり。唐よりも。日本よりも。天下の主となりたる。漢の劉邦や。日本の太閤秀吉の類。卑賤より出でて。天下を取りたる故に。古へ相者の見たると云ふは。後人の説にて。只文章に書きたる者なり。愚者。賢人の面體にて。誰が見ても知るなり。然れば世の貴賤のあれど。智者の少き者なり。愚人のみ多し。智者不惑。勇者不懼と云ふが如し。或るとき孝安親に向ひて曰。人老いては餘命なし。折々の樂むがよし。終日坐して愚惑の人の應對し。花さけども是を知らず。夏月納涼と云ふ事も知らず。書を讀みてたのしむと云ふ事も知らず。何を以て樂しとせるか。答へて曰。我人の相を見て。百錢を得。是を積みて金銀とし。又一日は三度の飯を喰ふより外はかもしろき事なし。樂み是にかぎると



○三世因果經曰。天上天下唯我獨尊。三界皆苦。我等安之。是の釋迦の遺言にして。人の能く知る處なり。予此語を解して云。天地の無始にして開け。其中無始にして人を生じ。是より先。無終の年數一人を生むる事。無量なり。其中我と云ふ者の。予一人なり。親子兄弟ありと雖も。皆別物なり。然れば予能く吾を教へて迷わざる時。生涯我を安んむ。迷ふ時。三界皆苦しみとなりて。我を亡む

○一生此世の中。暮を間。若き時より老ゆるまで。誠たわひもなき事なり。世の中の市の假屋の一とささき。誰ものこらぬ夕暮の空

是の近世人のよみたる歌なり。道歌なり

○樹木谷織田侯の隱居へ參るとき。織田某とて公家衆のよし。三十餘の方にて。客なりき。某の曰。江漢の西洋からんだの事を能く知れり。からんだの人類はあらむ。歌の類なりと云ふ。然れども。細工の妙なる事をまゐる事なりと被仰ける。故に予答へて云ふ。人の歌は及ばむ

○加賀の國松任の人。千代とて人の知る俳諧女なり。美濃の蘆元坊を師とまほとゞきを郭公とて明けよけり

澁かるがまらねど柿の初ちきり

朝顔や地は咲く事をあぶながり

朝顔は釣瓶とられてもらひ水

千なりやつる一筋の心から

○歌川の越前三國の遊女なり。其後豊田屋吟と云ふ。後尼となりて。瀧谷といふ。東國の方を行脚したる女なり

目覺しは琴あらべけり春の雨

さそふ水あらばくと螢のな

瓜紅のまつくは咲くや秋の海棠

おく庭のまれの寒やうみの音

たゞいても心のしれぬ西瓜かな

是の客に贈る

千代の常の女なり。歌川の遊女なり。孰れも其情見ゆ

○奥州石の巻の醫。京學を行きて歸るさ。予宅へよりし時。古式紙をもらふ。也有と云ふ人の句



盗ふか云ふて見やうか梅の花

五十二

奇人傳を見し。尾州藩士横井孫右衛門と云ふなり。俳諧の名を得たる人なり

○奇人傳云ふ。峯玄知の雲州侯の茶道なり。和歌を好めるの癖あり。或日郊外へ出で、梅園の花盛よて。梅樹の主を問ひて。樹を買はんとき。敢て肯ぜざるを。高價を以て強ひてのぞみければ。已む事なく約を。翌日酒魚を以て樹下へ来り慰む。農夫曰。根の損せざるやうはほりうがち。明日持ちまゐるべしと云ふ。玄知の云。いな左様は非む。いつまでも爰に置くべし。さあらば實熟さば如何をべしと問ふ。實の用なし。只花のみ望む所にして。吾物よして見ざればおもしろからむとぞ

一枝を吾物よして梅の花

小子玄知が風流をもて發句を作れり

○肥前佐賀の城下。泰長院とて禪寺あり。住僧大機和尚の歳八十餘よして。老僧たりしが。兎角住持たる事を愁ひて。隱居せん事を欲せといへど。後住なき故に免されぬ。ある時。寺を欠落して逃げ去りぬ。やうくよして尋ね出だして。後住を定め。而後。隱居せん事を皆々責めければ。大機の曰。後住の我疾よ約せり。相州鎌倉圓學寺近日来るべしと云ふ。ある時佐賀の藩士生野圖書と云ふ者。番頭と云ふをつとめて。三十餘の人を

り。文學もありて。頗。理學者なり。大機和尚よ詢して曰。地獄極樂ありや。大機の云。あり。又問ふ。火車ありや。大機の曰。あり。何を以て薪とし。何を以て火を出だまやと問ふ。大機黙して答へぬ。圖書甚怒りて責めとふ。機の曰。汝が。顔色赤し。是腹中よ火あり。其火何れより来るか

佐賀の藩士利昌山領氏節しけり

○專齋江村氏諱宗貝。倚松庵と號す。もと備前三つ石の城主よして。落城の後。京よ登り。宗貝よ及ぶまで新在家と云ふ街よ住めり。始め加藤清正よ仕へ。後森美作守よ仕ふされ共。斯の京よ居り。壽の百歳を保つ。老人雜話と云ふ書に。此翁の老をなしなり

○東湖禪師の歌よ

みよしののさくららの外よ峯もなし花やつもりて山となりけん

○賣茶翁の狂歌

茶錢の黄金百鎰より半錢までいくれ次第。たゞ呑み勝手。たゞよりのまけ不申

達摩さへおあして渡る難波江の流を汲める老の吾身ぞ

○佛書一向よつまらぬ事のみ多し。出家も經文をば讀まむ。只文學のみする事なり。爰よ經文中よある所を抜きかきま。海水の鹹く苦き者と問ふ。阿含經曰。三つの因縁あり。



海水の鹹苦のり。一つよの成劫の時。光音天に至りて過く大雨を降し。天宮及び天下を洗濯也。其中諸の所。穢れ惡む者あり。是鹹苦なり。其諸の不淨の物。大海に流し入れて合して一味となる。夫故に海水の鹹苦又曰。大海中。有諸大身衆生。所吐大小便利相聚爲鹹苦。右の海の中。世界が有りて。大なる人よて。其人此世界の如く衆生ありて。其人々の大小便があつまりて。海の水が鹹苦となるなり。又曰。雨降りて海に入れども海水不溢。華嚴經云。大海有四熾燃光明大寶。其性極熱。常能飲縮。百川所流無量大水。故大海無有増減。是の華嚴經と云ふ經文よ。海の潮が盈ちたりひたり。又の大雨が降りても。海の水があふれもせむ。是の何なる事と云ふよ。四熾燃光明大寶と云ふ火の燃ゆる大なる寶がある。定めて海の真中よある事なり。其大寶殿が。極めて熱まる事なり。夫故に所々方々から。大河の水が流入する事。無量なる大水を燃えあがる。大寶殿が。皆飲み縮めかえり。故に大海の潮の。増も減もせぬなり。

地獄と云ふ所の。地の下。何里程ありやと問ふ。俱舍論と云ふ經を引きて依りて曰。南閻浮提下過二萬由旬。有無間地獄。梵一云阿鼻。長阿含經云。先世修十善供養。沙門造塔供養者。依此福業。得生北州。北州之人者。盡得生天也。四州中北州果報殊勝也。唯有種々

快樂之事。更無有苦。此阿含經よ云ふ所の。おもむき。前の世よて。十善を修め行きて。又の沙門塔を造り。供養する者の。此爲よよりて。北州と云ふ所よ生る。事を得るなり。此北州の地。福樂の業のみよして。壽命盡きて死ぬると云ふ事なく。直よ生る。なり。四州の中。此北州と云ふ所の。果報殊よ勝れたり。唯常よ種々快樂しむ事のみよして。更よ苦勞と云ふ事なし。

○皆是釋迦阿難の云ひのこし。事故よ。出家の釋迦聖人の道を學ぶ事故よ。此經文を真にけよ請けて。譬諭と云ふ事を知らむ。誠よ愚なる事なり。天よ生る。と云ふ。死よたる事なり。人々善事をまれば。北州よ生ると云ふ。此世の事なり。皆愚民よ教ふる法なり。又曰。長阿含經云。此地平なる事如掌。無有蚊蛇蛇惡獸。無有沙石。陰陽調和せり。四時順和して。不寒不熱。無有冬夏華葉茂盛事也。其土よ自然の粳米が有りて。無有糠糟。如白花聚。忉利天衆味具足せり。其常有自然金銀。有摩尼珠。名曰焰光。置於鍍鍍下。飯熟光滅。不勞人巧。右の忉利天と云ふ。佛むかり住居する所よて。此上もなき樂しき世界なり。手も勞せず。自然と白米のありて。飯となり。暑寒もよいかげんよて。蚊の人をさすと云ふ事を



く。蛇などのあしき虫もなし。路も平で山坂もなし。爰が則極樂浄土と云ふ所なり。人死  
まれば無心即安樂なり。爰を以て極樂と往生をといふなり。今の出家の誠は此やう  
なる所へ死ぬれば往く事と思ふ。愚と云ふべし。法華經の釋迦説きをさめの眞實の  
經文と云へり。故に法華經を見し。やとり奇怪なる大地より三千の寶塔涌き出でた  
りと云ふが如き。機事とて。譬論なる事を知らむ

最明寺時頼の百首の歌として。道歌あり。其中に

只ありの人を見るこそ佛なれ佛も元の只ありの人

法然上人の歌

墨染の心の底のそめむして世渡り衣着るぞかなき

○古より悟道人幾たりもあり。名の聞えたるもの。眞の悟道人はあらむ。天竺釋迦の天  
子の兄弟と云ひ。貴さを棄てて、乞食の業をなす。孔子の仁義の道を弘むと雖も。人はを  
用ひむ。竟に古郷にかへり。春秋を作りて。死後名を揚げたり。眞の悟道人は。無極の  
人と云ひて。名もなく音もなし

○天地の中。水の傾きあり。今日日本水干減する時なり。今亞墨利加の方水高し。土地減む。

故に日本の地開けたる事。甚近し。故に人智も淺し。歐羅巴の地開闢も久し。又人智も  
深し

日本佛法の起。聖徳太子守屋の是非を論む

○我が日本の人。究理を好まむ。風流文雅として文章を装り偽り。信實を述べ。婦女の情は  
似たり。婦女皆迷ひ惑ふ。必。欺を信じて是非を昧し。いよしへ欽明帝の時。壬申十三年  
百濟國より始めて佛像經論を渡す。信むる者蘇我大臣。稻目宿禰等。信用せざる者は  
物部大連尾輿。中臣連鎌子なり。故に佛像經卷を稻目たまふ。大臣と謀りて向原の家  
を拂ひ浄めて寺とす。即。向原寺と號す。我が朝佛法の起。僧侶の始なり。其の年天下疫  
病流行して人多く死す。神國異域の外道の教を信むる故なりとして。佛像經論を堀江  
に流す。寺院堂塔を焼滅す。夫より二十九年を経て。亦重ねて佛經及禪律佛工師寺匠等  
を獻む。時、敏達丁酉六年なり。同己亥八年。新羅より釋迦金像を貢ぐ。故に愈馬子等佛  
法を信じ。堂塔を建て並べ。時、亦あはく。疫病流行す。乙巳十四年三月帝は奏し。守屋  
は詔して佛法を斷つ。爰に於て佛塔を斫り倒し佛像及佛殿を燒き拂ふ。餘る所の難波  
の堀江に棄つ。其の夏六月にして亦蘇我の馬子奏して再佛法を起す。秋八月にして天



皇崩む。同九月豐日の皇子天皇の位に即き給ふ。丙午春正月用明元年なり。次の年夏四月天皇病みて崩じ給ふ。爰に於いて守屋穴穂を帝とせん事を欲む。馬子推古も奏して穴穂を殺む。諸王子群臣と謀りて守屋を殺む。聖徳太子其の軍中にあり。馬子の必しも幾兵にあらむ。守屋必しも寇賊に非む。守屋佛を廢するに我國神國たる故なり。穴穂の皇子にして推古の女皇なり。馬子穴穂を殺して推古を立つるに。女主佛法を念むる故なり。時は太子攝政たり。馬子其の後幾ならむして。果して崇峻帝を弒む。馬子主君を弒むる大惡人。太子之と與む。是を聖賢の人とせんや。佛法國を治むるに設けたるに非む。今に至りて政道に益なく。之を破り敗る事能はむ。上閣く下亂を起す事此のごとし。

○予江漢考に支那及び日本究理の學をなし。古に猶人智淺し。まかれば日本が國神の道を以て他邦の教を用ふる事有るべからむ。佛法の異道にして其の教別なり。いよしへ上天子下諸臣。佛像經卷を以て專拜し。常病疾おのづから愈え。吉事福樂拜し願ふ所從ひて自生じ。奇妙不思議を爲す事。是何なる故ぞや。支那我國に鬼神を論ずる者あり。誠は愚論と云ふべし。鬼神といふ水火の二氣を云ふ。天の火氣地に徹し。地の水氣と相混同して升降す。是を鬼神といふなり。人此氣中に居て清濁を知らむ。疫病。麻疹。痘瘡。皆此

氣の侵す所なり。鬼神の怪異をなす者も非む。草木花發け實を結ぶに正理にして奇ならむ。然れども實はこれ奇とまへし。怪これを奇と云ふべからむ。それ怪に狐狸の爲むところなり亦愚恐怖し。或は患ひ。心中惑念疑り結ばれ。目は怪を見る。皆己の迷より視る處にしてかつて怪にあらむ。僧侶並に就いて愚民を誑し。死靈亡魂なりとま。夫わが國神明の盛なる事。伊勢皇太神へ東西南北の農民に至るまで。つねに參禮する事。虚日なし。拜禮する者かつて私願を口よ言はむ。神靈かつて奇瑞を垂れむ。神の道の明は佛の道の昧く。神は怪なく佛經一章毎に怪語を爲す。古の弘法傳教怪術あり。其のころ上理に闇くして之を奇妙とま。また愚ならむや。其の後頼朝北條足利の代に至るまで。戰争人を殺し。其の亡靈祟をなす故に國亂をなし。或は疫病流行し。凶年打續く。爰に於いて僧侶其の虚に乗じて堂塔佛閣を建て並べ。其の遺跡天下に益なく人を惑はむ。是其の始馬子太子と謀りて佛を信じたる故ならむや。窮理に昧き愚人と云ふべし。

神と佛とを論む

○神とい何者を云ふか。佛とい何者を云ふか。それ神は日本に國の祖人の靈を祭れる者なり。靈とい何を云ふか。鬼なり。鬼は何を云ふか。氣なり。氣とい天地の中間に充て



る虚空なり。虚空は物をしとま。然らむ。大地の球にして天中より麗り上下なし。大氣之を揚ぐ。この氣宇宙は充滿して隙なし。一尺の地を穿てば一尺の天を増し。魚水は游びて水を知らむ。人氣中より居て氣を見む。天氣の地氣と感じて神變不思議をなす事。森羅萬象皆此の氣の爲に生む。人間禽獸及草木の天地の大機にして。恒に靜動變化をなす。是妙と云ざらんや。故に神の氣なり。鬼神と云ふ。人および萬象。氣中より出でて、氣中より歸る。氣の根元大陽日輪とま。故に天照神明の名あり。神道の傳書譬論を以てし。實事を云はず。視る者能く考へ察せよ。

○夫佛とい釋迦の名づくる者にして。天の大氣虚空を云ふ。之を無と名づく。是を佛とま。日輪を指ざして阿彌陀と稱ま。像を造りて人の如し。光明遍照十方世界。四方より光明を放つ。是像を作りて譬論とま。亦三世の教をなして。虚空を以て一世とま。虚空の天氣地球は徹通して森羅萬象を生む。是を現世とま。生を爲ま者皆悉く滅し亡びて。天氣は歸る。是往生して極樂に至るを佛なるといふなるべし。窮極則神佛同じ。後世の僧徒已の私の爲に不動藍深アハシム。大日樂師の屬。神と佛とを混じ。各人の貌となして惡人を誑む方便とま。是悉く大陽を以て譬へたる者なり。故に其の像皆火を香ひ輪光をなす。察し知るべし。

知るべし

○風鳥と云ふ者あり。生きたるのなし。皆皮むきなり。必足なし。蘭書花連的印ハシシヤインの圖ありて。此の鳥印度諸島にあり。然れども稀なり。恒に天を飛びて地より下らむ。鳩の大きさにしてかき色。又紋あるもあり。其の種二三品。尾の孔雀の如く。左右の脇より雲珠クモジュ巻きたる羽あり。和蘭これをパラダイスホーゴル。といふパラダイスの天堂を云ひ。ホーゴルの鳥なり。故に極樂鳥と譯ま。亦燕の春暖氣を得て出で、初夏家の軒に巢を爲す。初秋に至りて天中を飛び繞る必地より下らむ。秋の末になりて何方へか去りて見えむ。南向の樹の洞の如き處に集りて寒月の出でむ。

○蝙蝠軒に掛りて人の倒る歩くを怪むとい。惡人の善人を見て。已の如くならざるを云ふ故なり。然れども。飛ぶ時或は喰むる時。亦糞を糞する時の頭を上とま。只安居するに至りては。頭を下として倒る掛かる。人の伏むが如し。

○西行法師の選集抄に曰く。拾遺抄に載せてあるを爰に摸とあり。むかし播磨の國書寫山と云ふ寺に。性空上人と云ふ僧のありける。是は本院の左府時平の孫にて。時朝大納言の侍に。仲太小三郎と云ふ男あり。大納言の許に。昔より傳はりて大切なる硯の有



りける。官位は昇る度毎に。此の硯を拜する事なり。ある時仲太彼の硯を見たく思へども叶はぬ。故に若君十歳不足してありけるを。仲太此の君を頼みて竟に硯を見たり。其の時仲太あやまちて硯をおとし破りたり。若君の曰く。われ破りたりと云ふんと。仲太歡び去りぬ。其の後大納言昇身の事ありて。硯を拜せんとするに破れてあり。若君の云く。われ破りたりと。大納言大に怒り若君を殺せり。仲太此の事を聞きしより。出家して後。播磨の國書寫山に庵をむまび。無常を感じ住みけるが。恒に普賢菩薩を拜みたく願ひ。一心に念じける時。夢の如く一人の天童あらわれて曰く。汝室の津の遊女を見よ。賢の普賢なるぞと云ひをへて消え失せたり。夫よりして室と云ふ處に至り。遊女を求め見るに。常の遊女なり。席上酒肴を出だして興を催し。妓に立ちて舞ふ。性空仲太の目目を閉ぢ觀じければ。忽ち妓女の普賢ばさつと現じ。又目をひらけり。元の遊女なり。性空つらく思ふに。此の妓女と見るに實に生きたる普賢ばさつなりと。有りがたく思ひ。時を移して後去りぬ。六百歩を過ぎてかへり見るに。彼の女の死したりと。普賢かりに遊女に現じ。我之を拜する事の不思議さとして。人にも語りければ。衆俗皆性空上人とぞ貴びける。

西行記  
傳

予江漢曰。笑ふべき事なり。西行此の愚談を集し入れたるを見れば。佛の道を知りたる者。非を。佛道に迷ふ者なり。然れども妻子の愛念を捨て。浮世を見かざり。乞食となりて諸國の行脚したるに。實に世を棄てたる人。やわれど。貴人の佛門に入り世を捨てつとて。山に入り食はざる。乞食となりて無欲なるとして。衣服を脱ぎすて裸となりて。野に伏し山に寐ね。寒暑堪へかね苦しむを。名利を棄てたと心得。是を尊く思ふに更に理に當らむ。予江漢も。西行の深草焼いても小兒の時より見知りてあれど。今此の選集抄を見て。初めて佛の道を知りたる道人はあらざる事を知れり。無好法師の徒然草に格別勝れたる者なり。一席の談にあらむ。

○磁石の妙なる事。いまだ解し得がたき處あり。石を水中に浮べ見るに。南北ありて東西なし。然るに針を以て南と北との氣を磨し。亦水に浮ぶるに。南に北を指し北に南を指す。石と返覆す。此理未解せむ。亦針二を以て北の一方に磨し。石を離るゝやいなや。忽ち二の針合せむ。北に南につき南に北につき。是天の空氣の引く處にして。南北極地球の軫軸天に係りて旋る故なり。まかれば赤道以北に頭とし。赤道以南を頭とす。故に地球の四面に人居立し。地より上を以て天とす。エレキテルを以て此の理を知るべし。



○天地の生物を見る。生むる者の神氣なり。死むる者の臭腐なり。臭腐の人の惡む處。天氣の清淨。大地の水氣又清し。然る。天の火地の水なり。兩氣相徹して其の中腐爛の臭氣萬物となる故。臭腐復化して神氣となる。神氣復化して臭腐となる。爰を以て聖人の其の一を貴ぶ

○書采覽異言後

浙西李之藻刻萬國坤輿圖。萬曆年間。大西利瑪竇重修改定。附以南北半采圖。事具二子所叙。而一時薦紳楊景淳。吳中明之徒。資述焉。正德己丑冬。美得遇西人。乃按其圖訪以方俗。其人曰此圖明人所作。稍似縝密。然與地理不合。莫由依據敢辭。美意謂彼不解漢字。敢為大言耳。美乃曰是則歐羅巴人利瑪竇所携入于中州者。世稱其善。子無取焉。獨何與。曰其未嘗聞我人有其姓名者也。曰西教東漸。自利氏始。子不知其人可乎。彼笑而不答。既而索得西圖於官府以示之。披讀久之。曰是和蘭鑲板。蓋百年之物也。雖我西土亦不易得。其與此圖唯得三見之矣。於是左把右指。章步而攻算。使人不待窮夫。轍迹。而周遊乎八極。名山大川。舉望而出。殊方絕域。隨顧而在。亦奇矣哉。誠得其術也。明年春和蘭入貢。美私其使者以質焉。對曰與地全圖。舊有數本。此板鑲邑所刻。去今既一百一十三年。先是西土佛米。釋古者

始唱天教東南諸州。其塔今在印度地。香華之盛。一百七十年。茲焉。歐羅巴人未聞有利氏之子者也。美竊怪焉。嗣後通得金閩鐘始振。闢邪論於新增大藏函中。因知竇本生於廣東。傍近海島間。北學於中國。實非西方人。則前者之說。果不誣矣。李氏徒。徒嘆其學在夷。而不知用夏變於夷也。故今我是編。所採其說。係之明人者。蓋從其實。癸巳之秋。源君美書

○采覽異言の白石先生著を所の者として。利瑪竇及明人の説を掲ぐ。萬國の事を誌せり。後。蘭人に遇ひて。始めて利瑪竇の歐羅巴人。非る事を知れり。今亦吾が黨の者。蘭學を好み。尤醫術委し。小子の天文地理を好み。我が日本にて始めて地轉の説を聞く。職方外記。天經或問。利氏の言なり。竇の廣東の西琴牛の人と云ふ

○日本いよしへ玄質と云ふ。河内の人なり。今世の僧侶の如く。榮達名利。繫縛せられむ。南都の興福寺。宜教の法嗣として。俗姓弓削氏なり。道鏡などの作業を惡み。潜。洛陽を出で。伯州の深山。隠れ居たりし。其の後。桓武帝御不豫のをり。詔書を下されければ。詔命を遁れて出で。然れども再三。及びて。竟。京師に入り。玉體。近づき加持し奉る。忽。平愈の事あり。帝深く法徳を歸依ありて。位階を下し給ふ。と雖も。更。受けむ。亦辭し去りぬ。弘仁九年夏六月。暮齡八十餘。して。備中湯川寺。遷化を。古の名僧。



弘法。傳教をこじめ多くの衆僧皆名利を離れぬ。此の玄實一人真の出家にて其の名聞えむ。

○承和三年春月。遣唐使選舉已に定まりて藤原の常嗣を正使とし、篁を副使とせられ。兩人を紫宸殿に召され宴を設け。文人墨士に饒別の詩文を作らせ。兩人へ天盃を下さる。常嗣詩を獻じて壽を上る。此席に往歲本朝の命を銜みて入唐せし使者。並に留學の輩彼の地に在りて自没せる者八人。各位階を贈らる。所謂藤原清河。安部仲滿。石川道益。紀馬主。甘南備言景。紀三演。掃守宿禰明。田口歳富等八人なり。同七月遣唐使四艘の船。大使。副使。判官。主典。太宰府を出船しける。日氣あしく九州の地は泊して順風を待つ。漸く天氣を得て蒼海へ漕ぎ出たき。また俄に風變り逆浪天を浸して諸の船を淘り居る。殊に常嗣が乗りたるの橋も折れ舵も摧け已に覆らんとす。漸く四艘とも日本の地は吹き戻さる。船も破損しければまづ一度歸京をべしして。各京に歸る。則ち版圖に達し。明くれば承和四年三月。遣唐使再。催しありて。復太宰府より下り出船ある。其の時慈覺大師も同船あるべしと云ふ。然るに篁は俄に病と稱して京に歸る。其の宿恙は、篁つねに學才に自負の思ありける。常嗣を正使とし篁は副使なり。心緒不快にして憤

を含むと雖も。勅命嚴重なれば是非に及む。其の旨は隨ひ斯て太宰府に至り。船のせつ常嗣が第一の船。去年破損しければ因りて篁が乗りたる二の船と取り替へ。常嗣へ篁が船を進め。篁は破れたる船とさだめける故に。之を怒りて竟に病と云ひて京に歸る。常嗣は已に出船を。篁の家は返りて門を閉ぢ西道譚と云ふ文章を作りて暗に常嗣を誹謗す。其の文章の中上を輕んじ憾む意あり。嵯峨上皇逆鱗ありて。其の罪輕からむとして。死罪を宥され。承和五年十二月隱岐の國へ流さる。筆翰の逸人なる故に時の人を惜む。篁船中にて。「和田の原八十島かけて漕出でぬと人よ告げよ海士の釣舟」また「思ひきや鄙の別は衰へて海士のなきたき漁せん」とい。承和七年赦免六月歸京。黄衣を着朝廷に拜謝す。翌年本爵正五位の下に復し。文徳天皇仁壽二年冬十二月薨む。下野國足利郷學校。先聖の像を安置して。其の頃教授せる者相續ぐ。今下野の阿波の谷村に一寺あり。學校の跡と云ふ。

○天下に才ある者といへど。農夫商工の家は生るゝ時。卑賤なりとして之を用ひぬ。諸侯貴家は生るゝ者。才なしと雖も之を用ふ。才あれども用ひざる時。愚人の如く。不才の者時を得て用ひらるゝ時。才子の如し。百里溪の虞ありて。愚人の如く。秦に



至りての智人なり

○末大なれば必折れ。尾大なれば掉しがたしと云ふ譬あり。初の何事も小にして。後に至りては漸々と著し長じ。大となりては夫は應じ尊み貴む。卑く小なりがたし。末に至りては終は壞る

○木を刻みて糸を牽けば老翁となる。鶏の皮鶴の毛を以てまれば。真物の如し。須臾弄びて罷みて寂として無事。還つて人生一夢の中は似たり

○善人と悪人との生れ異なる事なり。松を接ぎて杉とならむ。聖人の教を學び習ひても。本性を失ふを。柳下惠銘を見て以て老を養ふよよろしとし。盜跖は以て錢を粘るよしとを

○予は天理を曉明せし雖も。世俗之を知らず。畫の幼稚の時より好むと雖も。前善畫あり。これ及ばず。故に屏風のごとく屈曲して。從俗の諸侯貴客を視る

○備中岡田平治兵衛が東遊雜記を見る。南部の邊地を通行せし。海邊は米櫃。金匱。帆柱。枕の類。波は打ちよせ諸邊ある事限なし。所の者云て曰く。何ぞ拾はざる。取れて薪とせざる。今稀に金錢もあるべしと。所の者答へて曰く。此の物の皆破船したる者の失ふ所。之を取りてわが物とまれば必亡靈祟をなす。かつて拾ふ者なし。北方の邊地愚直なる事を知るべし

○予が家上總の者あり。彼が話しける。東浦にてかつを漁舟七八艘沖に出で、漁する時。櫃の如き物流れ漂ふ。引き揚げて見れば。内は數十金あり。皆々配分して家へ還る。隣家もこれを知らむと雖も。其の者共漁におこたり酒を呑み聚まり遊ぶ。爰において竟に知れたり

○又或時。磯邊へ流れよる物あり。之を見る。餅の如き物數々あり。怪しみて能く視れば蠟なり。暴風の後破船の具漂ひよるとぞ。海國ながら吾國の人の駕駛術は悉しからざるを。西洋人評しく曰く。支那は以て盲乘。日本は以て片目乘

○佛者欲以方便導還使迷已矣。莊子不究真理。惟推量而安一身耳

○予所持る寒暖昇降を以て暑寒を計る。毎年冬の寒十二三分。極寒は八九分なり。文化六年己巳の冬寒氣。十一月九日五分。二十五日同五分。廿六日二分半。廿日一分。十二月朔日一分半。二日十分。六日五分。七日二分半。九日十分。十一日三分半。十七日九分半。十九日寒無度。廿五日同廿六日二分半餘。廿八日九分。午の正月十日二分半。大雪數度。何

文化三年  
冬寒氣



十年よもなき寒氣なり。凡四十日餘續く

○大和の國南都の邊へ行き見る。婢女つねに麻を績ぐ。其の價を得て半を主人に出だ  
す。半の已の物とす。主人の用を缺き。夜の油を費す故なり。前漢の張安世。家僮七百人。  
紡績皆手技あり。内治産業を織微累積して巨萬の富とす

○享和三年丙寅秋八月。關侯隱居の語しける。在所新見。夏雨降らざる事六十日。草間村  
と云ふ處に。山田のみよて常は水なし。此の所の農夫の妻は。水を河より汲む事を力と  
す。河の傍まで一里を隔つ。其の路皆山坂なり。水桶を頭上へ載き。兩手よて麻を績む  
事を常とす。其の一村のならひなり。其の村に一寺あり。僧七日斷食して雨を禱る。果し  
て七日よして大雨田畑を潤き。領主より其の僧に金錢米穀を賜ふ。更は受けぬ。其の  
兩近村は及ぶ故に。他村より米錢を持ち来て寺に贈りければ。不得已して受けたり。是  
天の感應したるよに非れども。彼の僧正直無心よして只百姓の困窮を悲み。無慾真實  
なるよ因りて。雨の降りたるなり。是を徳と云ふ

○七日を以て一周とせる事。七日は非を六日なり。其の故は其の日より七日目の六日を  
ればなり。閏月の四年はあり。實は三年は當る。天度三百六十度六分六秒とす。亦圓の半

和

即。六數なり。其の起。三數より出づ。五七三十五七七四十九とせるは誤なり。

○世の人を思ふ。人事の小道を知り好む者ありと雖も。天の大道を知る者鮮し。され久  
しく東都に居る。諸侯貴客畫を好む者多し。天を聞く者更はなし。管中納言紀州侯一  
人のみ。日本小國と雖も罕は我を知るものあり。我往きて説く事能はぬ。故采りて聞  
く事聞はぬ。國を隔て、速きが故なり

○古之善爲道者。非以明民。將以愚之。予考ふる。下民故より淳樸。田夫の如き皆愚なり。  
生れながらの本姓

○報怨以德といふ老子の謂なり。讎は却りて與物を云ふ

○或人予は虚と實とを問ふ。答へて曰く。人の生死を云ふ。死は實なり。生の虚なり。生た  
る貌は水上の泡。内氣を包み外水よて掩ふ。容水氣の爲は處虚空より出で、生をなす。  
虚空は實なり。質となる。時の虚なり。實以不滅亡。名の可爲名は非也。所謂無名なり。天  
地の間は生る者皆虚なり。無情之を實とす。日輪天は麗りて無心。大地旋りて無心。氣  
昇降して無心。又曰く。岩石鐵金以て實とす。草木以て虚とす。花發け實を結び。土を去  
り水を離る。時の死也。是生物よして非情に似たり。故は實なる者萬古にひむ。虚なる



者際あり。人の存在之を虚とす

○大學衍義曰く。古より中國にて衣服と爲す所の者。絲麻葛褐の四の者のみ。漢唐の世。遠夷木綿を以て貢入ると雖も。中國のいまだ其の種なし。故に民未爲衣服。宋元の間始めて傳へて入中國。蓋此の物米たる事。外夷より閩廣の海。商舶を通じ。關陝の土壤西域に相接せる故なり。我朝上世永祿天正の下民の服皆麻葛の類なり。今に至りては貴賤共に用ふ。その故也。古賤者の蒲團。蒲入綿なり。今が國の綿は草綿なり。木綿は非也

○昔者我は云ふ。畫の奇なる者なり。譬へば汁の如きを描く。其の底に至りて深く入る事。如何して之を圖せるか。西洋の畫法の遠近深淺を爲すが日本の畫法と異なり

○管根權現の社の前は大釜あり。文永五年辰の十一月十二日と鐫付けられたり。今年文化九年まで五百五十六年

○日光山霧降の瀧より五六里深く山に入り白根山あり。人家なく祠のみ。六月氷凍して寒月の如し。白鳥鴈の屬多し

○樂羊の魏の大將として中山と云ふ所を攻めたるは。樂羊の子中山にあつて。中山君其

の子を烹して遣りければ樂羊は幕の下にて之を啜り。一杯喰ひ盡くも。魏の文公が猪師賛と云ふ者人よ言て曰く。樂羊の子の肉を喰へりと。答へて云く。誰も喰はむ。樂羊は中山を罷けし故に文公其の功を賞美す。然れども心底を疑はれたり

○鎌倉よどこも地藏と云ふあり。或時堂守の僧參詣もなき堂を守るより。何方へなりとも立ちのくべしと思ひ。其の夜夢に地藏の曰く。どこもくくと云ふ。老僧目を覺し考へ思ふ。何方もくとも同じ事と云ふ事なるべしとて。生涯此の堂は終りぬ

○東都麻布邊に關榮一郎と云ふ儒者あり。歳七十餘にして病臥せり。更死と云ふ事を知らむ。書を讀む者天理天命を知らむ。愚なる者なり

○或人の曰く。駿河の産にして年々遠州秋葉山に參詣す。九月十七日祭禮神事。火の舞として火を神前に投げ振りて舞ふ。然るは火の何れへも燃え付かざるを奇とす。是火防の神なり。予考ふるは。火の天地の中間に充ちて造化の元なり。火の何物へも通徹す。目前の理なり。然れども水氣を得る時の火移らむ。山上陰濕の氣多くして。萬物濕氣閉塞し樹木茂り。地氣つねに上昇して雲霧を生じ。火氣衰へて物移らむ。故に夏月火災少く冬月多し。神靈火を防ぐはあらむ

文公の  
透視法



○招隱館漫筆曰く。人君の天職なり。今の君は人君ありての人民と思ひ。驕慢の心發起して。士民を視る事草芥の如し。故に君一人者を恣にし。無用の財産を私欲の好む所に費し。耳目の歡樂を極む。國民の膏油を絞り血涙の殘餘を歡樂に供する。豈不仁の甚しき非ぞや。上は居る者の君子にあらざれば治まらむ。君子は己も同じでも與せむ。己も異しても非とせむ。明君賢子の忍人を察し。闇君は必巧言令色諂諛の人を愛して。賢者を用ふる事を知らむ。憂りたる鏡の如し

○駿州藤枝の驛は橋あり。川上三里は神の祠在り。其の邊の谷川の鰻魚の一方のみ眼あり。此の神の使令として人懼れて喰む。予長崎へ遊歴する時藤枝より僕一人を連れたり。其の者此の鰻を喰ふは祟なし。又相州鎌倉の海にて漁する鱒の口曲りて片口と呼ぶ。其の種にて生る者諸國此の類多し

○駿州岡部の在所。坂本村輪宗院と云ふ禪寺あり。天明五六年の頃。住僧歳八十。山に入り一片の乾餅を喰ふ事三年。また寺に來りて入定を。時弟子食を進む。僧の曰く。問答吾は勝たば喰ふべし。交當る。更に勝者なし

○備中足守の醫杏庵の曰く。在所は狐の寓きたる者數度療治も。或時民家の婦は狐寓く。更に去らむ。故に全體を拵みければ腕先は摩り付きたり。夫故腕を縛りければ瘻の如し。鍼を打たんとむ。狂人の云く。今將に去らんとむと。故に其の縛を解く。忽舊の如し。敷さたり。また再摩撫し肩に至る。是非鍼を以て衝破さんとしければ。狐大に屈伏し。真に去るべし。其の證は藪の中は體あり。往きて見るべしと。果して云ふが如し。即縛を解く。狐一聲して去りぬ。然るは狐の氣のみ人の體に入る事。人此の術に及ぶべからむ。人々は寓く事能はざるなり。譬へば鳥の空中を飛ぶが如し。小蟲と雖も羽翼ある者人々に及ぶざる事を知るべし。バカナトカヤ

○東都本所回向院の入口。左右淡雪豆腐の茶店。晝食せんとして爰に寄る。傍に卑賤の者二人酒を飲む。酒菜なし。予思ふ。元來酒菜と云ふは後世の事なり。今の酒菜數品。奢慢なる事を知るべし

○聖人釋迦の教を一口に云へば。夫人間の今日活きて居る中。仁義禮智信の教を諒けて生涯の間能く守れとの教なり。釋迦は人間一生の少の夢の如し。故に僅なる夢中を安心せよと云ふ教なり

○永樂通寶の錢。はじめ日本へ渡りし事。後小松の院應永十年八月二日未の刻より。大







者學び盡くを事能いむ。況や日本の人をや

○世の人古書を引きて證とを。是證は非の證多し。假令は五雜俎を引きて證とを。謝肇淪もし誤り妄し誌さば後世の人其の偽を真とを。諧記は曰く。漢の建武年中。長沙の歐回。白日は屈原が亡靈は値ふ。數百年以前の屈原が顔何を以て見知りたるか。左傳は賢者正史として浮屠の説は夢も見ざる時の書なり。死靈奇怪の事を記せり。矧や夫より下史記漢書をや。晉の阮瞻は無鬼論を作る。忽客來りて鬼の有無を論む。客遂は屈を。即云く。我は鬼なりと云ひ終へて容を變じて鬼となる。鬼とい何なる形を云ふか。一笑の談なり

○阿波侯の世子伊豆の熱海は湯治を。かへらん事を忘れて數日を経たり。其の頃吾も同じく此の湯は浴を。二十餘日を経て歸る。時阿波侯の行蹟。常は朝は夜の丑の時を以て起き讀書弓馬兵術を。世子をして學ばしむ。故は之が爲は僅の日を熱海は遊る

○嚮の年十月鎌倉は遊び。光明寺は至る。時は十四日あり。堂中老若男女交坐は充ちて念佛の黨なり。堂の外縁床を見れば蓆を着たる者數十人伏を。寒風の夜なり。何故と問ふは。卑賤の農夫堂中は入る事能くむ。さ経音を聞きて成佛と心得たり

○江戸の町の御入國此方の事にて。其の頃よりの名主を草分と云ふ。町數八百八町ありしは千八百八町となりぬ。正月三日帝鑑の間の大廊架はかいて御通がけの御目見え。獻上物大臺は鬪斗。一斗入酒樽十。大納言様も同じ。通油町。田所町。大傳馬町。總町代として三人。通油町の名主宮部又四郎。田所町の名主田所平藏。大傳馬町の名主馬込勘解由

○深草の元政は法華宗なり。日蓮は諸宗を誹謗したる故は。我慢我意と云つて諸宗の曾これを惡み誹る。元政は佛の理を悟り。出家の道を知り。戒を保ち。法華律宗の祖なり。年四十六にして死を。齋短しと雖も其間え高し

○永祿年間の江戸の圖を見るは。南は金洲崎白銀臺。西は麻布飯倉。今井村。今の江戸見坂邊を云ふ。櫻田村。今の霞が關なり。北は神田川湯島。忍が岡。今の上野なり。不忍池より下谷の方へ流る川あり。また荒川の今の千住川。淺草觀音の島の如し。又芝通。日本橋邊の町々。小川町。下谷。本所。深川。皆淺海にして池の如し。淺草海苔の名明らかなり。海の漸々旱となる事は。爰を以て知るべし。今より十億萬年を経る時。此日本亞墨利加の地と接し續くなるべし。痛快







抛つとき即ち安し。然りと雖も亦之は應むる苦樂共は追うて來る。然れば悟道人となつて山林に入り。又市隱となつて安逸なるか否か。生ある者の寒暑の苦あり。一日の起伏或は二便の苦あり。矧や世は迷ふ者。苦以て樂とし。樂以て苦とす。紅塵の街は風の土を吹上ぐるが如し。茲は佛書因過經曰。天上天下。唯我獨尊。三界皆苦。我等安之。釋迦の王位を捨て、乞食の行を爲す。悟道人の祖なり。孔子。仁義禮智信の規を立て、教を爲す。然りと雖も戦争を起し。國治れり名利の二は争闘し。もし教を感ずる者の智人なり。感ぜざる者の不智なり。智と愚とを半はす。夫人の無始より起り無終は終る。皆此の如し。亦曰。老子無爲を以て教ふ。曰く言者不知。知者不言。是不言の教なり。莊子大小を以てま。大は貴く小は卑し。亦云く。大は大智小は小智。象牛は大。蚊虻は小。大小別ありと雖も更は大小なし。亦復曰。天上天下。唯我獨尊。三界皆苦。我等安之焉。現在我あり。無始のはじめ我なし。無終のをとり我なし。爰はかいて我獨尊み。現在わが子あり。我は非も。兄弟あり。我はあらむ。然るは我はあらざれば我は教ふる者なし。我我は教へて知る時の。我を安んむ。我獨と云ふは釋迦已を云ふはあらむ。教へ導く辭なり。三教の意皆以て同じ。愚人皆迷ふ。故は苦とす。然るは苦を以て安逸とす。惑ふを以て樂とす。

人間常の情とまる處なり。人各好む處を別はす。己の好む處を以て是とし。己の好まざる處を以て非とす。智人能く辨むと雖も、苦と樂と其の中はあり。愚者辨せずと雖も、苦樂亦其の中はあり。夏月暑惡み冬月寒を惡み。春秋必天雨を。亦曰く。生類食を以て生を保つ。夫食を求むるの苦を以てま。農人の耕し。祿ある者の務め力む。譬を以て云ふ。食者の薪なり。神經は日輪の火なり。水を湯とまる如き。體中の火。食の爲は消えむ。不食時の火忽消ゆ。まをいち死なり。骨肉水土となり。神經天は歸す。燈火を吹き消まが如し。消ゆるは非も。天火は歸るなり。良才睿智なる者の神火厚し。能く感じ能く應む。必氣剛し。愚なる者の神火薄し。事々物々は應ぜむ。火氣鈍し。必柔弱なる者なり。然るは世界中の中日氣の地を射る事。度は順して所を異はす。五穀及草木の實。日氣の爲は甘き者。苦く鹹き者。早くもと鹹の一味より生む。天氣のしからしむる處なり。人も亦之と同じ。吾日本東西の國。其の氣質異はす。一國毎は各別なり。矧や世界の中はかいては。歐羅巴の中はゼルマニヤを以て開闢の久しき國とす。吾日本開闢甚近し。故は人智も淺し。思慮尤深からむ。神武此方の國はして年數久しからむ。人工歐羅巴は及ばむ。漸く地轉の觀今よして知る者僅く二三輩。是淺慮の淺才よして歐羅巴人よ及ばざる所以なり。吾國儒



者あり。聖經の支那の書。支那の文字を讀む者を云ふ。僧あり。釋迦の遺言八萬。法藏の一切法經一通ざる者を云ふ。天然の梵語なり。支那人之を翻譯して漢字とす。皆譬諭方便にして。一言之を解まべからむ。凡僧かつて佛と云ふ事を知る者なし。當感僧のみ多し。古の名僧人を惑てし誣ふる屬。其の遺風今あり。吾國の神道の只正道にして。人道の始祖を以て神靈として之を祭る。孔子の道の人間の交ふ事なく。天を恐れ鬼神を祭る事をす。是悉く人間のふるまひなり。予昨日まで酔うて今日醒めたり。鏡裏霜を見る。嗚呼人間の終なり。一生の一瞬の夢。覺むる時の亦夢

○西洋の畫はアドホカートと云ふ者。是は窮理學者の號なり。 het stof silk ard. en is den zwin niet werd 人一生涯衣食住の爲は求め得る處の諸器諸家具。已は得んとて利を争ひて求め得る處の物の皆塵なり。土や泥などよてありき

○文化八年未七月立秋の頃より。彗星初昏西北の方北斗の上。大尊と大陽守との間は麗りて尾の光芒長からむ。亦曉東西に現れて尾の光芒長し。白露。秋分。寒露。霜降。立冬と漸々南東に昇りて尾も長く。天頂を過ぎて。小雪。大雪頃に至りて河鼓の少し上留まりて。尾も漸々短く。冬至の頃天に昇りて竟に内眼に見えむ。又己の年は彗星現れ

し時の。天頂より少し西より。光芒も至りて薄し。初昏より戌の時頃まで見えて西に落ちて。二十餘日を経て天に昇る。彗星。守星天上にある事。其の數を知らむ。亦行環も悉く異なりて。黃道より斜絡して其の環亦楕圓なり。西洋人といへどもいまだ推歩窮理せざる者乎。又曰く。土星の上。二星の惑星を見出だすと。蘭書中に著す。尤望遠鏡に非れに見えむ。吾日本人始めて蘭學を務むる者あつて。此の説を知ると雖も。いまだ其の星を視ず。然れば内眼に因りて視る者を以て五星と名づけ。土星の上。數十の惑星ある事を知るべからむ

○伊曾保物語と云ふ書の西洋の譯書なり。其の原本紀州侯あり。予直に見たり。皆譬を以て教を説く。爰に一二章を掲ぐ  
猛獸狼喉に骨をたて喰する事能はむ。既に饑に及ばんとす。時一鶴來れり。狼鶴に向つて曰く。汝は吾たのむ事あり。長き嘴を以て咽の骨を抜くべしや否や。鶴恐れて曰く。命に從ふべし。竟に骨をぬく。狼の曰く。予此の骨の爲に數日饑ゑたり。故にまつ汝を喰はんと。思を離れて報むと云ふ事なり

積多く群り。躍り舞ふ事人の如し。然りと雖も人之を視るとき人の如くならむ。故に



其の惡しきを教へ學ばしめんとする。選りて猿大立腹し。群猿共其の人より仇す。人の非を言ふべからず。非を容るゝ者の君子なり。

或男の。酒菜よせんとして小鳥をさしける。其の鳥の曰く。我の如き小雀を酒菜よし給ふとも美味をふ處あらん。助けたまへ。其の酬は善き事三をしへまゐらせん。過ぎたるを悔むべからず。及ばざる事をまべからず。己の度量を知るべしと云ふ。いかにも汝が云ふ處の教尤なりとして放ちぬ。其の鳥喬木の上より飛びのぼりて曰く。そなたの愚なる者かな。吾腹内に寶の玉あり。此の玉を持つ時は富貴心のまゝなり。あやふい哉あやふい哉と笑ひけり。汝小雀吾をあざむく。惡さやつめとして竿よモチを付け。あなたをたしと追ひける。彼の雀の曰く。即いまの教をまをれたりやと書籍などまらくと讀み其の章句を教を直まらくと忘るゝが如し。

此の書は二百年以前の書にて。皆かな書なり。汝と云ふ事を御邊とあり。其の後か手前と呼ぶ。また貴様と云ふ。今の武家は至るまでお前と呼ぶ。御前と稱するが如し。譬の證は云く。お前敬薄。同輩に向つてお前と云ふ事。諸者なる事を云ふ。亦云く。此の書は西洋書にて。シンチペールと云つて譬論なり。いま和蘭の書を學ぶ者解しがたき辭よし

て。二百年以前西洋の學ををる者ある事を知るべし。此の書は...

○吾日本開闢近し。故に人慮の薄き事此の一事を以て知るべし。醫家欽鑑及。西洋の書中一載せる處。種痘の法あり。此の法を用ふる時の死せる事なく。面部に痕なく。難症なし。流行し傳染する時の。毒多き者の死も。然りと雖も生得重毒ある者あり。必二たびも。種痘を以て其の毒を減せ。減せざれば流行し感じて必死症なり。又虚薄の生あり。痘をうゝべからず。余が親族小兒あり。此の法を傳ふるより更によりけがらぬ。如何と云ふ。病を求むるに近し。一時其の難をのがれん事を愚と云ふべし。竟に種痘。即輕し。

○江戸車町の芝高輪の手前。牛屋あり。是れいよしへ御入國の時。東照神君。大津牛を呼びよせらる。百三十六疋と云ふ。御城の石垣の石を牽かせたり。二代將軍秀忠君の時。至りて。牛方共大津へ歸らん事を願ふ故。五十六疋を留めて。残をおん返しある。飯田町邊に牛原と云ふ所あり。車置場の江戸橋の四日市あり。牛車追々渡世薄くなり。牛三十六疋なる。其の後牛原の牛。今の車町に米たる。海ぎこの地車置場なる。漸々減じて今五軒となりぬ。大八車のみ用をなす故なり。千場太郎兵衛と云ふ巨家あり。牛屋に千場氏あり。太郎兵衛も此の家の牛牽なり。故に主人の苗字を己の姓とす。牛屋の名を



駐ちて近來牛屋の千場衰微す。太郎兵衛其の家を買ひ取り。千場の名を止め別號とす。熊本侯の金用達にして。帯刀の免許あり。

○予が近隣は八十餘の老人あり。大道寺某の作の落穂集を所持す。世にある落穂集は非む。實録なり。御入國以來の事を誌す。明暦以前の江戸の町も少く。また諸大名の家居に至りて大造にして。表門は家根の上はシヤチホコあり。長屋も高く造りたる事や。明暦の火災は皆焼失して。漸々今の如くになりぬ。其の頃の風俗。女の帯は絹巾半巾。たびの紫の皮なり。大名の火事羽織はくも皮なり。従者の木綿のハツビ。夫よりまむく。災火ありて。大名は羅紗となり。従者の皮羽織となる。故に價貴くしてたび皆水綿となるなり。又曰く。壹岐守松浦侯予に向つて曰く。朽木隱岐守は蘭書あり。ウエイレルドベシケレイヒングと云ふ。此の書を求めん事を欲す。余爾を以てす。余江漢語して應命。則朽木侯は謁して此の事を話す。竟に其の書を松浦侯に贈る。其中はイギリス船平戸島に入津したる事を誌す。其の頃松浦法眼と云ふ人隱居して政事を取る。或時婦人を従へ。イギリスの船に乗る。船の内數品の額あり。其中は春畫ありけるを。婦人は是を熟視せむして拜す。イギリス人もへらく。嚮の頃吾國の佛法。此の日本に來る事あり。其をらん事を思ひて春畫を拜するかと。また法眼婦人をして三弦を引かしむ。イギリス人已の國は無き器なりと云ひて悉く其の形狀を誌せり。其中は神祖家康大君の御墨付の寫あり。皆彼の國の文字を譯す。イギリス人江戸へ來たる時。大名の家居長屋造を見て。窓牖は玻璃を用ひざるを怪しむ。其の頃の家居彼の國の家居はかたらざるを知るべし。彼の國寒國にして。石を以て壁となし。牖はビイドロを以つて紙の如くし。右の蘭書を譯する者。大抵斯の如し。其の頃天下漸く治まり。戰國の風いまだ解けむ。武家は財貨夥し。今に至りては太平の續き。人氣遊樂を好み。渾べて懦弱となりぬ。

○江戸赤坂御門松平出羽侯の藩士は。號を天寓乳平子と云ふ者あり。俗稱を知る者少し。常に弊れたる衣服を着。草履は路々拾ひたるを二三重ねて之をこき。刀を太刀の如く提げ。脇ざしを脱ぐとき。人間の如し。其の容乞食の刀を帯びたるのみ。家千金を積み貯へ。頗漢字を知る故に。風流雅人を吊ひ。只己の名の他に知られん事を好みて。神社。佛閣。堂塔の小社に至るまで。己の名を誌す。紙を以て黒く石摺の如くして。「天愚乳平子」予彼に對して曰く。名利は益れ。雅俗の者を記す者か。乳平子嗚嗚して去りぬ。



○人死する時の病は因れる者、其の病苦、罪ありて刑罰は行はる者と同じ。上天子下庶民に至るまで、生ある者此の如し。又老耄して死する者、夢は苦を知る如し。

○紀州侯初めて予を召き、近臣の者予に對して曰く、中納言殿は諷し言ふはあらむ。我等は物談するを、席を隔てて之を聞しめざるべからず。予謹みて諾して出づ。嚮は作處の地球の圖、地球の圖を持ちて頓首して拜す。侯の曰く、江漢は始めて逢ふ。然りと雖も名は無ねて、知れりと。予地球地球を以て近臣に對話す。時は侯の曰く、其の兩圖は先達て所持す。あが前は寄せ近づけよ。熟視して其の昧を聞かん。爰は於て前は薦む。徐に云つて曰く、吾國地轉の説を知る者なし。故は地轉儀を製して、五星の順逆、また天の冷際震雷は云ふは及ばむ。霧珠は水火の二氣五彩をなし、鹹と硫氣とよて五味となる。濃水淡水。風は水にして水の風なる事を釋さけり。而後畫を作るは和歌の浦の寫真。及其餘の山水數品。此の技をなして退く。時は侯近臣に向つて曰く、今日の好學問したりと仰られける。後、聞けば侯は天學を好むこと年あり。司天臺の吉田氏及山路才助等を召して天理を問はしむるは答ふる者なし。如何となれば、各小祿の者にして恐怖し、心中意を刻み思を苦め竭きと雖も口より出でず。且彼等の曆算家にして、天地の窮理を知

二十五歳

らむ。問は應むる事能くも、首を縮め舌を齧みて退く。故は侯愧むを。然るは小子侯を肯て懼れむ。吾業つねは、大侯の前に出づ。侯を視る事、同僚は遭ふが如く。思これに録りて天を談むる事。王必が如し。侯甚感ぜられ、吾をして臣たらしめんとす。時は年天命を知る。且いまだ人の臣たらしむる。竊に應ふは、己を養ふは己の力を以て人の爲は勞せんやと云ひて、竟に命に従えむ。今日七十有五。心を放肆よし。諸侯召せども往かむ。己の業を務めむ。冬月日當は臥し、夏月の樹下は座し。性好んで山水を愛む。數、東西は旅行も、名山風景を瞻てり。家は歸りて畫は摸し。また我が天文地轉の説を好む者と窮理を談じ。樂これに過ぎむ。

○文化平本の年岩附は遊ぶ。小林源吾と云ふ者、吾門人となる。半年を経せして天象を知る事。小星に至るまで覺えたり。實は奇人と稱さべし。興喜三郎と云ふ者、我が門は遊ぶ。新製地轉儀を作る。其の形平圓にして徑三尺廻は、恒天の二十八宿あり。中は吾地五星ありて、日輪を中心とし地轉して、所を移せば五星おのゝ順行と逆行とを視る。は五星曆の算術をなす。亦西洋算法をからむして萬年曆あり。然るは吾國の曆と差ひ、閏日を以て閏月を置かむ。此法は倣ひて、日本萬年曆を製す。

此は成り流しし  
最速安んじ  
しりてお同じ  
ん



○近年米穀安く武家益なし。今一方りて魯西亞と交易を爲さざるを思ふやなんぞ愚ならむや。寛政五癸丑年七月。魯西亞船蝦夷地子モロと云ふ所。幸太夫を乗せ来りし時。日本米と彼國の産物と交易を結びたく。幸太夫を以て願書を出だせ。其の頃越中守白川侯權鍾を取る。則。信牌を下さる。曰く

一。おろしや國の船一艘長崎に至る爲の印の事。一。汝等抑切支丹の教に我國の大禁なり。其の像及器物書冊等に至るまで持参する事なかれ。必害せらるゝ事あらん。此の旨能く悟導して彼の地に至らば。尚研究して上陸をも免まべきなり。夫が爲に此の一張をあたふる事なかり

石川將監花押

村上大學花押

此の度政府の指揮を奉じて

給ふ

アタンラクマン

ワシレイローチン

寛政五丑年六月二十七日

右の松前表に於いて

○泊川侯博學敏才ありあれど。地理の事はかいていまだ究めざる事あるに近し。長崎の地へは千里の遠路にして。亦蝦夷地に於いて交易の場を開く時。彼の地自ら開くべし。また切支丹を甚懼れ怒るゝ何事ぞや。信長彼の宗法を信じ。彼の國の僧を多く渡海をゆるしければ。僧徒日本美國なる事を知り。竊に闕ふよや。衆俗を従へなづけし故。其の後神祖大君此の宗法を惡み給ひし事。其の殘黨相群り徒黨をなせ。且に大亂の基なる事をしるめし大禁の命令あり。今此の宗法を以て魯西亞人誼むと雖も。誰か一人之は與せん

○其の後十餘年を経て文化二丑三月。肥前長崎の津に魯西亞の船を入る。使節の者。國老レサノツト。女帝アレキサンデルの印。其の書翰に曰く。吾國の貴國と隔たる遠しと雖も。屬國貴地は近し。故に隣國のよしみをなし。年々聘使を以て交易をなさんとす。大日本國大王の膝下は拜禮をなせとあり。然るに。魯西亞の使者を。半年長崎に留め上陸をも免さず。其の上彼等が意に反り。且其の返答甚失敬不遜。魯西亞の北方の邊地不毛の土にして。下國なりと雖も。大國にして屬國も亦多し。一概に夷狄のふるまひ非禮なら



をや。レサノツトの彼の國の王の使者なり。王の吾國の王と異ならんや。夫禮の人道教示の摩とす。之を譬へば位官正しき。裸となりて立つか如し。必や吾國の人を。彼等禽獸の如く思ふなるべし。嗚呼慨哉。

○天明年間。オランダ國風説書。年々寫し置きし。其の頃の書上。リユス國にて。日本漂流人を捕へ置き。日本辭を學ぶよし。本國より申し来る。リユス國との魯西亞の事を。文化辛未の年の夏六月。蘭船入津せむ。館内のカヒタン。其餘皆衣服敗れ食盡き困窮。蘭船の来らざる。萬國の風説知らむ。

○夫人間の小慮を以て睡れば。一生の永い夢。天の大理を以て視る時の實。短い夢。夢を夢と思ひぬうちこそ。人間の境界なれ。我の夢も覺めかへりて何事も迷さればおもしろからず。さつたり覺めての夢もむまばす。此の世の夢の迷の中なれば。吾も夢中の。向ふ人も夢の人。只迷ひ惑ふ事のみをして。是を樂しむ或は苦しみ亦歡び患ひて。此の世に居る中の懼しき夢を見ぬ様にして安居をべし。大なる樂歡をえる時の必また大なる困み心配あるなれば。其の度を能く考ふべき事なり。名利として此の二に迷ふ事なれば。爰を知り給へ。巨萬の富貴も。名の高く聞えたる人も。一世の中の事なり。釋

迦も孔子も名のみ残りて其の人なし。わが子われ一人の者。非也。夫婦の間より生む。子また孫を生む。孫また彦を生む。漸々血脈の速く淡く淡くなりて。末に至りての悉く他人となる。然れば他人皆われなり。

○精進と云ふ事。生其きを忌みさくる事。非也。殺生成として生きたる者を殺す事なり。獸魚の類。目鼻口皆人に似たり。魚鱗なしと雖も。獸聲あり。これ人に近し。哺の物の喰ふべし。草木元より生類と同物。然れども人に似せ。出家女犯を戒しむ。子を生まざるを戒しむる。及ばむ。色慾に迷ふが故なり。子の己の體をり。人間の迷の基。變候の去りがたし。故に子無き者悟道に入り安し。女子經水の後。めぐり終りて十日過くれの孕ます。

○予老いぬれば浮世の人の歡樂とする處。更におもしろからむ。思ひ出だす事あれば筆にまかせて書さぬ。後世我と同志の人あらば感し給へ。毎々云ふ如く。文學を好めば漢文を書きたく。予倅一文を學ばむ。故に國字を以てす。是兩道に通じ安く。漢文意を述べがたく。視る者肯て解しがたし。吾國往古の推古帝聖德太子の時代假名字の國にて古事記其の後漢學を尊みけるが。國亂れ武家の天下となりて漢字を失ひ。今に至りては太平にして諸民に至るまで文學を好めども。いよしへ管相丞。小野篁の時代の如くならむ。天下武威を



以て治まる。また吾國支那に従ひて。獨立堅固の國なる故歟

○今の出家の大僧正をこじめ。皆釋迦の傳へし出家にていなし。世の道具として古の出家とも違ふ事にて。士農工商僧と。世の中の渡世なれば。且て出家の出家たらざる事を咎むべからず。只釋迦の法は倣ひて。女色を斷ち魚を喰はず。又頭を丸く。衣類の上よりもとして佛衣を着るのみ。今日の理は聞き人の。出家の出家の様はなしとて。責めとがむる者多し。不然なり。誠の釋迦の教の出家はならんと思ひ。たゞ心の持ちやりの事は。佛に入るはも及びず。剃髮するはも及びず。佛と云ふ者の何者を指して云ひしと考へ。經文の意味を能く解し。毛の穴より三千の菩薩が現れ。大地が裂けて百萬の寶塔出現せる事。竹田のからくりの如し。これを能く解し。真經の摩訶般若到彼岸の梵語は般若とい智慧を云ふ。愚ていいかん事なり。凡夫て佛意を得られぬ事なり。極理分明なる人はあらざれば出家はならぬなり。日本はるか。此の世界の中は釋迦と同意の人の今活きて居る中よかどふる程の外はなし。今日本の中は天窓の丸い出家幾萬人もあるべし。其の人人大智の人の有るべきや。故に皆經文の譬論なり。夫も釋迦時代の天竺の譬にて皆俗語なれば。今時の人日本にて彼の經文を見て解すべ

きやうなし。日本にて往古の解でさへ今よてい知れざるは。何として解をべきや。天竺の元より其の外世界中。漢字はなし。皆言葉を取名をかきたる者なり。今和蘭の學問をする如く。容易に解しがたし。シンチペールとて。彼の國の譬を以て教としたる書あり。是の一向に解しがたき者なり。此の經文も譬にて。天竺ことばを漢譯したる者。間違のみ多かるべし。到彼岸のまじしと到ると云ふ事にて。爰より向いたると云ふ事なり。是も實の解しかたよにあらざれども。まづ成佛と解するなり。到彼岸と云ふも梵語なれば字義はなし。千人講をまれば千人ながら違ひぬ。是文句は迷ふと云ふ者なり。只釋迦の極意は。世界の衆生の天の人氣より生じ。草木國土悉皆成佛とて。總て皆佛なれども。生類の中。人間の智と云ふ者の爲は佛となりかぬ事なり。故に人間とい何者を云ふ。また人間の如何なる者と知り。此の根元を知りぬくと。無と云ふ者となるなり。無と云ふ事を知れば則佛なり。爰はちいて釋迦と一致して通達すれば。已と云ふ事明なり。是を出家とい云ふなり。家を捨てて出づるはあよばむ

○今の儒者の儒者はあらず。躬の持ちやうも知らず。大酒を呑み放蕩不埒者なりと誹る事なり。是の甚間違なり。儒者と云ふ者の漢の字を能く知り。讀みがたきをも能く解し。



和歌をも漢文とし。又の聖經をも能く解し。聖人の心を譬を以て教示し講釋せられ。俗人の聖人の行を爲るやうと思ふの甚間違なり。聖人の道を行ふ。儒者のあつかる所よあらず。是の人よよる事なり。いかほど利口よても邪惡の人あり。又愚よても聖人のふるまひの人あり。文學を能く知り。學者と他より譽らるゝ人よても一向の理の分らぬ人あり。數萬卷の書を読み。博識なりと云ひるゝ人よても聖人の意をあらざる者あるなり。故よ聖經を以て其の道を儒者よ能く聽き。已よ能く得て躬よ行ふ者を眞の儒者と云ふなり。然れば世よある渡世儒者の事よ非ずと知るべし

○三教とて釋迦。孔子。老子を以て名づく。釋迦のをしへんはじめ天文より出で、須彌山と云ふ世界を造り。是を第一の教の基として。此の中よ森羅萬象を生ずと雖も。生類を衆生と云つて水の爲よかたちつくり。火の爲よ活物となり。心ある故よ苦樂あり。心と云ふ者の何より来りし者と云ふ事を知り。天地人の大機を以て教を立てし者なり。また孔子のたゞ人間の上の事を以て仁義禮智信の五行の道を立て。今日人間の交をなまよ。此の道を以て定規として世を渡る時の争鬭起る事なし。誠を以て私まる事なしと教へたり

○老子の佛法の道よ似て。天下を治むる道よ非ず。已一人を安居する法なり。天下の人おのゝ皆志違ひて天氣を棄けて生るれば。善人の教へずとも善人なり。惡人のどう教へても惡人なり。故よ教を立て、天下を治むるの<sup>間</sup>違なり。自然天然よして治まる事なり。是を無爲と云ひて。定規ある故よ曲れる物を見。寸尺ある故よ長短を知る如く。光をかくして塵と交り。出る杭うたるとして兎角名利を離れよと云ふ教なり。莊子も同じ様なる事なれど。また別なり。人間を箇よたとへり。ばうふりと云ふ虫よたとへ。また世の賢者をかつむよ見たて。色々と濟世の人を。皆愚物なりと笑ひたり

○牛のうしづれ。馬のうまづれと云ふ譬あり。關侯の隱居東鶴翁君の。隱宅よ庭を造り池をほり。海邊なれば池よ潮さし干す。魚を色々そなちけるよ。大なるの<sup>大</sup>。小なるの<sup>小</sup>と。皆群り游ぶ者なり。人も其の年頃よあらざれば。諸も合のぬ者なり。故よ諸侯の諸侯。旗本の旗本。藩士の藩士。農人の農人。町人の町人。心底をあかし。交を厚うする者。是を信友と云ふなり。然るよ予貴賤上下と交りしよ。かつてわが同輩よあらざれば。心底を明けて話せず。諸侯貴客よの偽り誂ひて。向ふの惡まきを善しと譽め。わが善きを言はず。向ふを才子とし。吾を愚とし。還りて貴人を増々愚よし。嘲弄するよ似たり。信實

名



の諾を爲る時。忍忍みさらされ速けられる者なり。かつて阿侯のみ幼君の時より。予と會して物談を。予が本心を以て惡しきいあしきと云ひ。善きいよきと云ひければ。一々是を聞き容れ感ぜられし。今に至りては四十近くならせられ。大才智の稀なる侯といなりぬ。頃日久しぶりて謁ありし。問もなければあるべからん。話のみしてかへりぬ。無好法師の曰く。交りてあしき友。氣づよき人。酒好む人。高くやん事をなさん人とあり

### 作刀之序

○吾國之以刀劍。所謂萬邦稱利刀者。此地三十六度。而寒暖應時。天氣徹通。而爲中央。且夫近赤道地者常暑。亦近北極地者常寒。所產之萬物。順隨於此度數焉。譬有云巴旦杏者。近赤道者味苦。去赤道者味甘。所以天氣射地。而徹通地中。爲苦甘之二種者也。蓋作刀之術。有燒刃。其燒刃時沒湯焉。其湯非溫且非涼。所謂湯加減是也。古者有正宗者。實爲名家也。夫刀者不折不曲焉。知此術故乎。予雖不知造刀。然以天學知此理矣。古山氏從吾聽此理。當時作刀者。有窮理極術者哉。

文化八年辛未七月

司馬江漢識

### 刀を作る記

夫刀の吾國に産まる鋼鐵を以て世界第一と稱す。刀を作るの術の利く截れ。且折れず曲らざるを以て名刀とす。古人正宗のたぐひ。銘は年月を志す者。必二月八月とす。是焼刃を作る法なり。今刀を作る者。此の理を知る者鮮し。一年にして。春分秋分の寒暖の中央とす。井水の夏月涼にして冬月温なり。水元温涼なし。人の肌躬天氣の爲は温涼を知る。爰を以て古人の曰く。湯加減是なり。今まさし西洋より齋を所のタルモメートルと云ふ器あり。天地寒暖の氣候を計る具なり。春秋の時を待たずして直に知る妙器なり。此の物古になし。故に古人知らざる處なり。然れども古法は倣ひて銘の傍。年月を志す。二月八月とす。然れども冬至より夏至にいたる間は焼刃を作る者の二月とす。夏至より冬至にいたる間に焼刃を作る者の八月とすべし。且又鑄を生ずるの刃の方より。從此の理を知る者鮮し。鉛錫の如き金の生精にして濃なり。故に氣其の中に入る事能はず。鐵は其の生鹿し。剛にして氣中は微達して鐵の中空徹するなり。氣は則地氣にして水氣なり。故に焼刃を作るに及びて。鋼鐵の中又々粟の如くなるなり。爰において地氣益徹通す。夏月尤地氣厚し。故に鑄を生ず。又曰く。古刀は輕く新刀は重し。古刀は鑄を生ず



る事數年。亦之を研ぐ事數度。年を経る故に錆を生ずる事多し。鋼鐵の中悉く空達し。鐵氣虛となる者なり。古刀の名のみにして。斬伐の用をなすべからず。新刀以て用をなすべし。又曰く。世人焼刃の紋を見て。劔刀の相を見る者あり。愚と云ふべし。焼刃自顯る者非ず。亂直燒このみに従ふ。古人の自己標的とする處。其の紋の中あり。いま刀を作る者。刀の文裝とす

文化八年辛未七月

東興二本松 古山東藏誌

西洋天地開闢

○蘭書コロートヒストリイと云ふ。天地開闢の事を志したる書なり。天地開けざる前人なし。故に知るべき理なし。嘗推量して誌したる者なり。其はじめ天の一の日輪を生じて。日氣の爲に水氣を生じ。水氣結れて地球となる。日氣脹凝して土地あらわれ。鳥魚を始とし。人類及禽獸草木を生ずと雖も。無始の始にして記する事能はず。彼の國の書よりアダム。エバと云ふ男女始めて生ず。是吾國に云ふ天神地神の時を云ふなり。アダムの壽九百三十歳。アダム子を生じて兄をカインと云ひ。弟をアベムと云ふ。兄弟争の始とす。金の代と云ふあり。金の代終りて銀の代となり。銀の代終りて銅の代となり。銅

の代終りて鐵の代ありける。天罪の爲に世皆滅せと云ふ。然るに四金の中鐵の世の末に至りて。聖人ノアクス。アルゲなる者あり。是ラメキスと云ふ人の子にして。アダムの苗裔なり。天地滅亡せる事を前より知り。大なる箱匣の如き物を造る。其の製船の如し。洪水にして山の頂に至る。爰において家族と共に彼の船に乗り。風に従ひ波に隨ひ。漂流して亞爾默尼亞國のタウルスと云ふ高山に至り止る。洪水一百五十餘日して竟に収まる。人類悉く皆滅亡して。此の一族のみ助り存命す。是を第二の開闢といふ。蘭語にてハテウエーウエーレルドと云ふなり。ノアクスは三人の子あり。兄をシヤム。二男をヤハツト。三男をセムと云ふ。此の三人歐羅巴諸州を開く。ヤハツトは亞爾馬尼亞國王の累孫と今に云ひ傳ふとぞ。吾日本。唐。天竺と共に已の國より世界を開けしや。古を推して傳記したる者なり。然るに能く是を考ふる。歐羅巴を以て開闢の始とす。夫よりして天竺。唐。日本なり。和蘭近世の説。地の圓球にあらす。僅に楕圓なりと。是水の傾を云ふ。今水の傾きて高さ所の日本の東洋海。亞墨利加の西なり。此の間無人の小島。僅に數ふる程あり。數萬の年を経るに至りては。其の小島國となり。吾日本も亞墨利加の地と接續せるならん。南北の極下に至りては。水の傾あるべからず。只赤道より南



此の方へ五十度外にかさるべし。此の水の傾き満ちぬる時國土亡び。水干て國土あら  
はるゝ時を開闢と云ふ。爰において草木人間禽獸始めて生ずべし。吾日本よて海を隔  
つる事十里二十里の山頂は貝石あり。貝の海の淺き所あり。山下石炭を生ず。樹の  
土中ありて石と化し。硫黄の氣あつて石の如し。多くの筑前生ず。これ開闢以前の  
物か

○伊豆熱海より登る事五十町。日金山あり。絶頂を圓山と云ふ。文化八年未九月亦此の頂  
に登りて四方を眺むる。十國五島山々連りて海に入る。予考へ見るに實は水の減り  
たる状。山々の皺あり。富士のみ出現したる山なり。往古より數千年にして焼け出づ  
る者。又砂凝り結ばれて石となる。土に化して岩となり。岩亦年を積みて堅石となるな  
り。水化して石英。水晶となる。是皆開闢以前の者なり

○紫檀。黒檀。皆埋木なり。豫州の海中。或は土中より扶桑木を出だま。相州箱根山より神  
代木を出だま。奥州二本松の邊より埋木を出だま。其の色黄なり。出羽庄内領飽海郡。文  
化甲子夏六月。大に地震して最上川の水底より古木を出だま。豫州扶桑木より上品  
して紫檀の如し

○蟹あるひは海老石と化せる者。貝の石となると同じ。貝の内は土砂流れ入りて。其の土  
の石となる者の如し。魚或は木の葉石となる者。土中は籠りて其の土の石となりて  
其の物の石となるはあらず

○山領雅伯列傳の語しける。ある人佐賀領の中の島人を家の奴僕とす。僕主人に向ひて答  
ふるに御の字を云はず。主人の曰く。吾日本の俗語は尊敬するに。御の字を以て冠らし  
む。汝之を知らず。僕諾して命に従ふ。正月元旦。嫡子始めて射御す。其の僕矢を採る。的  
は當らずして矢の有る所を視す。僕の曰く。お矢を失へりと。主人閉いて歎かず

○満れのかくると云ふ事。今日常にある誠の教なり。月盈れば虧る。盆は水を盛る充分  
なれば溢る。國治まれば亂る。草木葉みてれば枯る。人老ゆれば死す。始ある者の終ある  
目前の事にして。酒を多く呑めば酔ひ伏す。其の中庸を知る時の君子なり

○人婚姻を爲まは男子は三十。女子は二十。大約唐和蘭と共に定則とす。近年吾日本。男  
子二十に至らむして婚姻を爲す。男女とも二十不足らざる者の子。必愚なり。壯年の  
者の子必才子なり。精氣は神經とてたましひなり。草木の實。能く熟ると熟せざると  
の如し



○其の原を知りて末を考ふる者の智人のふるまひなり。人間の起りの天地より涌き出でたる虫なり。往古の土を穿ちて穴居を。而後已の爲に争闘を起し相戦ふ。今大平の世となり。其の起原を知り。古を感ずる者鮮し。故に多くの人道に背き聖賢の教を失ふ。夫上天子の人道の始り神の末なる故に民是か爲に尊び敬ひ。貢ぐと雖も。上位争ひ。下國を奪ふ。復亦爰において人道を失ひ。漸く武を以て治むるに至る。今既に太平なり。民太平を歡び年貢を以て其の國の王侯に奉る。然るに吾日本米穀を以て食の第一とも。世界の諸邦此の米かつてなし。五十度外にしては。牛肉を以て上食とし。其餘の麥粟稗を以て之。人の生命食にあり。吾國の米穀味甘くして淡く。膏油あつて身體を潤も。また酒は造りて美味。他邦米ありとも日本米の如くならぬ。酒は造りて夏月腐り。味を變ず。故に焼酒とも。味平し。糯米亦他になし。支那月餅と云ふ者あり。八月十五夜は造る餅なり。予長崎に遊ぶ時。之を喰むるは餅にあらぬ。今云ふ落鴈の如し。米の粉を熬りてつくねたる物なり。吾國の如く糯米なき事知るべし。又曰く。天竺赤道に近き諸島サーゴボームと云ふ樹の皮を製して黍の如し。之をサーゴ米と云ふ。其餘黍を以て食とす。吾國の禁にして他邦に船を出ださず。故に他國の事を知る者鮮し。吾等蘭學を以て之を

知る

○元亨釋書に云ふ。空海の傳に曰く。弘仁帝の時諸宗と辨論す。宮中において五色の光明を御座に放つと云ふ。是實説なれば魔法なり。古の名僧皆魔法をなすか。上天子佛像を信じ。僧を重く用ふ。故に傳教。慈覺。弘法の如き者あり。佛書悉く不思議奇妙を以て説せり。浮屠の説を述ぶる時。多くの此の類なり。文法の飾乎。實説にありあるべからず。○魔法に女狐を閨房に畜ひ。之と通じて生みたる子。皆狐なり。然りと雖も心の人なり。此の事或人の話に聞けり。故に人の言を能く辨る者なり。古の傳教。慈覺。弘法の如き。此術をなしたるか。今の僧に於てなし。 フネマツマツマツ

○開原筆記に。久留米侯の醫官にして官を告げて京師に隱居す。正徳年間の人なり。名に藏字に季藤。號に伊蒿子と云ふ。後藤井懶齋と號す

懶齋筆記の抜書及評論

○板倉周防守重宗。京に諸司たる時。其の弟内膳正重昌肥州島原の耶蘇の役で死せる事を計り來る。重宗時、魔事に在りて書を見ても敢て其の故を言わぬ。公事畢へて後退き。家臣を召し成く前集め。從容として謂つて曰く。汝等宜く慶ぶ事あり。吾將に之を



告げんとすとして。人をして訃書を讀ましむ。臣皆涙を垂る。重宗の曰く。何ぞ復せんや。我家ありしより以來。父子昆弟上<sub>一</sub>事ふる。身を君<sub>一</sub>致さざる事莫し。但。いまだ忠死する者あらむ。遺憾なき事能はむ。然る<sub>一</sub>今重昌此の如し。慶ばざるべけんやと言訖りて涙下る雨の如しと。岡本玄淋偶この座<sub>一</sub>在りて復<sub>一</sub>余<sub>一</sub>語る。余江漢曰く誠<sub>一</sub>武門の義士なり

○近來諸國火災頻<sub>一</sub>臻る。如何せば則思まん。昔鄭國<sub>一</sub>火災あり。定公之を禳せんと欲す。子産の曰く。徳を修むる<sub>一</sub>ありと。夫子産の博物の君子なり。もし方術あらば何ぞ知らざる。苟も知る事あらば何ぞ告げざる。火を思むる術。徳を修むる<sub>一</sub>あり

○紫陽處々の子多き事を欲せず。五子あれば二兒を殺す。習うて以て常とす。人も怪しまむ。呼人を以て虎狼<sub>一</sub>如かざるべけんや。後漢の賈彪新息と云ふ所の長として。嚴しく此の事を制して人を殺すと罪を同うす。是よりして數年の間。生育する者千を以てかどふ。曰く賈父が生む所なり

○中家利が曰く。財欲の斷ち易きは浮屠<sub>一</sub>如くなし。何となれば妻なく。子なく。父母を養はむ。糧盡きぬれば。則行きて人<sub>一</sub>乞ふ。人悦びてこれ<sub>一</sub>與ふ。隠れて山林<sub>一</sub>在れば愈餓る。余が曰く。此の如くして猶或は財を貪る者あり。儻其をして僧たらざらしめば。天下の賤丈夫なり

○備陽の舊君宇喜公某疾篤。左右を顧みて曰く我死せば誰か殉死せん。左右いまだ答へず。老臣花房氏某側<sub>一</sub>居てこれを聞き進みて曰く。人鬼途を異<sub>一</sub>す。冥漠の中安ぞ臣僕を隨ふ事を得ん。且君の左右の臣良士<sub>一</sub>非ざる<sub>一</sub>なし。もし君萬歳の後の。悉く是嗣君の股股耳目たり。豈是を無用の地<sub>一</sub>棄てんや。臣聞く。沙門<sub>一</sub>能く死者を導きて善所<sub>一</sub>に赴かしむと。もし必君<sub>一</sub>從ふ者あらん事を要せば。臣當<sub>一</sub>老高僧を國中<sub>一</sub>擇み。殺して以て葬<sub>一</sub>殉せしむべし。是幽途<sub>一</sub>利ある<sub>一</sub>庶幾しと

○余江漢曰く。火災を患る方。子産の曰く。徳を修むる<sub>一</sub>ありと。夫徳と<sub>一</sub>天爲して受けむ。上大王下の貧民を救ひ助くる<sub>一</sub>あり。及ぶべからむ

○又曰く。子の多き事を欲せざる國。筑前。筑後のみ<sub>一</sub>非む。豊前。豊後。日向。或は常陸。出羽。奥州<sub>一</sub>に至りて。農夫早く娶る故<sub>一</sub>。子を産む事<sub>一</sub>十<sub>一</sub>過ぐる。殺す者多し。吾國土地小にして狭し。西洋の諸邦交を隣國<sub>一</sub>も。人の勤<sub>一</sub>事<sub>一</sub>を憂ふ。故<sub>一</sub>かかつてなし

○又曰く。欲を斷ちて僧となる者なし。欲の爲<sub>一</sub>出家も。又曰く。殉死する<sub>一</sub>戰國の世。軍



破れ城落ち。かへるゝ路なし。故に主人亡ぶれば從者殉死も。古の王者病を以て死する時。近臣殉死する事あり。是全く往古人道に闇く。死して亦往くところ有るが如く。浮屠の教ふるゝ迷ふ者か。誠は愚なる哉。亦曰く。病みて死する者殉死を云ふは。是妄語なり。偽りて命を随ふ事をせんや

○北小路法印玄惠が曰く。聖徳太子一代の行は分毫の誤なし。震旦といへども。いまだ曾て是の如き聖人あらざると。愚といふべし。前輩論あり。曰く。太子不是の處多し。君を殺す賊之を討つ事能はむ。反りて賊と共に國事を謀る一なり。守屋無罪これを殺す二なり。臨終に及び唯熊凝増廣が事を奏す三なり。熊凝増廣が事。乃大守寺修新の役是なり。願は夫推古の女主にして太子攝政も。其の將は覺せんとする時。豈言ふべきことなからんや。一言も國家に及びせしめて。唯寺院修新の役を求む。是震旦にも未曾有の聖賢

○伊勢皇太神宮の。本朝始祖の大廟なり。公侯大人と雖も。亦輕々しく參謁せざるべし。況や微賤をや。今士庶より以て。庸奴。靈碑に至るまで。滾々として廟庭に拜する事。殆虚日なし。靈瀆孰か甚しからざらん。道は志す人。豈敬して之は遠ざからざるべけんや

○余江漢曰く。聖徳太子帝と謀りて佛像を尊信す。何の事ぞや。守屋の曰く吾國神明の道にして異域の外道の法を用ひんやと云つて。佛像を難波の堀江に流す。太子帝は奏して守屋を亡き。何れか是なる。佛法今自變して何奈ともする事能はむ。太子天下に益なき道を弘めたる祖なり

○又曰く。伊勢皇太神宮の吾國の始祖にして。上天子の拜すべき神靈なる事明なり。然りと雖も今に至りては萬民の祖神とす。吾國道なく。日向の國體が原に都して人道の祖なり。故に卑賤として拜まへからざらんや

○近世烟草を嗜む事愈衆くして。之を樹うる者も亦多し。最良田美地は限らむ。夫烟草これを多波古と云ふ。林羅浮以て本草に載まる所の良茗と爲るなり。いまだ知らむ。然りや否や。大清人吳興沈穆が著せしところの本草洞詮に稱之烟草とす。其の言は曰く。烟草味辛し。氣温毒あり。寒濕痺を治す。胸中の痞膈を消し。經絡の結滯を開く。然るに臟腑經絡皆氣を胃に聚く。烟胃中に入る頃刻にして身は周し。是以て氣道頓に開け通じ。體と俱に快し。然れども火元氣と共に立たず。人の元氣此の邪火終日焦灼をれば。真氣日々衰へ。陰血日々涸れ暗に天年を損われども。人覺らざるのみ。竊に謂ふ。洞詮に言ふところ。は其の能を説くと雖も。實に則人をして其の毒を知らしめんと欲するのみ。豈



須史の快を爲して終身との患を遺さんや。且夫人初めてこれを吹ふ眩暈せざる事鮮し。煙管の中は油煤あるを。禽蟲誤りてこれを舂む。即死を。峻烈此の如し。咸常に見る處なり。曷洞詮言ふ所を誤ちて而して後。多毒を知らんや。人曰く。豆醬の能。煙草の毒を解す。故に吸者病を成さむと。然れども豆醬の力。安ぞ其の峻烈の氣に克つ事を得ん。銖積寸累遂に大患をなす事必せり

○余江漢曰く。タバコは天正の頃。異人持ち来る。長崎の櫻の馬場に之を種ふ。遂に天下に流行す。此を今思ふに。長崎の者十人あれば三四人之を吸ふ。京の者十人あれば七八人之を吸ふ。江戸の者十人あれば九人之を吸ふ。其の吸ふ事甚夥し。東興の人十人にして十人吸わざる者なし。蝦夷國に至りては之を嗜む。タバコの起原は大槻玄澤著煙録に委し。亞墨利加のタバコ島の産なり。夫タバコの大害は田畑を損む。又火災の患此の微火より發る。屢禁ありと雖も敗る。戻る事なき術あり。今よりして小兒に之を吸わしむべからむ。若禁を背く者あらば父子をして共に死罪す。大約三十年四十年にして漸々止むべし。亦烟具を嚙む者いたまむ。懶齋先生の正徳年間。爾來百有餘年嗜む者妙しとせむ。今に於てをや。其の盛なる事。吸ふ者愈多し。亦烟具を美する事増衆し。これ

制のおもき。禁するものも之を嗜む嗚呼

○又曰く。吾國人氣速き慮なし。窮理を好まむ。已一人の安全を禱りて子孫を思はざるか。櫻頃下總は桃花を見し時。利根川の岸に犬あり。病みて已が手足を齧み喰ふ。奇病と謂ふべし。故に歩む事能はむ。禁のおもきも斯の如きか

○詩歌會議の間。一人卒爾として曰く。我定家の歌を愛せむ。衆口を掩うて笑ふ。其の人報然たり。一儒者側に在りて從容として曰く。和歌を知らむと雖も其の趣何ぞ詩文と異ならん。歐陽子不好杜詩。曾眉山不好史記。杜詩其文非拙。歐陽子蘇子其人非愚。人情各有好惡。瑟雖工如王之不好何かせん

○予江漢曰く。横山安之丞と云ふ人。性馬を好む。五十年の舊友なり。然れども其の好む處余と別なり。信友はあらむ。毎々我を訪ふ。會して談話なし。所謂白頭如新。ある時馬に乗る者と對話す。傍若無人なり。亦或は一書生あり。能辨才子。桂川の家へ會す。桂川の蘭學者なり。集る者同癖。彼の書生一言の話を發せむ。吾よりして愚と視る者愚はあらむ。才子と視る者才子は非む。吾が好と不好と

○寛永中武城に。井上氏執事を土井公と謂つて曰く。公の事を官に決する當らざる所を



し。吾甚其の明。服す。公の曰く。明なるは非也。吾は術あり。曰く何ぞや。曰く會議ごと  
は吾人の上。在り。故は先下坐。各は所見を陳しめ。其の衆言の中は必吾及びざる所  
者あり。因りて其の言を執り。少しく之を潤飾して以て己が見と爲る所以寡過なりと。  
井上瀧これを歎む。土井公書を學ばむと雖も。聖人の語は幾し。

○余江漢曰く。今の脇坂侯も同才

○茶非純良之物。本草を製する者の曰く。多服を忌まざるは靡し。其言は曰く。性和は苦寒  
久しく食すれば。人をして瘦せしむ。人の脂を去り。人をして睡らざらしむ。又曰く。大  
渴酒後。茶を飲む。水腎經に入り。人をして腰脚膀胱冷痛せしむ。蕪ねて水腫癰痺を  
患ふ。大抵茶を飲む宜し。熱して少かるべし。飲まざる尤佳なりと

○茹子の性寒。本草は皆言ふ。人を損じ蒸を動かし。瘡及酒疾を發し。人をして腹痛下痢せ  
しむ

○余江漢曰く。此の二の物毒ある事。本草は述ぶる如し。然れども吾日本これを喰ふをつ  
ねとす。其の毒は當る事なし。タバコを吸ふ者と同じ。又曰く。山中米なき地。病者あれ  
ば米を以て藥とす。効驗あり。都會の人常食とす

○余が舊識竹野氏。身面皴白屢風寒は感む。藥服する事殆虚日なし。後其の君の爲は用ひ  
られ。日夜は近侍也。藥灸せむと雖も亦久しく風寒は感せむ。二年の後氣體補盛なり

○或人問ふ。妻死して子有り。再娶るべきか否か。曰く。曾の大賢すら尚。再。娶らむ。矧や庸  
人をや。其側は在りて曰く。我常は人の子繼母は鞠るゝを視る。其の才多し。實母  
ある者。過ぐ。再娶ごと。必子は益なき。非ずと此の言理あり

○余江漢曰く。人薄弱にしてつねは寒風はいたむものあり。愈身を掩うて養ふ者益感む  
氣を張りて病内に入り。旅中必病者少し。氣の充つる故なり

○又曰く。四十を過ぎて後妻を娶るべからむ。人四十にしては漸く精氣衰ふ。女子と小人  
といは養ひがたし

○或人曰く。子死を知るや否や。余が曰く。未し。然るは先輩これを論むること備なり。彼  
は由りてこれを思へば則言ふ可き者なきはあらむ。夫人の生や。猶月下。一甌水のごと  
し。甌水の吾體なり。月影は吾が氣。有明にして甌毀れ水竭きぬれば。是吾が死なり。月  
影散漫も。是吾が氣の歸るなり。此の如くなるのみ。曰く。何ぞ氣のみを説かんや。曰く。  
理は是氣。上は泊り在らむ。初より凝結せずして別は一物たり。亦曰く。夫人物は天地の



造化の氣となり。氣伸びて息する時の生。屈みて消るる時の死。只是一氣の衆散のみ。散じて其の初は返る。故に曰く。厚始反終。又曰く。鬼の歸なりと。但其の歸る所。蓋君子小人些しく別無きこと能はむ。君子の許多の道理を盡し得て斃る。故に直に天と地と其の化を同うす。小人の私意人欲死に至るまで衰へず。割捨し斷えず。其の氣之が爲に滯結して散せず。甚しき時の厲たり。釋氏謂之爲輪廻。顧に夫君子の死るるや。譬へば火の木を焼くが如し。盡きて灰<sup>ホコ</sup>尋冷えむ。小人の死るるや。譬へば火の金を焼くが如し。化し難く熱亦久し。然れども亦時あつて散む。皆亦天地の公共の氣なり

○余江漢曰く。懶齋儒學を以て死生を云ふ。いまだ理を究めずして死を。生を盡すに似たり。夫人の水なり。水は火の入る時の湯となる。故に活物たり。氣は則天火なり。是大陽の氣水と雜りて地氣となる。和蘭之を淡水と云ふ。人の其の淡水を呼吸とし。之が爲に生を爲す。魚は濃水を吞納する人の呼吸の如し。其の氣人の體中の火を保つに食を以てす。薪の如し。是人の活きて居る所以なり。死するや薪盡き火消ゆ。火は天に歸す。其の機何ぞ君子小人の別あらんや

○蜀の諺に曰く。書を學ぶ者の紙を費す。醫を學ぶ者の人を費す。余友人に告げて曰く。讀みて初學の醫の爲に費する、事なかれ。余江漢曰く。醫は仁術と云ふ。然らば。醫は富家の翁年八十。書を以て病を治す。其の危き事不仁術なり。余は問うて曰く。老いて生を食ふ。是惑ふか。余が曰く。然り。先輩有言。衣敝則欲新之。年頽則不欲舍之。達於用物。惜於用我。不知天地視我。亦敝衣類耳と。由是思之。苟に賢者能者凡世に補有る者に非ずして。強ひて生を食ふに乃惑なり。敝衣も惜しむ事なかれ。翁惘然たり

○余江漢曰く。人の限ある命を以て限なく存生せん事を欲す。百歳の人今日死する事を思はむ。賢は愚と云ふべし。人の老老と衣類家具の古く損じ壞れたる物と同じ。用を爲さむ。頃日朔三と云ふ人。百七歳なり。諸侯貴客其の壽に移<sup>アテ</sup>ん事を思ひて。呼びて謁を値へたりとも。其の齡の似る事か。笑ふべし。朔三無能。世に不用の者乎

文化八年辛未冬十月日誌之

本書の大槻修二氏が神田孝平氏の所藏をかりて寫しかかれたるを今般請ひて原本となしたるなり。一言して大槻氏に謝す。校正者 識



春波樓筆記畢



蜘蛛の糸巻

春波樓筆記畢



○京山小傳

京山姓ハ磐瀬守ハ鐵梅通稱を百樹といひ其の先ハ磐瀬朝臣人上といでたりとぞ近世太田道灌ハ仕へて謀士の聞ありしかの資詮といふハ實ハ京山の祖先なり資詮道灌の世を去るハ及び勢州一志郡ハ遁れて晩年を送りしかハこの後兩三代相繼ぎてこハ居り某侯ハ仕へたり京山の父信明病の爲ハ仕を辭し江戸ハ來りて京橋ハ居り大森氏を娶りて二男二女を擧げたり長子の京傳ハして次子の即京山なり兄京傳ハ有名の戯作者ハして其の著書所殆百五十餘編ありといふ其の作の淫猥なるもの多きを以てこれを非難するものまた多しといへどもとよかくハ中興戯作者中の翹楚たるハ疑なきが如しされハ書肆の梓を乞ふもの常ハ其の門ハ集まり其の作ハ普く天下ハ散布して兒童走卒といへども京傳の名を知らざるものなきハいたれり然れども其の壯年の頃ハ誠ハ放蕩不羈ハして日夜淫樂ハ耽りしを京山ハ然らば幼時より文ハ無ぬるハ武を以てハ弱冠ハして篠山侯ハつかへ後病をもて辭し去り兄の許ハ來りて筆硯ハ從事したりき京山其の技また多く兄ハ譲らむ終始これを助けて怠らざりき其の名の其の技ハ適にざるも畢竟これハ因るなるベシ京山性磊落能く兄ハ似たり五十三歳の時自碑を建て傳を書していそく聊



亡後の勞を省かんと而して今其の歿年を審よせむといふ

二

岩瀬ぬしは。其名普く大八島の外までまられたる醒  
齋京傳翁のはらかある。京山老人よてぞ有りける。年  
比親しくむつびかひせる學びの友よて京傳翁の。過  
きし文化十二年の長月。木の葉と共にちりうせられ  
しおどり千むらの錦も色もあせずどありける。おの  
まいさゝかいとま有りしころ。若りりし代よ。見聞し  
つる事ども。今いいとく替りてぬるが。いと多り  
るを。數々あるき記して。神代のおどりとしも名おほせ  
つるを。百樹老人ひと渡り見て。是よもれとる事の。心  
よ思ひ出でらるまよ。心ようらみぬるおざり書  
きとめて。やがて蜘蛛の糸巻と號けて見せらまし。醒  
齋翁のおもかけほの。のれこりて。いとむづまし。



百樹翁と我との同ト明和の失れとて。只一年のたがひよこをあま。かこみよ八十近くありぬれば。いとゆるしくあつかしく。其世のことどもまのあとり見るこゝちして。ひとりあみもし。涙もさしくまるゝ。あむれめでとくうれしき一卷よあんありける。其よし書き記してよとこもるゝよ。すまひもせず。たゞよもしぶみとあしつるも

弘化三年の夏 七十九翁齋藤彦磨

叙言

齋藤彦磨大人の。おのれが兄ありし醒齋翁の。學の窓よおとづまりのしとる知音の益友あり。されむおのれもまた其琴の緒をつぎて。おとづまが絶えず。机下よ問を擧ぐる事。茲よ五十餘年。猶色あへぬ松風をちぎるにあん。一日。大人を尋ねし時。一冊子を出だして閱を許したまへり。其夜燈下よ開き見れば。神代の餘波と題して。大人の若ありつる昔の今よ移り換りたる事のくさしを。書き集め給ひし物よどありける。大人も今年七十九歳。おのれよ一とせの兄おれむ。大人の記しとる事ども。おのれ猶健よあり。嗚呼。白樂天が七年の夜雨もものあらず。六十年の秋の月を去のぶど多ありける。いでやおのれも神代のおこりよもらされし秋ひろひつゝ。忘具の忘れしを思ひ出だして。硯の海よ筆



をぬらしぬ。其事皆見聞の實跡に據れり。敢て文を飾るべきもの  
からず。草稿だよみさで。心よ思ひ出づれば筆隨ふ。されむ年序  
の前後。自他の語格もいと覺つるよし。此叙言も亦然あり。こそ  
例のものかき雙子いそがれて作るひまをぬすみつゝ。心開しき  
黄昏の軒よ。あみ作るふるまひあれた。蜘蛛の茶巻と題しぬ。

花の雲ちらきををしみ春の夢

まむしとくむる蜘蛛の茶巻

弘化三年丙午更衣の日

七十八翁京山老人百樹

百樹曰。本文の標注は。彦磨翁が筆なり

鞆魯以来。蕩平二百餘年。枝をあらさぬ松の色。千とせの  
春を契りて。昨日の淵に。今日の瀬と換りつゝ。地廣こり  
人集りて。萬民鼓腹の逸樂よ遇ふに。あしこくもかたト  
けあくも。嬉しくも面白くいふに更かり。抑大江戸の繁  
昌とるや。武藏野のよげ水にいづくへかよげけん。あり  
かけの井も跡をさし。絶えて玉川の流に。衢の下をくゞり  
て。千門萬家國のめくみを若水よ汲み。風呂の津よ浴を  
るも馴れ。流れのあくあるものと思ふめるに。いとくゝあ  
しこき事どよし。されば夫を筆よのせて。大江戸の移り  
換りとる事どもを。書き記しとるもの。落穂集。事跡合  
考。むあまゝ物語一名老人雜話。春臺獨話。松下隨筆。龍溪隨筆。我  
衣の類。猶あまゝあまゝと。明和以前の人たちのすきまを



れば。近き六十年の昔をむ。今の若人のしらべ。筆よまめなる人のもよふしたるがあるべけまど。世よ出でざるよやあらん。こまら思ふよつけても。彦磨翁が神代のなごりの冊子の。若き人よひらがを浦島が玉手箱よどありける

蜘蛛の糸巻目録

茶番	一頁	天ぶらのとじまり	十八頁
扇 <small>うちゅうり</small> のぼり	三頁	琴曲の變格	十九頁
せせうり	四頁	料理茶屋	二十頁
さごさい	四頁	かくし費女	二十一頁
女髪結の起立	四頁	疫病	二十二頁
假宅 中洲	六頁	市中灰降る	二十三頁
十八大通	九頁	行人坂の大火	二十五頁
墨河が智計	十一頁	白刃仇を斬る	二十五頁
妓風	十二頁	乞食鐘馗は扮出を	二十六頁
娼家よ樓號の始	十三頁	朝參	二十六頁
文墨の名家	十三頁	天鼓の妖	二十七頁
白猿の質朴	十四頁	火事	二十八頁
鼻紙袋の始	十六頁	うちこそし	二十九頁
葉子の變格	十七頁		

蜘蛛の糸巻目録



市中の人数	三十頁	兒ども遊び	三十六頁
賢臣舉げらる	三十二頁	天明中戯作者	三十七頁
凶荒年表 永代橋崩る	三十三頁	草雙紙の變格	四十頁
追加目錄			
手遊盆太鼓	四十二頁	天明中俳優	五十頁
紙鳶	四十三頁	中車死亡	五十頁
たばさし	四十四頁	芝居三日替り	五十一頁
町藝者	四十五頁	春駒の淨瑠璃	五十二頁
<small>番附は赤もろこし虫の樂 井酸漿</small>	四十五頁	關の戸淨瑠璃	五十四頁
豪氣	四十七頁	高尾の淨瑠璃	五十四頁
初鱈	四十七頁	山王祭禮	五十五頁
風邪流行	四十八頁	祭禮萬度	五十六頁
十八大通	四十九頁		

蜘蛛の糸巻目錄終

蜘蛛の糸巻

岩瀬京山 著

茶番

おのれ京山。明和六年己丑の歳の生よて。天明元年辛丑。十三歳なりき令弘化三年丙午よき  
大十六年まへ。れば物心ありて。見聞したる事ども。心の底よたもちたるをおもひ出だす。天明元年の十二月ある所なる勢家よて。年忘れとて茶番といふ事ありし。客は大家の留守居たち。或は權家の歴々たちなり。茶番の題は。「鬼は鐵棒。」二階から目撃。「猫の尻へ木槌などいふ卑俗の諺なり。此比神田邊に住したる生花の師匠門人の小娘を強淫して。淫門を破りし事起りて。獄に下りし事。巷説雷同の比なりければ。彼の猫の尻へさいつちと云ふ題を強淫の事よ趣向したる。此時は此廓のたいこもち名高かりし五町と云ひし者也。是は猫の題を取りたる勢家の命じたるなり。扱茶番の日の晝七つ比。吉原よて勝れて美しき禿十四五人。扇屋。松葉屋。丁子屋。玉屋などより五町が才覺よて。やとひたるを家形船よて米り。一石橋よつけて上り。茶番ある家の門より。廓中の姿のまゝなる禿ども入り

神田小柳町  
に住める。  
生花の師  
匠。其邊の  
町。其の娘  
門第ある名  
を松と云ひ  
し由。其比  
のそより頂  
いさいか  
心の底よの  
これり



たるを。おのれ十二三の時。目の前に見たり。此時おのれ此勢家出入をも醫者の悴と同く。茶番の見物。禿どもと共。門に入りし時あり。 叔猫の茶番。成りし時。五町坊主のかづらをかぶり。猫の禿。花ををしふるさまをなし。強淫。およばんとする時。十二三人の禿出で。五町を打ちさくさまなどし。つひは裸。なしたる時。張子のさいつちを五本持ち出だし。まこし歳たけたる禿。五町が尻をうちて。餅つきさまをなま。此時大小の鼓を打ち。三味線。て餅つき。の歌をうたふ。皆座中の歌妓なり。五町の猫の身振りをして笑を取り。禿ども。米の粉をふりかけられ。箕の中。いれられ。禿ども。引きづられて。樂屋。入る。一坐絶倒せざる。なし。叔五町かたちを改め出づれば。跡より。大きな三方へ。蒲色。びろふ。どよて作りたる煙草入。同じさせる筒へ。させるを。入れ。うち違ひ。よとちつけて。さいつちと見せたるを。大三方へ。積み上げしを。前。置きて。五町が口上。是。何様の茶番なりと。面白く口上をのべ。三方なるを。總景物とて。連中へ。禿。よくばらせけり。猶ありし中。おもしろし。おもひて。今。お。すられざるもあれど。さのみ。いと記さむ。 此席中の酒池肉林。さらなり。其比。躍り子と唱へし時。鳥の藝者ども。十四五人。酌を操る。鬼。鐵棒。といふ題の景物。其比。やりし銀の延べのさせる。虎の皮の煙草入なり。茶番の連中。多かりし故。夜明けたれども。戸を開かぬ。燭をてらして。茶番の。てして。朝五つ比なりし。此一事。て天明の時勢を

知るべし

うちえうり 扇賣 いかのぼり

かゝる世の中なりしかど。猶古質の残りたる事もあり。此比。今の如く。繪店。て錦繪の團扇。の稀。よの賣るもありけれど。そし。ぐ。よの繪見せさへなけれど。團扇を物。入れて。香負ひ。竹。通したるをもかたげ。ほんま。ぶうち。え。うち。更紗。うち。ほぐ。うち。よ。びて。賣りありく。大方。若衆。ごさ。え。なり。錦繪の團扇。一本。十六文。なり。其。鹿末。なりしを。ま。るべし。扇も。二枚。張。四十八文。繪。の。立木。一。片馬。居浪。一。日の出。雲。舞。鶴。の。羽。など。い。か。も。鹿末。なる。繪。なり。こ。お。の。れ。が。七。つ。八。つ。の時。なり。安永四五年。安永九。改元。 其。後。十二三。の。比。天明。元。年。 いたりて。字。扇。と。唱。へ。て。龍。蘭。鶴。の。字。など。雙。鉤。字。の。め。ぐ。り。を。藍。又。紫。色。ど。り。たる。を。珍。とし。寶。とし。て。喜。び。ける。よ。今。の。字。扇。の。下。品。とし。て。子。供。よ。ろ。こ。び。む。又。扇。賣。といふ。もの。あり。けり。扇。の。形。したる。箱。を。いく。ら。も。重。ね。たる。を。肩。か。き。あ。ふ。き。と。よ。び。あり。く。其。姿。は。深。め。ゆ。か。た。よ。白。き。脚。半。じん。く。む。し。より。お。ほ。か。た。い。な。ま。め。きたる。男。あ。み。笠。を。か。ぶり。呼。び。入。る。れば。地。紙。を。見。せ。其。座。を。て。を。り。て。う。る。なり。是。正。徳。比。の。遺。風。なり。し。寛。政。の。い。たり。て。絶。え。たり。



初代市川門之助と云ひし凡役者扇賣の狂言をしたる事ありき

市川門之助〔幼名辨藏〕 市川男女藏〔幼名辨之助〕 市川門之助〔幼名多門〕

こせりり さごぞい

同じ頃。餅米をいりてふくれたるをこせといひて。是を必。年の始の遊業より。家毎よく事なりし故。大晦日の明ぼのよ「こせやこせ引と賣りありく聲。いと春めきて心よかりしも。今のまかむ

同じ比。辻寶引として。寶引の糸を持つ物よくさぐぐの手遊を入れならべ。糸一筋の價。手遊のよきあしきよ依りて高下あり。當れば隨意の品一つをとらす。此寶引いくたりもこゝかしこの辻よ立ちて。さまざざい／＼と呼ぶ。兒ども此聲をき／＼つけ。足のふむ所を知らむ。此寶引大方の。松の内を盛りとし。十日比よ止む。新春の一つの景物なりしよ。寛政よ禁令ありて。聲なし

女髪結の起立

安永の末。山下金作といふ女形下り。深川の榮木といふ所よ住む。時鳥の正旦なりき。此者のかつらつけかつらの髪結あり仲町の妓よ通じたりしよ。或日此妓の髪を金作がかつらの襟よゆ

再探山下金作  
寛政七年  
お下りて下り  
り。安永の末  
の二度目の下りあり

ひけるを。妓輩うらやみ。謝物をおくりてゆこせけるよ。後ハ一度を二百錢と定めけるよ。結をきるもの多ければ。かつら附を止めて。妓の髪を結ぶを渡せとしけり。甚吉といふ若き男弟子となり。一度を百つよよて。妓家の仲居どもの髪までゆひけるよ。百つよ故。百さん／＼と呼ばれ。つひよ名となりけり。此百の擧音聲。天然婦子の如く。男よ情をゆるをを好みけりとぞ。されば女の業なる女の髪を結ぶ事をも。習ひしならん。此者後ハ八丁堀大井戸といふ所よ住み。藝者ども或ハかこひもの杯ゆひあるさ。女の弟子ありて。弟子よ髪をかせる其跡へまこりて結ぶ。うかれ地女など。結ばれば。茶屋ものなり。驕りなりとして。他よ職らるゝ故。此惡風俗他の女よ移らざりけり。この寛政二三年の比なり。是女よ髪結といふ惡風起りたる起源なりけり。其後百が弟子の玄孫弟子。或ハ自立の者も多く出米る故。起立の百をくづして。五十となり。三十二文。又ハ二十四文の安費もありて。女髪結千筋よ列れ。招く物も。櫛の齒を挽くが如くなれば。今三十代の市中の婦女ハ。髪結ふまべを知らざるよ至る。是他なし。かの百が妖風の毒を残しよなり。然るよ。維新の御時よ遇ひて。此妖風一時よ止まるハ。忝くも賢き事よぞ有りける

百樹再按。天保十五年辰。大坂板よ二千年袖鑑と云ふ事物の始源の年數のみを記した



石物。女髮結の明和七年より始まるとあり。思ふ。件の金作がのづらつけ坂の髮を。後より女髮結を渡せとしたるも。大坂の風よりたるなるべし。まかりとをれむ。女髮結の大坂を始とをべし。



あり宅 中洲

天明四年辰四月十六日。廓中水道尻秋葉常燈明より出火。廓中残らを焼亡して。假宅の兩。園。並木。駒形。黒松町なりき。此時兩國なる今の淡雪の店。橋より左の方の二階計りを。吉原の若菜屋假宅よししたる。よ。あむ雪の隣。二軒をか。何者よ。世の中のかかさまよことなりよけり。上より若菜。下よあむ雪。同七年未の十一月九日。角町より出火。假宅。大橋。深川。新地。中洲。深川宮永町。高橋此假宅の己れ十七歳の時なり。抑中洲といひし。今五十代の人。も名のみ聞きてあるまじき。論よかよむ。中洲といふ大橋より南の方。川岸凡三丁餘。川中への二丁むかり安永の末よ埋め立てたる新地なり。名主の二人。湯屋三ヶ所。人家のいか計りありしやらん。覺えむ。行くての道の。大小三四路も有りしやう。覺ゆ。かくし賣女

按じると。中洲の安永二亥年ひらけ繁榮。十二年よして寛政三年戊の秋。御政筆よて町家取り拂ひ。理め立ありて。元の川つらとをれり。

の家あり。岸よの水茶屋鱗次として軒を並べたる中よ。大橋の方の岸よ臨みたる所よ。四季庵といふ。大坂高臺の料理茶屋有り。三夏の北の岸よのぞみたる茶見世の軒よ。提灯をかけ渡したるが。水面よ映むるさま。速目よの龍の都のことよ。浮み出でたるかとおもふ。夜見世の見世物も多かりし中よ。鶴市といふ非人。歌舞妓どもの身ぶりこそいろをなまし。妙を得て。まかも美男よてありし故。婦女子よまかれ。濫行もありしとぞ。扱其構をなしたるさま。今の見世物芝居よか。てらされど。木戸錢の一人前百銅なり。是よて。鶴市が藝の妙を志るべし。此比。市川八百藏とて。婦人よの殊さらひ。みさ有りし立ものよ。此鶴市常もよく似たる故。顔をつくり。衣裳を飾り。其景色をつかへば。八百藏とよあるが如し。是鶴市がこ。りし所以なり。なま所の藝。もべて相手をとらむ。物ぐるひ。物語。扇の手など。其外さま。の事を八百藏。團十郎。仲藏。團藏。菊之丞。里好。形。又の中役者迄も。其て色。のさらなり。顔つき身ぶり。それかあらぬかと。目をぬく計り。奇々妙々なり。始めの常なみの非人。手つま一つ二つなし。扱鶴市出で。一藝をなし。是をひと幕として。打ち出だす。一まく一人前百銅

中洲ありし比。五月節句より。夜見世ありき。鶴市の外。見世物。辻費。千燈萬照かゝる中



。彼の四季庵へ五明樓扇屋宇をこしめ。北廓の娼家こゝかしこへ假宅して。夜見世の賑ひ。天明中の一壯觀。筆も詞もつくしがたし。猶七八十の老人も尋ねべし此時五明樓の高橋よりと云ひしをかりて。抱の遊女許り。こゝよて來を迎

因いいふ。花街焼亡。明暦の大火。元吉原類焼して。同三酉年。新吉原に移り。十六年經て。延寶四辰年十一月七日。江戸町二丁目花屋といふ遊女屋より出火。一廓残らぬ焼亡。此時假宅なし。此後九十三年經て。明和五子年十一月七日延寶出火と同月同日江戸町貳丁目。四

つ目やと云ふ遊女屋より出火。一廓焼亡。假宅始めて願濟み。今戸。橋場。山谷。鳥越此のち三十年經て。明和八卯年四月七日。揚屋町河岸梅屋遊女屋出火。假宅前より同じ。一ヶ年經て。同辰年二月廿九日此年の秋安永と改元目黒行人坂より出火。南風驟を飛ばし。一廓焼亡。假宅。

兩國橋邊。深川。其後十年經て。天明元年己の九月晦日。伏見町家田屋茶屋より出火。一町焼亡。假宅なし。四年經て。天明四辛辰年四月十六日。水道尻秋葉常燈明より出火。假宅。兩國。並木。駒形。黒船町。其後四年經て。天明七未年十一月九日。角町より出火火元き。假

宅。大橋邊。深川新地。同八隣前。中洲。高橋此後八年經て。寛政六年四月二日。江戸町二丁目丁子屋大家の遊女屋より出火。假宅。田町。聖天町。山の宿。尾町七年經て。寛政十二年申年二月

此時、葛山人の。みゆりの。鳥居の。あし。かみ。の。び。あ。が。ら。ね。び。見。え。ぬ。假宅

廿三日。田浦龍泉寺門前より出火。假宅同所。十二年經て。文化十三子五月三日。京町の娼家海老屋吉助より出火。假宅同所。此後今年まで。三十一年のあいだの焼亡。今の耳目もあれば。さのみらとして記さむ

十八大通

元祿の比。紀伊國屋文左衛門といふ材木の問屋。本八丁堀壹町残らぬ持地面にて。大慶高堂を構へ。片名一呼びて紀文といふ。今も其名人口に繪炙を。其角門人にて俳名を千山といへり。其角五元集も。千山が宅にてと云ふ句二三首見えたり。紀文ひとせ歳越の夜。花街に遊びて。豆の中へ小粒金を交へて。豆蔕をしたる事。口碑もつたへ。物の本もみ。委實に己の家元屋京師。紀文かゝる奢侈に家産を破り。晩年深川一の鳥居の邊に住し。こゝに歿せり。其後。俳諧の宗匠某。紀文が住みまてしを買ひける。居間の天井紙張にてありしが。いたくふるびたれば。經師に張替さる時。經師言ひけるやう。こゝに何人の住ひし跡やらん。あるじの物好みよふけりたる人よて有りけん。天井を張りたる紙を見る。一紙のあらを。日本國中の紙なりといひけるよし。ある隨筆に見えたり。かもふに紀文零落しても。心のかごりかくのごとし。此一を以て盛なりし時を知るべし。今いへば是世



いたくなり。せいたくの驕奢の陰病なる物なり。此病ある者。黄金湯を用ふれば。ままく  
 上昇して。治しがたく。その上遂に破財亡家の死にいたる。享和の比。川柳照の句。唐  
 やうで賣店と書く三代目といひ。よきいましめどかし。叔本編の神代のなごりよもいそれ  
 しごとく。天明の比。花車風流を事とせる者を。大通。又ハ通人。通家など。唱へて。此妖風  
 せよ行ゆる。其中よも。十八大通として。十八人の通人ありけり。首長たる者ハ。日本橋西河  
 岸の。材本屋  
と開十曉御藏前なる。札差大口  
屋治兵衛文魚なり。ある日。十八人の通人集會ありし時。文魚銀  
 のそりがねよて。髪を結びて出でしを通者も見て譏り云ふやう。文魚が銀の針がねハ。今  
 日一日の晴ならん。さのみ稱をべきよもあらむといひしを聞きて。此後ハ平日も銀の針  
 がねよて髪を結びせしとぞ。其比。巷説よもいへり。此文魚も紀文の如く。零落して。御廐  
 川岸の格子作り。間口二間むかりの家よ住ひたる比。ある貴人の御隠居。文魚が河東節の  
 上手なるを聞き給ひて。召されける時。上るり終りて。別の座しきよて。酒食をたまひ。文  
 魚なりとて。目錄ハ多からむ。八丈縞五反給たり。文魚が連れ来りし名のきこえたる河東  
 ぶしの三絃彈よて。藝を業とせる者なれば。目錄を給たりけり。時ハ文魚たまものハ反物  
 を今日ハたいざなり。是ハ寸志なりとて。一人ハ三反。一人ハ貳反。其座よてとらせたる

を。貰ひし三味線彈。昨夜のやうの事有りしとて。亡兄ハ語りて。文魚を稱したりき。おの  
 れかたそらよありて聞きぬ。三味線彈ハ。山彦源四郎なりき。紀文が天井の紙。文魚が八丈  
 縞の一對の奇談と云ふべし

墨河が智計

北廓よて娼家の富鏡なりしハ。明和申よて。大上總屋なり。あるじが俳名を一庵といへり。  
 淺草三社祭禮のありし時。幼き悴を大名の行列よいでたせんとて。道具類残らむ新よ  
 作らせ。二日ねり物よ出だしたる費。三百金なりとぞ。此一事を以て。富鏡を知るべし。此  
 大名の真似したる悴。おろかなりし故。家次第よおとろへて。家亡び。晩年剃髮して。俳諧  
 師となり。名を百路と云ひて。天明の比。藏前邊よ住し。富家の遊び坊主となり。亡兄ハ俳  
 諧の上の事など度々聞きよ来りしが。をかじき坊主よて。是が事よハくさくぐをかじき  
 話あれど洩しぬ。此大上總屋の後世よ聞えしハ。江戸町一丁目扇屋宇右衛門墨河と號を。  
 妻をいなきとて。夫婦とも。歌も書も。千陰門人よて。天明中の盛家なりき。亡兄またしか  
 りも故。二人が短冊など。今猶家よ残れり。墨河が親ハちいさき娼家なりしハ。墨河よいた  
 りて。大家よなりしとぞ。天明の比。初代花扇東江門人なり。遺墨世よちり残る中よ。見ゆ



くり指荷の頼。自筆のよみ歌のこれり。同じ時。同家の瀧川。千蔭門人なり。千蔭も東江も。天明中の名家なれば。これが門人となしたる。墨河が一つのたかりことなるべし。あか思ふ由り。墨河が計りて。一ヶ月一度づゝおめらんと稱せらるゝ者へ。客の多少より。品より位を付けて。褒美をとらまなり。然るゝ瀧川が客の。花扇よおとりたる事多かりければ。其後の時位よき品をよぎと瀧川方へもたせやり。花扇の表座敷。瀧川の裏座敷。三間つゝきありふたゝび輕き品なるをもたせやり。使よよぎといをまるやう。今の表座敷へ參るものなりしを。間違しとてよき品の花扇へもち行きたりければ。瀧川心よ不足して。憤發の心を起し。勤よ精を出だしければ。兩妓一雙の珠光をなしくとど。是亡兄が自賤の語なり。おもふよかゝる才量ありし故。家を起しつらん。墨河一代の盛なりし。親骨折れし後。今扇の風ありやなじや。

妓風

天明の後世年むかり。文化の比まで。おめらんと稱せらるゝ。大方の横兵庫といふ風の風なりし。近年此風たえむかしを失ふ。さしかざるかんざし。昔よまさりて。大きよなりしなり。天明の比。いかよも細くかるげなり。されば今の如く。馬蹄の頭よのせざり

き。女の髪一名の結ひぶりの始り。唐輪。其後。兵庫。次よ島田。北髪一名。次よ志ひたけ。其浴草一名の余が歴世女装考。圖説を擧げて記しぬ。近きよ上梓せん。

娼家よ樓號の始

娼家よ樓號を付けはじめし。五明樓なり。扇屋五明の別名。墨河好事なりし故。樓號をつけし。同時に。鷓舌樓丁子屋。鷓舌。丁子漢名。松葉屋を。松葉樓又の館といひし。今をこしあるべし。うちつけよてをかしからむ。玉屋を玉樓。玉の字うごかしがたし。近來のさまざまの樓號あるが中よも。大黒屋を甲子樓といひし。いさゝかよ。五明。鷓舌。松葉の三軒。今絶えたれば。獨り玉樓のみ光りをうしなとざる。代々主人縮服よて。萬事素をつとむと聞く。以茲光を失ひざるならん。返々も今いふぜいたく。亡家の毒水なり。若人たち慎むべし。懼るべし。

文墨の名家

天明を盛。歴々たる名家。儒子。曲山北勝の二家。詩の。西野。市川小左衛門。和歌の千蔭。書家の親和。東江。其寧。淳信。畫家の朱紫石。唐浮世繪よ北尾重政。書も勝川春章。角力よ谷風。小の川。遊女よ花扇。瀧川。俳優よ團十郎。白中村仲藏。狂歌師よ四方赤良。山人。朱羅漢江。元の木阿彌。

文化の比よ至りて。深川新地よどの岡場所。大親樓。百歩。推杯似げ。み號を犯せり。料理茶屋。蕎麥屋。かど皆借上。ある世とありぬ。

此比三井親和の。高名。あれた。煙草入女帯。し。浴衣手。